

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第145集

かみはしか
上橋下遺跡
かのりがわ
鹿乗川流域遺跡群
(高圧線鉄塔移設地点)

2007

財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

序

愛知県安城市は、県東部にあたる三河地域のやや西側に位置し、市の中心部は三河湾から20kmほど内陸に入ります。古来より、東海道、矢作川を通じて人々の往来する場所であり、西三河地域の中心的都市として、現在までその役割を担ってきました。

上橋下遺跡、鹿乗川流域遺跡群が位置する矢作川右岸では、碧海台地上を中心として、原始の時代より、我々の祖先による生活が営まれてまいりました。このことは、周辺地点で確認されている遺跡、過去の発掘調査結果が物語っています。

安城市南東部を流れる鹿乗川では、このたび愛知県建設部河川課によって、河川改修が行われることとなりました。(財)愛知県教育サービスセンター 愛知県埋蔵文化財センター（当時）では、愛知県教育委員会を通じて、愛知県建設部からの依頼を受け、工事に先立つ事前調査を行いました。その結果、弥生時代・古墳時代・古代を中心とした遺構や遺物を検出することができ、この地の歴史に新たな資料を提供することができました。

調査にあたりまして、愛知県建設部河川課、愛知県教育委員会、安城市教育委員会をはじめとする関係諸機関、周辺地域の皆様から多大な御協力をいただきましたことを、深く感謝申し上げる次第です。

最後に、本書がこの地域の歴史理解と、埋蔵文化財研究の一助となれば幸いですと存じます。

平成19年3月

財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団

理事長 林 良 三

例 言

- 1 本書は愛知県安城市川島町・古井町地内に所在する、上橋下遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、愛知県建設部河川課による鹿乗川改修工事に伴う事前調査として、財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター（当時）が、愛知県教育委員会を通じて委託を受けて実施した。調査総面積は5400㎡である。
- 3 発掘調査は、平成13年10月～平成14年3月に4200㎡、平成15年1月から3月に600㎡、平成16年1月～3月に600㎡を実施した。さらに平成17年度には調査報告書作成のため、整理作業を実施した。
- 4 現地における発掘調査は、平成13年度に愛知県埋蔵文化財センター調査課主査・竹内 睦（現加木屋南小学校教諭）、同主任・池本正明、同調査研究員・鈴木 裕（現西端小学校教諭）が担当し、平成14年度には同主査・宮腰健司、同調査研究員・成瀬友弘（現豊野高校教諭）が担当し、平成15年度には同主査・小嶋廣也（現知立東高校教諭）、同主任・松田 調が担当し、平成13年度の調査では、国際航業株式会社に調査事業の支援を依頼した。
- 5 調査にあたっては、愛知県建設部河川課、愛知県教育委員会文化財保護室、愛知県埋蔵文化財調査センター、安城市教育委員会をはじめとして、多くの関係諸機関の御協力を得た。
- 6 本書の編集は松田 調が担当し、執筆分担（詳細は目次参照）は以下の通りである。
第I～V章・第VII章=松田 調、第IV・V・VII章=池本正明、第IV・V章=宮腰健司、
第VI章=森 勇一（愛知県立津島東高校）、鈴木 茂・植田弥生（株式会社パレオラボ）、
鬼頭 剛（本センター調査研究員）、第V・VII章=樋上 昇
- 7 報告書整理作業については松田 調が担当し、整理作業には次の方々の参加を得た。
平野昌子（調査研究補助員）、鈴木小百合・野中栄子（整理補助員）
遺物の実測、トレースは、国際航業株式会社に作業を委託した。
- 8 本書掲載の遺構写真は、池本・宮腰・松田が撮影し、遺物写真は、金子知久（写真工房 遊）に撮影を依頼した。
- 9 本書に示す座標数値は、国土交通省告示に定められた平面直角座標第VII系に準拠し、「世界測地系」で表記した。また、海拔表記は、東京湾平均海面高度（T.P.）の数値である。
- 10 本書で示す土色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」による。
- 11 本書中の各遺構名については、冒頭に調査区を付記した。調査区は平成13年度を01A区と01B区、平成14年度を02区、平成15年度を03区とした。
- 12 遺物の整理番号と登録番号の対象は、表として添付のCDに収録した。
- 13 遺構写真や図面類などの調査記録は、本センターにて保管する。
- 14 出土遺物は、愛知県埋蔵文化財調査センターにて保管する。
- 15 本書の作成にあたり、城ヶ谷和広氏・藤澤良祐氏には出土遺物の時期的解釈において、多くのご指導を得た。さらに本遺跡の調査、報告にあたって、次の諸氏、諸機関にご指導、ご協力をいただいた。記して感謝したい。（五十音順、敬称略）

安達亜紀子 岡安雅彦 小田寛貴 鈴木智恵 鈴木とよ 山崎純男

安城市教育委員会 名古屋大学年代測定総合研究センター

目 次

第Ⅰ章 調査の経緯	
第1節 調査に至る経緯	(松田) 1
第2節 調査の経過	(松田) 1
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	
第1節 遺跡の位置	(松田) 2
第2節 歴史的環境	(松田) 4
第Ⅲ章 調査の概要	(松田) 6
第Ⅳ章 遺構	
第1節 基本層序	(松田) 7
第2節 遺構	
第1項 01B区	(池本) 8
第2項 01A区	(池本) 10
第3項 02区	(宮腰) 11
第4項 03区	(松田) 14
第Ⅴ章 遺物	
第1節 概要	(松田) 51
第2節 主要遺構別出土遺物	
第1項 弥生時代から古墳時代	(宮腰) 51
第2項 古代	(松田) 55
第3項 中世	(池本) 55
第4項 戦国時代以降	(松田) 56
第5項 木製品	(樋上) 56
第Ⅵ章 自然科学的分析	
第1節 上橋下遺跡から産出した昆虫化石群集	(森) 78
第2節 上橋下遺跡のプラントオーバー	(鈴木) 85
第3節 上橋下遺跡出土木製品の樹種同定	(植田) 89
第4節 堆積環境	(鬼頭) 92
第Ⅶ章 総括	
第1節 01A区SX02について	(池本) 101
第2節 木製品	(樋上) 105
第3節 まとめ	(松田) 110

図表目次

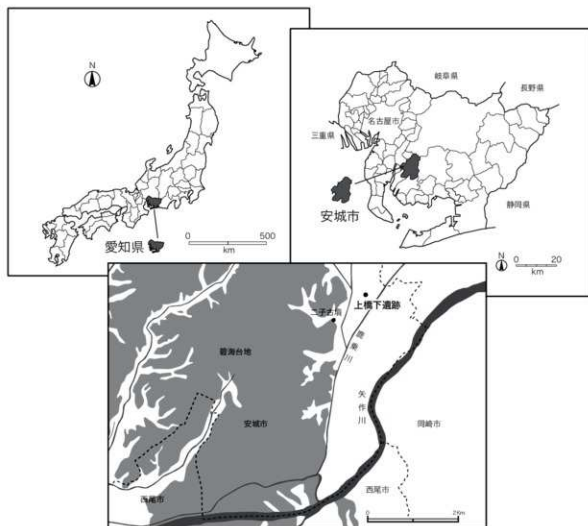
挿 図 目 次		表 目 次	
第1図	遺跡位置図	第46図	03区SX104周辺遺構平・断面図
第2図	遺跡周辺地形図	第47図	出土遺物(1)
第3図	周辺遺跡分布図	第48図	出土遺物(2)
第4図	調査区配置図	第49図	出土遺物(3)
第5図	基本層序概念図	第50図	出土遺物(4)
第6図	01B区(下面-1)全体図	第51図	出土遺物(5)
第7図	01B区(下面-2)全体図	第52図	出土遺物(6)
第8図	01B区(下面-3)全体図	第53図	出土遺物(7)
第9図	01B区SZ01・02平・断面図	第54図	出土遺物(8)
第10図	01B区SZ03平・断面出土状態図	第55図	出土遺物(9)
第11図	01B区SZ04平面図	第56図	出土遺物(10)
第12図	01B区SD64断面・出土状態図	第57図	出土遺物(11)
第13図	01B区SZ05(SD50・54)遺物出土状態図	第58図	出土遺物(12)
第14図	01B区SZ05平・断面図	第59図	出土遺物(13)
第15図	01B区SD05遺物出土状態図	第60図	出土遺物(14)
第16図	01B区SZ06平・断面図	第61図	出土遺物(15)
第17図	01B区SZ07平・断面図	第62図	出土遺物(16)
第18図	01B区SZ08・09平・断面図	第63図	出土遺物(17)
第19図	01A区(上面-1)全体図	第64図	出土遺物(18)
第20図	01A区(上面-2)全体図	第65図	出土遺物(19)
第21図	01A区(下面-1)全体図	第66図	出土遺物(20)
第22図	01A区(下面-2)全体図	第67図	分析試料採取地点
第23図	01A区SB01平・断面図	第68図	上橋下遺跡のプラント・オパール
第24図	01A区SK13平・断面図	第69図	上橋下遺跡におけるボーリング調査および深堀実施地点
第25図	01A区NR01平・断面図	第70図	地点1(01A区)のボーリング調査における柱状図
第26図	01A区SX02詳細図	第71図	地点2(02区)、地点3(02区)、地点4(03区) における南北層序断面図
第27図	01A区SZ01平・断面図	第72図	調査地点周辺の等高線図
第28図	01A区SK18平・断面図	第73図	01A区SX02概概念図
第29図	01A区SD33平・断面図	第74図	01A区SX02杭検出状況
第30図	01A区SX02断面図	第75図	上橋下遺跡出土木製品の品種・樹種組成
第31図	02区1面全体図	第76図	弥生中期の木製品出土遺跡
第32図	02区2面全体図	第77図	愛知県内遺跡出土木製品の品種・樹種組成比較グラフ
第33図	02区3面全体図	第78図	調査地点方形溝墓位置図
第34図	02区東壁土層断面図		
第35図	02区西壁土層断面図		
第36図	02区南壁・東西ベルト土層断面図		
第37図	02区SK28・SK30・SZ01土層断面図		
第38図	02区1・2面遺構変遷図		
第39図	02区SZ01・02遺物出土状況		
第40図	03区(上面)全体図		
第41図	03区(下面)全体図		
第42図	03区土層断面図		
第43図	03区SK01・07・148平・断面図		
第44図	03区SD101・102・SX101・102平・断面図		
第45図	03区SD101・102・SX101・102平・断面図		
第46図	03区SX104周辺遺構平・断面図		
第47図	出土遺物(1)		
第48図	出土遺物(2)		
第49図	出土遺物(3)		
第50図	出土遺物(4)		
第51図	出土遺物(5)		
第52図	出土遺物(6)		
第53図	出土遺物(7)		
第54図	出土遺物(8)		
第55図	出土遺物(9)		
第56図	出土遺物(10)		
第57図	出土遺物(11)		
第58図	出土遺物(12)		
第59図	出土遺物(13)		
第60図	出土遺物(14)		
第61図	出土遺物(15)		
第62図	出土遺物(16)		
第63図	出土遺物(17)		
第64図	出土遺物(18)		
第65図	出土遺物(19)		
第66図	出土遺物(20)		
第67図	分析試料採取地点		
第68図	上橋下遺跡のプラント・オパール		
第69図	上橋下遺跡におけるボーリング調査および深堀実施地点		
第70図	地点1(01A区)のボーリング調査における柱状図		
第71図	地点2(02区)、地点3(02区)、地点4(03区) における南北層序断面図		
第72図	調査地点周辺の等高線図		
第73図	01A区SX02概概念図		
第74図	01A区SX02杭検出状況		
第75図	上橋下遺跡出土木製品の品種・樹種組成		
第76図	弥生中期の木製品出土遺跡		
第77図	愛知県内遺跡出土木製品の品種・樹種組成比較グラフ		
第78図	調査地点方形溝墓位置図		

表 目 次

第1表	調査行程	1
第2表	上橋下遺跡から産出した昆虫化石(1)	82
第3表	上橋下遺跡から産出した昆虫化石(2)	83
第4表	上橋下遺跡から産出した昆虫化石(3)	84
第5表	試料1g当たりのプラント・オパール個数	86
第6表	上橋下遺跡出土木製品樹種の時期別比較	91
第7表	地点1(01A区)ボーリング調査の放射性炭素年代測定結果	100
第8表	地点2(02区)放射性炭素年代測定結果	100
第9表	地点3(02区)深堀の放射性炭素年代測定結果	100
第10表	地点4(03区)深堀の放射性炭素年代測定結果	100

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置



第1図 遺跡位置図

愛知県は日本列島のほぼ中央、太平洋側に位置し、旧国名では尾張および三河にあたる。上橋下遺跡の位置する安城市は、愛知県東部を占める三河地域の西側に位置し、三河湾にそそぐ矢作川の中流域まで遡った右岸に市域を展開する。市域は豊田市・知立市と北で、岡崎市とは東で、碧南市・西尾市とは南で、刈谷市・高浜市とは西で接する。

上橋下遺跡は、碧海台地東端と矢作川右岸との間に形成された、沖積平野上に所在する。旧態は水田、畑地等である。調査地付近の現地表高は、標高約9mを測る。



第2図 遺跡周辺地形図 (国土地理院 20万分の1 地勢図「豊橋」名古屋)

第2節 歴史的環境

今回の調査地点は、弥生時代から近世にいたる遺構・遺物が確認された複合遺跡であるが、出土遺物は弥生・古墳時代を主体とする。

『愛知県遺跡地図②-知多・西三河地区』によれば、安城市内に分布する埋蔵文化財包蔵地は、記念物を除いて191ヶ所が掲載されている。本節では、周辺に分布する遺跡の中で、調査地点が位置する矢作川右岸の沖積低地および、碧海台地東辺の縄文～古墳時代を中心に概観してみる。

調査地点周辺で確認できる遺跡は、古い時期では西側に展開する碧海台地上に、「板井式」土器の出土で縄文時代晩期中葉の標式遺跡とされる、堀内貝塚がある。ここでは、平成8年度の調査で、縄文晩期土器とともに、土壙墓、土器棺墓が検出されている。また、この近接地点には、縄文土器の散布が確認されていた釈迦山遺跡がある。昭和61、62年度には、安城市教育委員会によって調査が行われており、ここでは縄文晩期、弥生土器片と共に、須恵器以降各時代の遺物が確認されている。したがって、調査地点近隣の碧海台地上では、晩期の時点では少なくとも、縄文時代の生活が成立する環境であったと思われる。しかし現在までに、住居跡など集落の具体的な痕跡は見つかっていない。

弥生時代に入ると、現認される状況は縄文時代と大きく変わる。安城市内において、弥生時代の遺物が確認できる主要地点は、今回の調査地点から碧海台地までの鹿乗川流域に集中する。北へ約700mの位置に神ノ木・稲尾遺跡、同じく北に500mの位置に竹ヶ花遺跡、西へ約400mの地点に野辺遺跡、北へ200mの位置に分布地図記載の上橋下遺跡、西に隣接する下橋下遺跡、西へ300mの地点に彼岸田遺跡、南西に500mの地点に古井堤遺跡などの範囲が、沖積低地に連続して広がる。これらの記載遺跡は近年、安城市教育委員会がその連続性をとらえて、鹿乗川流域遺跡群と呼称するようになっている。今回の調査地点は、この遺跡群の一角に属すると理解してよいであろう。これらの地点の中で、現時点で住居跡と考えられる遺構の確認は、安城市教育委員会による鹿乗川流域遺跡群1次調査S地区2-4区（遺跡分布地図による下橋下遺跡）のみである。ここでは後期前半の住居跡1、土坑などが検出された。弥生時代において確認されている時期は、古井堤遺跡から出土した遠賀川系の土器片のように、わずかに前期の遺物もみられるが、主体的に出土するのは中期後葉以降である。現段階では、弥生時代のどの時期からこの地に人々が安定した生活を展開していたのか、解明できていない。

古墳時代では、碧海台地縁辺部に板井古墳群が展開する。調査地点から最も至近なものは、前期の前方後墳である二子古墳で、南西方向約800mの地点にあり国史跡に指定されている。古墳時代の遺物が確認されている遺跡は、弥生時代に引き続いて、今回の調査地点から碧海台地東縁までの鹿乗川流域に広がりが見られる。住居跡と考えられる遺構は、安城市教育委員会による鹿乗川流域遺跡群1次調査S3地区（遺跡分布地図による下橋下遺跡）、2次調査O地区1-1区（遺跡分布地図による古井堤遺跡）などで確認されている。したがって、この沖積低地では、古墳時代に集落が展開していたことは、遺物の出土状況などからみても間違いないと思われる。ただし、現況では、土地改良事業などにおいて、微高地など遺構が良好に残存する部分が削平されており、面的な発掘調査例も少ないことから、当該期の集落形成は未解明で、それ以降の時代についても遺物散布の確認程度に留まっている。



- | | | |
|----------|-----------|----------------------|
| 1. 01B区 | 7. 神ノ木遺跡 | 13. 鏡月垣遺跡 |
| 2. 01A区 | 8. 船尾遺跡 | 14. 古井塚遺跡 |
| 3. 02区 | 9. 竹ヶ花遺跡 | 15. 龍楽川流域遺跡群1次調査S地区 |
| 4. 03区 | 10. 野辺遺跡 | 16. 二子古墳 |
| 5. 堀内貝塚 | 11. 上橋下遺跡 | 17. 龍楽川流域遺跡群1次調査S3地区 |
| 6. 新堀山遺跡 | 12. 下橋下遺跡 | 18. 龍楽川流域遺跡群2次調査O区 |

第3図 周辺遺跡分布図 (1/10,000)

(『安城市都市計画基本図』24・25・29・30)

第三章 調査の概要

調査区は、二級河川鹿乗川の改修工事予定地に設定した。したがって調査地点は、河川に沿った改修予定地に合わせられたため南北に細長く、これを各年度で分割設定したため、北側から南に向かって、01B区、01A区、02区、03区として順に調査を進めた。

調査地点は、沖積低地を流れる河川脇で、周囲を含めて旧態は水田である。このため、水稲耕作時には湧水層が上がって調査が困難で、発掘調査はどの年度においても下半期に実施せざるを得なかった。

各調査区内の表土除去は、機械（バックホウ）掘削によって行った。この調査地に排土処理のためにベルトコンベヤーを配し、河川に沿った隣接地を排土用地に充てた。

各調査区では、遺物包含層掘削から、遺構検出作業に入り、遺構掘削、写真撮影、測量を行い、最終的に基盤層の土層サンプルを採取して、調査を終了した。



第4図 調査区配置図 (1/5000)

第IV章 遺構

第1節 基本層序

上橋下遺跡における基本層序を概観すると、第5図のような状況がみてとれる。各調査地点は、碧海台地の東側縁辺部と、矢作川右岸の間に展開する沖積平野に位置し、現況はいずれも水田である。01B区～03区の両端間は約300mを測るが、現水田面を比較すると、01A区北端は標高8.8mを測り、03区南端は8.7mを測る。南北間の比高は、0.1mの差を有する。両区間の傾斜は、0.03%である。

この沖積平野部は、地点によって微高地や後背湿地、自然流路が複雑に展開し、一律ではない。したがって、各調査区の層序は、沖積地のどの部分にかかっているかによって、隣り合うものでも異なる様相が見られ、全区に共通した堆積状況はとらえられなかった。個別の層序は調査区ごとに図示するが、ここでは微高地の状況を中心に、全体的な様相を概略的に説明する。

水田耕作土の下には、灰白色シルト層が0.2～0.3m堆積する。その下には、黄灰色・灰黄褐色シルトなどが約0.3m堆積し、これらの下には、弥生時代中～後期の遺物を含む黒色土が0.15～0.2m堆積していた。この黒色土層では、上部から掘り込む遺構がわずかに観察された。機械掘削は、黒色土の直上を目安とし、遺構を面的にとらえるための検出作業となった。その結果、01A・B区では、鎌倉～室町時代の遺物を含む遺構が、わずかに検出された。02・03区では、01A・B区で検出された黒色土に対応する土層が検出されず、灰黄褐色細粒砂・黄褐色シルト層の上部にて、02区では戦国～近世、03区では古代～中世の遺物を含む遺構が、わずかに検出された。これらの土層直下からは各調査区ともに、主として弥生時代中～後期の遺物を含む方形周溝墓が検出され、さらにこの下位には、基盤層として扱った灰オリーブ色シルト、青灰色細粒砂が確認できた。



第5図 基本層序概念図

第2節 遺構

第1項 O1B区

古井町上橋下に位置し、鹿垂川沿いに設定されたO1～O3調査区のうち最も北側に位置する。調査区は、河川改良事業の予定地点に一边約110m×18mの長方形で設定された。遺構は全て灰色シルト層上面で検出した。後述するO1A区以南の調査区では下面遺構群に相当する。確認できた遺構は、方形周溝墓9、溝約20、土坑約20などがある。方形周溝墓は、周溝が深く平面形状が正方形に近い一群(SZ03～05)と、周溝が浅く平面形状が不整形となる一群(SZ01・02・06～09)とに区分できる。出土遺物は前者では全形をうかがえる資料も幾つか含まれるが、後者では破片資料を含めてほとんど確認できなかった。溝は幅が狭く長いものが多い。基本的には方形周溝墓の間で確認できるが、方形周溝墓と重なった場合はほとんどがこれを切る。出土遺物は乏しい。土坑は小規模なものが多い。分布状況に特徴的な状況は確認できない。やはり、出土遺物は乏しい。

・下面

SZ01 調査区北側に位置する。溝が方形にめぐり、南東隅は連結しないで切れている。南西隅は調査区外だが、大きく開口するかもしれない。検出高は7.6mで、溝幅は1.0～1.5m程度、深さは0.1mを測る。平面形態がややゆがむ正方形で、西溝はSZ02と共有となる。対面する溝の内側下端間は東～西間3.2m、南～北間3.1mとなる。埋土はオリブ黒色シルトを基調とし、遺物は土器類が若干得られた。溝がめぐる平面形態やSZ02と連続する状況などから、方形周溝墓の可能性が考えられる。

SZ02 調査区北側に位置する。溝が方形にめぐり、南西隅は連結しないで切れている。平面形態がややゆがむ正方形で、検出高は7.6mを測り、溝幅は一定しないが、深さは0.1mとなる。東溝はSZ01と共有となる。対面する溝の内側下端間は西～東間4.2m、南～北間4.7mとなる。中央よりやや北東にSK49が検出できたが、SZ02との関係は不明。出土遺物は確認できなかった。重複関係では西溝がSD66に切られている。埋土はオリブ黒色シルトを基調とし、遺物は土器類が若干得られた。溝がめぐる平面形態やSZ01と連続する状況などから、方形周溝墓の可能性が考えられる。

SZ03 調査区北側に位置する。ほとんどが調査区外となり、規模は不明。検出高は7.5mを測る。溝幅は一定しない。深さは0.5mを測る。埋土は黒色シルトを基調とし、遺物は弥生時代中期～後期の壺・甕などが出土している。西側が調査区外となるが、北側南側とも壁面付近で屈曲している。遺物の出土状況から方形周溝墓の可能性が考えられる。

SZ04 調査区中央部に位置する。溝が方形にめぐり、南東隅は連結しないで切れている。北西側が調査区外となるが、平面形態は正方形で、検出高は7.6mを測り、溝幅は1.2m程度、深さは0.6mとなる。対面する溝の内側下端間は北東～南西間6.5m、北西～南東間は6.5m以上となる。埋土は灰色～黒色シルトを基調とし、遺物は弥生時代後期の高杯などが出土している。やや西側に偏してSD76、P17が検出できたが、SZ04との関係は不明。

SZ05 調査区中央部に位置する。直角に屈曲する溝である。西側が調査区外となる。検出高は7.8mを測り、溝幅は一定せず1.5m前後、深さは0.5mとなる。埋土は黒褐色シルトを基調とし、遺物は弥生時代中期～後期の土器などが出土している。西側が調査区外となるが、北側南側とも壁面付近で屈

曲していることから溝がめぐる平面形態が想定でき、対面する溝の内側下端間が6.5m程度の方形周溝墓である可能性が考えられる。

SZ06 調査区南側に位置する。溝が方形にめぐり、北西隅と南東隅は連結しないで切れている。平面形態がゆがむ正方形で、検出高は7.6mを測る。溝幅は一定でないが、深さは0.2mを測る。対面する溝の内側下端間は東西～南北間4.3m、北東～南西間6.0mとなる。埋土はオリーブ黒色～黒色シルトを基調とし、遺物は土器類が若干得られた。溝がめぐる平面形態から、方形周溝墓の可能性が考えられる。

SZ07 調査区南側に位置する。溝が方形にめぐり、南溝は連結しないで二か所で切れている。平面形態はややゆがむ正方形で、検出高は7.8mを測り、溝幅は1.0m程度となる。深さは0.2mを測る。対面する溝の内側下端間は、南～北間4.2m、東～西間5.0m以上となる。埋土は灰黄色シルトを基調とし、遺物は土器類が若干得られた。溝がめぐる平面形態から、方形周溝墓の可能性が考えられる。重複関係では東溝がSD41に切られている。

SZ08 調査区南側に位置する。溝が方形にめぐり、南溝はSZ09と共有となる。平面形態はややゆがむ正方形である。検出高は7.7mを測る。溝幅は南東が調査区外となるが、2.0～2.5m程度となる。深さは0.2mを測る。対面する溝の内側下端間は北東～南西間4.3m、北西～南東間3.9mとなる。埋土はオリーブ黒色シルトを基調とし、遺物は土器類が若干得られた。溝がめぐる平面形態から、方形周溝墓の可能性が考えられる。重複関係では北溝と東溝がSD41に切られている。

SZ09 調査区南側に位置する。溝が方形にめぐり、南西隅は連結しないで切れている。北溝はSZ08と共有となる。平面形態はややゆがむ正方形で、検出高は7.7mを測る。溝幅は南と東側が調査区外で、SZ08との共有部分でのみ計測でき、2.0mとなる。深さは0.2mを測る。対面する溝の内側下端間は北東～南西間4.1m、北西～南東間5.0mとなる。埋土はオリーブ黒色シルトを基調とし、遺物は土器類が若干得られた。中央よりやや北東にはSK35、SK38が検出できたが、SZ04との関係は不明。溝がめぐる平面形態から、方形周溝墓の可能性が考えられる。

SD87 調査区北側に位置する。南側・北側ともに調査区外となる。検出高は7.6mを測る。幅は5.0m、検出長は11.0m、深さは5.8mまで確認した。平面形における主軸の方向はN—75°—Eを測るが北東部では北側に屈曲する。埋土は灰オリーブ色を基調とし、遺物は土器類が若干得られた。

SD66 調査区北側に位置する。南側・北側ともに調査区外となる。緩やかな弧状を呈する。検出高は7.6mを測る。幅は0.6m、検出長は18.0m、深さは0.2mを測る。平面形における主軸の方向はN—16°—Wを示す。埋土は暗灰黄色シルトを基調とし、遺物は図示した弥生時代中期の壺が出土しているが混入であろう。重複関係ではSZ02・SD57を切っている。

SD57 調査区北側～中央に位置する。南側・北側ともに調査区外となる。検出高は7.6mを測る。幅は0.4m、検出長は36.0m、深さは0.2mを測る。平面形における主軸の方向はN—19°—Eを示す。埋土は黒色シルトを基調とし、遺物は土器類が若干得られた。重複関係ではSD66に切られている。

SD84 調査区北側に位置する。南側・北側ともに調査区外となる。検出高は7.5mを測る。幅は1.3m、検出長は13.1m、深さは0.5mを測る。平面形における主軸の方向はN—75°—Wを示す。埋土は黒褐色シルトを基調としている。

SD59 調査区中央に位置する。西側は調査区外となる。検出高は7.5mを測る。幅は一定しない。検出長は2.3m、深さは0.2mを測る。平面形における主軸の方向はN-63°-Eである。埋土は灰黄色シルトを基調とし、遺物は弥生時代末期の壺などが出土した。

SD58 調査区中央に位置する。西側は調査区外となる。検出高は7.5mを測る。幅は0.4m、検出長は1.2m、深さは0.1mを測る。平面形における主軸の方向はN-41°-Wである。埋土は黒褐色を基調とし、遺物は弥生時代中期の甕などが出土している。

SD44 調査区南側に位置するが、南側・北側ともに調査区外となる。検出高は7.6mを測る。幅は0.8m、検出長は16.6m、深さは0.3mを測る。平面形における主軸の方向はN-29°-Wを示し、SD41と並行する。埋土は黒色シルトを基調とし、遺物は土器類が若干得られた。

SD41 調査区南側に位置する。南側・北側ともに調査区外となる。検出高は7.7mを測る。幅は2.0~2.9m、検出長は17.2m、深さは0.7mを測る。平面形における主軸の方向はN-30°-Wを示し、SD44と並行する。埋土は黄灰色シルトを基調とし、遺物は弥生時代末期~古墳時代に属する土器などが出土している。なお、SD41は北西部で、小規模な溝と分岐するが、調査時ではこの部分もSD41として扱っている。幅は0.6m、検出長は38.6m、深さは0.2mで、蛇行して南側に伸び、南端はSZ08を切り、調査区外に伸びている。

第2項 O1A区

古井町上橋下~下橋下に位置し、鹿乗川沿いに設定されたO1~O3調査区ではO1B区の四反田上橋に続く農道を挟んだ南側、O2調査区の北側に位置する。調査区は、河川改良事業の予定地点に一片約90m×18mの長方形で設定された。上面の遺構は、水田耕作土直下のにぶい褐色~灰色シルト層を取り除き検出した。調査区のほとんどを調査区中央で分岐する旧河道が占めるが、この埋土を掘削した遺構も確認できる。検出できた遺構は、溝2、溝状遺構1、土坑約10などである。下面の遺構は、上面の遺構面からさらに暗灰色を中心とするシルト層を取り除いた灰色シルト層の上面で検出した。やはり調査区のほとんどを旧河道が占めるが、検出できた遺構には方形周溝墓1、竪穴住居1、溝約10などがある。旧河道の北部には自然地形に改変を加えた特殊遺構（SX02）も確認できた。

・上面

SK02 調査区中央に位置する。平面形態が東西7.0m、南北は7.5mの北側がゆがむ正方形で、深さは0.2m、検出高は8.4mを測る。埋土は褐灰色シルトを基調とし、遺物は図示した灰軸陶器耳皿が出土しているが、混入品であろう。重複関係ではNR01に切られている。

SK13 調査区南側に位置する。平面形態が扇形で、検出高は8.3mを測り、長径が0.6m、東側は同時期と考えられるSD03に接する。埋土は基底部付近が灰白色粘土となり、充填されたものと考えられる。西側には甕が底面をSK13の基底部に食い込むように据え置かれ、中央には斜め方向にSD03に向かって土管を埋設している。重複関係ではNR01を切っている。

SD03 調査区南側に位置する。南側は調査区外となる。検出高は8.1mを測る。幅は0.6m、検出長は20.3m、深さは0.2mを測る。主軸の方向はN-20°-Eを示す。埋土は黒灰色シルトを基調とし、遺物は土器類が若干得られた。北側端部から南側へ約7m地点西側に同時期と考えられるSK13が検出

できた。重複関係ではNR01を切っている。

SX01 調査区北側に位置する。幅の一定しない溝状の落ち込みで、深さは0.5mを測る。東西の端部は調査区外となる。主軸の方向はN-70°-Wを示す。埋土は黒褐色シルトを基調とし、遺物は中世初頭の陶磁器片や木簡が出土している。

NR01 調査区のほぼ全域を占める。調査区の中央で分岐し、幅25mの南東方向と幅10.5m以上の南方向とに分岐する。主軸の方向は南東方向がN-40°-W、南方向がN-7°-Wである。埋土は灰色シルトを基調とし、遺物は近世～近代の陶磁器片などが出土している。上面をSD03により切られている。

・下面

SB01 調査区の北側に位置する。長辺3.3m、短辺3.2m深さ0.1mのほぼ正方形の土坑で、堅穴住居であろう。中央のP1・2は主柱穴であろう。北側は幅0.4m、深さ0.1mの周溝が確認できた。南部はSX02から伸びるSD27・28に切られている。埋土は黄灰色細粒砂を基調とし、遺物は弥生時代後期の土器などが出土している。

SK18 調査区南側に位置する。長径0.8m、短径0.5m、深さ0.1mの楕円形を呈する。埋土は黒褐色を基調とし、遺物は弥生時代後期の土器が出土している。重複関係はSZ01を切っている。

SZ01 調査区中央に位置する。西側はNR01南東方向に切れ残り残存しないが、南西隅は連結しないで切れる。北西隅も同様かもしれない。平面形態はややゆがむ正方形で、検出高は8.2mを測る。溝幅は1.8m、深さは0.1mである。対面する溝の内側下端間は南～北間4.0m、東～西間は4.5m以上となる。中央にSK14～17が検出できたが、SZ01との関係は不明。埋土は灰色シルトを基調とし、遺物は弥生時代後期の土器などが出土している。溝がめぐる平面形態やO1B区の状況を考慮し、方形周溝墓の可能性を考えておく。

SD33 調査区中央に位置する。幅は8.5m程度で、深さは1.3mまで確認した。東西の端部は調査区外となる。主軸の方向はN-64°-Wを示す。埋土は黒褐色を基調とし、遺物は上層から弥生時代後期の土器類、下層から弥生時代中期の土器類や木製品が出土している。

SX02 調査区の北側に位置する。上面で検出されたNR01南東方向の埋土を取り除き下面から検出した。旧河道の幅を広げ、この部分に大小さまざまな土坑を掘削したもので上流側にはSD17・22・28なども掘削されている。土坑の性格は明らかにできなかった。中央部には2か所で杭や竹が集中的に打ち込まれた部分が確認でき、一部に小枝も観察できる。埋土は灰褐色シルトを基調とし、遺物は中世前期の陶磁器を中心とする。器種は椀が多く、墨書土器も含まれている。この他に木製品や銭貨の他、犠牲獣と考えられるウマ頭骨も出土している。

第3項 02区

1面

表土および近代の遺物を含む黄橙色細粒砂・灰黄褐色細粒砂などを掘削した時点の、標高約8.0m前後で検出された遺構群を1面として取り扱った。

NR01・02・03 NR01は調査区東側を南北に走る自然流路で、西岸のみが検出されている。埋土

は黄褐色砂・灰黄色砂が主で、近世～近代の陶磁器が出土している。NR02・03もNR01と同様の埋土をもつ不定形な浅い落ち込みであり、NR01のオーバーフローによって生じた落ち込みであると考えられる。

SD03・04 SD04は調査区北東部にある長径6.5m、短径2.8m、深さ約0.15mを測る、長方形を呈する土坑で、北東隅が溝状に北に延びている。SD03はSD04と同幅で北東側に2.5m程広がる。また深さは約0.01mと極めて浅く、SD04と同一の遺構と考えられる。埋土は両土坑とも、暗灰黄色砂と黄灰色シルトの斑土である。

SD07・08・10 北東-南西方向に走るSD07は、幅1.5～1.8m、深さ0.1～0.2mを測り、東端はNR01に切られている。溝内より12世紀後葉～13世紀前半の山茶碗が出土しているが、セクションの観察によると、掘り込まれた層は上位となり、近世以降の遺構になる可能性がある。SD08はSD07よりやや東西方向に降って走る溝で、幅約1.6～2.0m、深さ0.2～0.4mを測る。溝内より17世紀前半の天目茶碗が出土している。SD10はSD08から分岐するように西側に約3m延びている。

SD09 調査区北隅から東壁中央部に向けて、屈曲しながら走る溝で、幅1.5～1.8m、深さ0.2mを測る。底面には楕円形の土坑が列状に検出された。土坑は長径0.4～0.6m、短径0.3～0.4m、深さ0.05～0.2mを測り、埋土は明黄褐色中粒砂・灰白色中粒砂・褐色細粒砂が斑土・互層状を呈している。SD09はSD07・08に切られている。

SD01 北西-南東からやや南北に降った方向に走るSD01は、幅1.6～2.1m、深さ0.1～0.3mを測り、SD08・09に切られる。北側はSD07・09の交差点付近で取東する。埋土は灰黄色細粒砂。H-72窯式の椀底部が出土している。

SD06・13・12・16 SD06・13は約1mの間隔をもって並行して走る溝。SD06は幅0.2m、深さ0.02m、SD13は幅0.2～0.5m、深さ0.05～0.1mを測る。SD12は直角に折れ曲がる溝で、幅0.6～1.2m、深さ0.05～0.1mを測る。北西側のSD16も同一の溝と考えられ、SD06・13はSD11を、SD12・16はSD14を切っている。これら4条の溝とも、埋土は黄灰色細粒砂で、時期は近世～近代以降である。

SD11 幅2.8～3.5m、深さ0.02mの浅い溝で、西側はNR03によって削平されている。H-72窯式の椀底部が出土している。

SD14 調査区の南壁に沿うように、やや湾曲して走る幅1.2m、深さ0.05～0.2mを測る溝で、底面にはSD09と同様の土坑列が検出されている。

2面

1面検出時には既に、SD01の西側に沿った場所を中心に部分的に鉄分沈着帯が認められていた。これらの鉄分沈着帯を東西トレンチ及び東壁トレンチで観察したところ、上面に鉄分沈着がみられる高まりが確認できたため（第34図、第36図02区東西ベルト断面図37・38）、畦畔と判断し、上面の高まり約7.8mで2面の検出を行った。

畦畔 最も明瞭に確認できたものはSD01とST04の間で、幅1～1.8m、最大高約0.02mの畦畔がSD01に沿って検出された。畦畔は削り出されて成形されており、上部に部分的に斑土がみられる。また、ST01・ST02・ST04間でも畦畔状の高まりが認められた。

ST01・04・02 明瞭な畦畔・落ち込み肩が確認できた遺構で、水田跡であると考えた。最も良好

な状態で検出されたST04は、径8.0m・深さ0.02～0.15mで正方形を呈する。北西側と南東側は幅約0.6m・高さ0.1～0.2mの段がみられ、南西と南東隅に途切れ、開口する部分がある。埋土内よりK-90窯式の桶底部が出土している。ST04埋土内のプラントオパール分析を東西ベルトで行い、中～上位層でイネのプラントオパールが多く検出されている。またST01でも南壁で同分析を行ったが、埋土中ではわずかししか検出できず、さらに上位の水田跡埋土より多くのプラントオパールが検出されている（第VI章第2節）。

ST03・05・06・07 各落ち込みとも不定形な形状をしており、調査時には水田としたが、明瞭な畦畔を伴わないものも多く、他の遺構である可能性もある。特にST06はSD10に続く土坑であると思われる。

SX01 調査区北側にある、長径6.8m、深さ0.03～0.10mの不定形な落ち込み。O-53窯式の桶底部が出土している。

この1・2面の遺構群は任意面において検出しているため、新旧の遺構が同時に検出されている。また土層断面でみると、1・2面より上位にも何面かの水田遺構が存在したと考えられる。これらの遺構群の変遷を切り合い及び土層断面で確認して整理すると下記ようになる（第38図）。

1 最も古い遺構はST05で、次にST04・01・02になる。また畦畔を挟んで並列するSD01もST04と同時に存在したと考えられる。さらにSX01も同じ時期の可能性が高い。所属時期は10世紀前半から11世紀前半になると想定される。

2 次に掘削されるのはSD09・11・14である。このうちSD11からは11世紀前半の桶が出土している。SD09・14は底面に土坑列がみられ、同性格の溝と考えられる。時期は平安時代後期か。

3 その後SD08・10とこれに遺構に続くようにST06が掘削される。時期は12世紀後半から17世紀前半になる。また出土遺物からみるとSD07も同時期と思われるが、土層断面観察では、やや新しくなりそうである。

4 その後SD12・16とSD04・03が掘削される。時期は近世か。

5 NR01とそのオーバーフローした流出物の堆積であるNR02・03が広範囲に調査区を覆う。時期は近世～近代か。

6 SD06・13が最も新しい遺構群となる。時期は近代以降と思われる、現道と水田に付随する側溝と考えられる。

3面

土層断面でSZ01の周溝が確認された、灰色細粒砂・灰白色中粒砂上面、標高約7.6mで3面の検出を行った。北東側はNR01によって埋平されており、南東側は急に落ち込んでいく。

SZ01 周溝の墳丘側下端間で長径4.8m、短径4.2mを測る、正方形または台形を呈する方形周溝墓。周溝は幅1.5～2.0m、深さ0.3～0.6mを測り、西・南・東溝より土器が出土している。周溝内出土土器は全て中位で検出されており、南西隅では63・66～68の4点がまとまって出土する。埋葬施設は不明。時期は、山中式中期後葉（第39図）。

SZ02 平面での調査時には認識することができず、一部はSK39・SZ01西溝として掘削している。その後土層断面等での再確認をしたところ、周溝の墳丘側下端間で径7.5～8.0mを測る、方形を呈する

方形周溝墓を確認した。周溝は幅1.5m、深さ0.4～0.5mで、北・東・南溝より土器が出土している。北東溝出土の54・55、南東溝出土の59・61は上位、南西溝出土の58は中位、南東溝出土の56は底面上で検出されている。埋葬施設は不明。時期は、八王子古宮式期（第39図）。

SK38・39 当初別遺構として認識していたが、深堀による確認調査を行ったところ、山中式期中葉に掘削された溝の埋没過程で生じた2つの落ち込みであることが判明した。溝の幅は約3.8m、深さは約1.5mで、東側はNR01のため削平されている。また下層部分に関しては、激しい湧水のため詳細な平面図及び土層断面を測量することはできなかった（第37図、写真図版7）。溝の上層（SK38・39）は黒褐色極細粒砂が主体で、下層（SK38・39下層）はやや粘質のある黒褐色極細粒砂・シルトが主体となる。また下層では、多量の自然木小片・木葉・昆虫遺存体が出土している（第VI章第1節）。

SX02・03 不定形な浅い土坑になる。時期は不明で、上層（2面遺構）の掘り残しの可能性も考えられる。

第4項 03区

古井町下橋下に位置し、鹿乗川沿いに設定された01～03調査区では、最も南側に位置する。調査区は、河川改良事業の予定地点に一辺約15m×40mの長方形で設定され、水田耕作土直下の灰白色シルト層を取り除くと、自然流路、土坑が検出（上面）された。さらに、この直下の灰色・黄褐色シルト層を取り除くと、土坑、方形周溝墓が検出（下面）された。検出された遺構は、土坑25、溝4、周溝状の掘り込み4などである。上・下面にて遺物を比較すると、上面では包含層中・自然流路から、古墳時代の土器片、古代の須恵器・灰軸陶器・中～近世の陶磁器片、遺構からは灰軸系陶器（山茶碗）がわずかに出土しており、下面では包含層・遺構内から弥生時代中～後期の遺物が出土している。上面では、調査区内を自然流路が南北に貫き、この東脇に土坑が散見する。下面では、南北に偏ることなく方形周溝墓の可能性を有する浅い溝・小規模な土坑が検出された。上面・下面ともに、遺構、包含層中からの遺物出土量は少なく、特に遺構にともなう遺物はごくわずかであった。

・上面

SK07 調査区上面北側に位置する。平面形態が不整形円形の土坑で、検出高は8.0mを測り、長径1.2m、短径0.9m、深さ0.45mを測る。重複関係では、NR01を切っている。埋土は灰白色シルトを基調とし、遺物は時期を判別しえない土器細片がわずかに出土している。

SK03 調査区上面中央に位置する。平面形態が不整形の土坑で、検出高は7.9mを測り、長径2.9m、短径1.8m、深さ0.1mを測る。埋土は灰白色シルトを基調とし、遺物は中世の灰軸系陶器片が出土している。

SK01 調査区上面南側に位置する。平面形態は不整形を呈す土坑で、検出高は8.0mを測り、長径0.6m、短径0.55m、深さ0.5mを測る。埋土は灰白色粘質土を基調とし、遺物は時期を判別しえない土器細片がわずかに出土している。

NR01 調査区上面を南北に縦貫する。調査区内での検出状況は直線的な自然流路で、検出高は8.1～8.0mを測り、検出長41.4m、幅7.8m、壁断面で確認できた深さは0.5mを測る。埋土は灰色極細粒砂を基調とし、遺物は古墳時代の土器片、古代の須恵器・灰軸陶器・中～近世の陶磁器片が出土し

ている。

・下面

SK148 調査区下面北東隅に位置する。平面形態は楕円形を呈す土坑で、検出高は7.7mを測り、長径1.1m、短径0.6m、深さ0.2mを測る。埋土は黄灰色シルトを基調とし、遺物は弥生時代後期の壺片が出土している。

SK101 調査区下面中央やや北側に位置する。平面形態は楕円形を呈す土坑で、検出高は7.7mを測り、長径1.1m、短径0.4m、深さ0.1mを測る。埋土は黄灰色シルトを基調とし、遺物は弥生時代後期の壺片が出土している。

SD101 調査区下面南側に位置する。断面形態が船底形の溝で、検出高は7.7mを測る。幅は0.4m、検出長は13.0m、深さは0.1mを測る。平面形における主軸の方向は、N-12°-Wを示す。埋土は黄灰色シルトを基調とし、遺物は弥生時代後期の壺片が出土している。基盤層確認作業では約0.2m下位の同位置にて、幅0.7m、深さ0.4mを測るSD102の検出がなされた。

SZ101 調査区下面南中央に位置する。溝が方形にめぐり、南西・南東隅は連結しないで切れている。断面形態は船底形を呈し、検出高は7.6～7.8mを測る。検出幅は最大で1.6mを測り、対面する溝の内側下端間は北東～南西間7.1m、北西～南東間6.0m、深さは0.2mを測る。溝内からは東隅角にて弥生時代後期の壺片、北西側の溝内から弥生時代後期の高坪が出土している。溝がめぐる平面形態、遺物の出土状況などから、方形周溝墓の可能性が考えられる。基盤層確認作業では約0.2m下位にて、本遺構の西隅角に重なるように、平面形態がL字状を呈すSX110の検出がなされた。

SX105 調査区下面北端に位置する。断面形態が船底形の溝状遺構と思われるが、調査区外にかかると、正確な平面形態は確認できなかった。検出高は7.7mを測り、幅は最大で1.9m、検出長は4.3m、深さは0.2mを測る。重複関係では、SK149を切っている。平面形における主軸の方向は、N-38°-Eを示す。埋土は褐灰色シルトを基調とし、遺物は時期を判別しえない土器細片がわずかに出土している。

SX104 調査区下面北側に位置する。断面形態が船底形の溝状遺構と思われるが、調査区外にかかると、正確な平面形態は確認できなかった。検出高は7.8mを測る。幅は最大で1.6m、検出長は約13m、深さは0.2mを測る。重複関係では、SK143・144に切られている。平面形における主軸の方向は、N-39°-Wを示す。埋土は褐灰色シルトを基調とする。本遺構は、調査区の壁側で方向が変わっており、東に隣接するSX105と併せて、溝が方形に回る可能性も考えられる。遺物は、弥生時代中期末と思われる土器片がわずかに出土している。

SX103 調査区下面北西側に位置する。断面形態が船底形の溝状遺構と思われるが、調査区外にかかると、正確な平面形態は確認できなかった。検出高は7.8mを測り、検出長は6.2m、深さは0.2mを測る。重複関係では、SX106を切っている。埋土は灰黄褐色シルトを基調とし、遺物は弥生時代後期と思われる壺、高坪片がわずかに出土している。

SX107 調査区下面中央に位置する。基盤層確認作業にて、検出がなされた。断面形態は逆台形で溝状を呈し、検出高は7.5mを測る。幅は最大で0.9m、検出長は約6.5m、深さは0.4mを測る。平面形における主軸の方向は、N-67°-Eを示す。灰白色粘質土を基調とする。SX108・109と併せて、

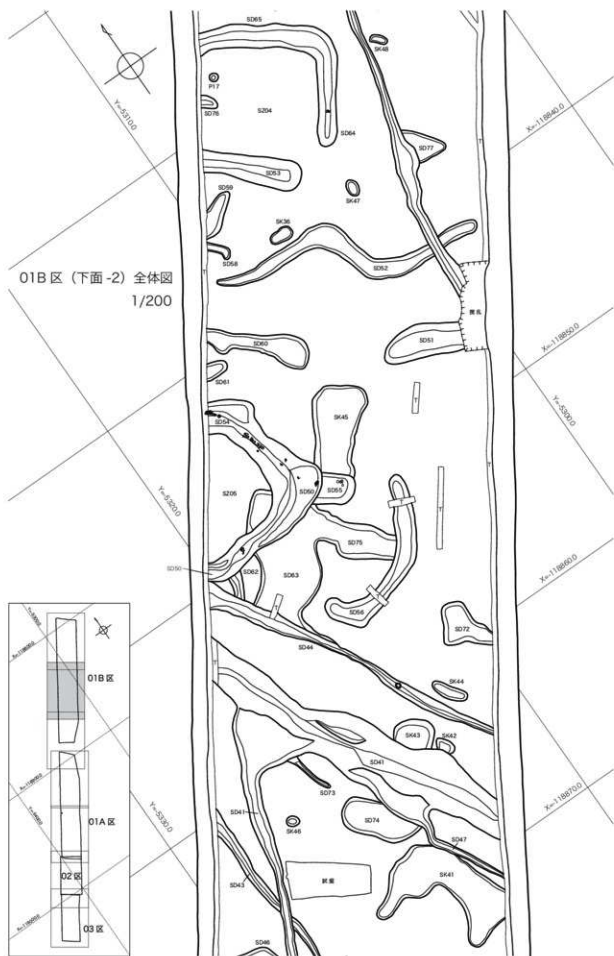
方形に回る。

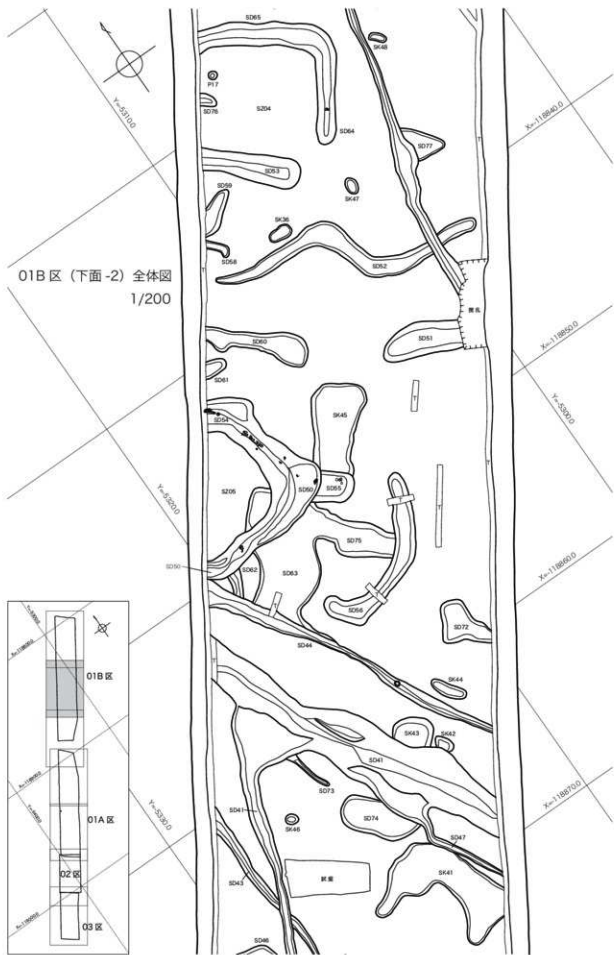
SX108 調査区下面中央に位置する。基盤層確認作業にて、検出がなされた。断面形態は逆台形で溝状を呈し、検出高は7.5mを測る。幅は最大で0.9m、検出長は約4.8m、深さは0.5mを測る。平面形における主軸の方向は、N—27°—Wを示す。灰白色粘質土を基調とする。

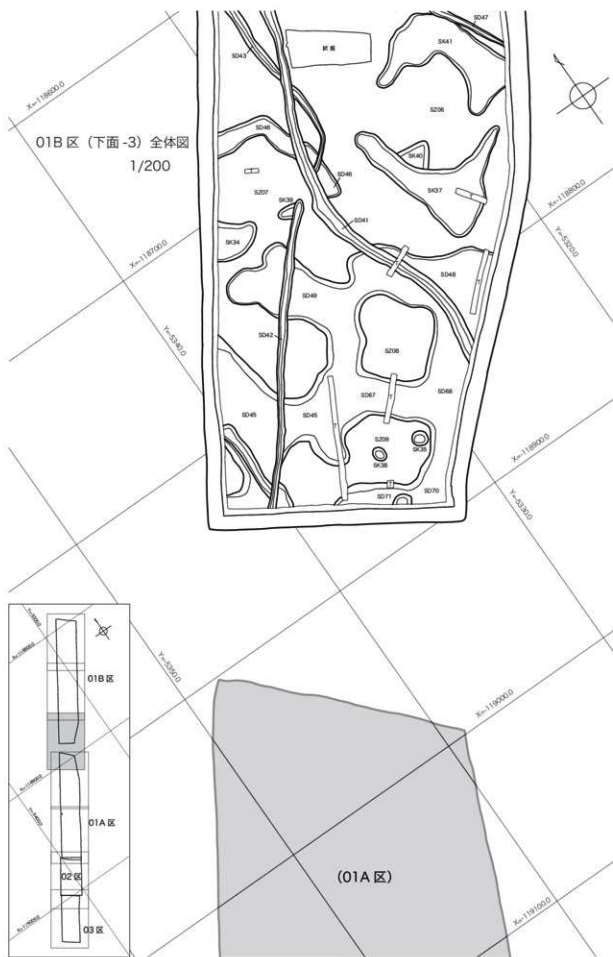
SX109 調査区下面中央に位置する。基盤層確認作業にて、検出がなされた。平面形は、逆L字状を呈する。断面形態は逆台形で溝状を呈し、検出高は7.4mを測る。幅は最大で1.6m、検出長は南北6.0m、東西5.4m、深さは0.5mを測る。主軸の方向は、南北がN—23°—W、東西がN—62°—Eを示す。灰白色粘質土を基調とする。弥生時代後期と思われる高坏片の検出がなされた。

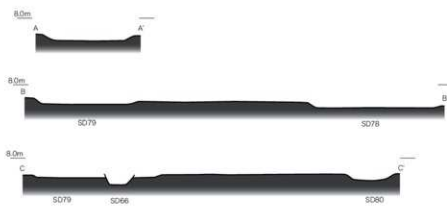
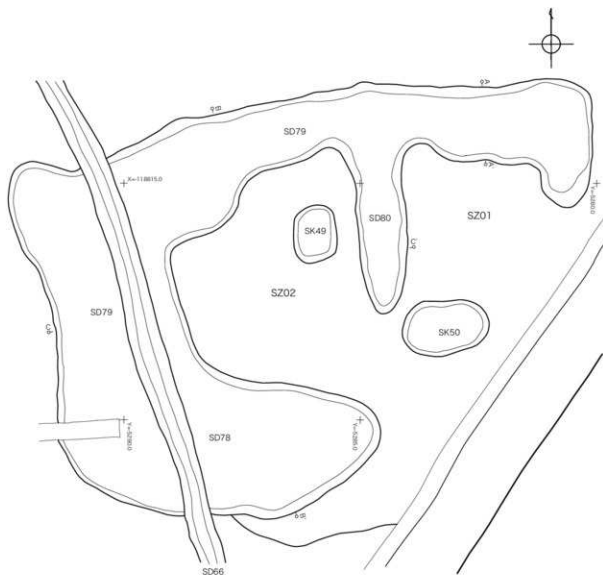
SX102 調査区下面南側に位置する。断面形態が船底形の溝状遺構と思われるが、調査区外にかかると、正確な平面形態は確認できなかった。検出高は7.8mを測り、幅は最大で1.5m、検出長は3.4m、深さは0.4mを測る。平面形における主軸の方向は、N—30°—Eを示す。埋土は灰黄褐色シルトを基調とし、遺物は弥生時代後期の壺、高坏などが、端部に近い位置でまともに出土している。南側に隣接するSX101とは主軸の方向がほぼ直角で、遺物の出土状況も考慮すると、両遺構間は方形周溝墓の陸橋部にあたる可能性が考えられる。

SX101 調査区下面南側に位置する。断面形態が船底形の溝状遺構と思われるが、調査区外にかかると、正確な平面形態は確認できなかった。検出高は7.7mを測り、幅は最大で1.4m、検出長は4.2m、深さは0.2mを測る。平面形における主軸の方向は、N—59°—Eを示す。埋土は灰黄褐色シルトを基調とし、遺物は弥生時代後期の壺が出土している。北側に隣接するSX102とは主軸の方向がほぼ直角で、方形周溝墓の溝端部の可能性が考えられる。



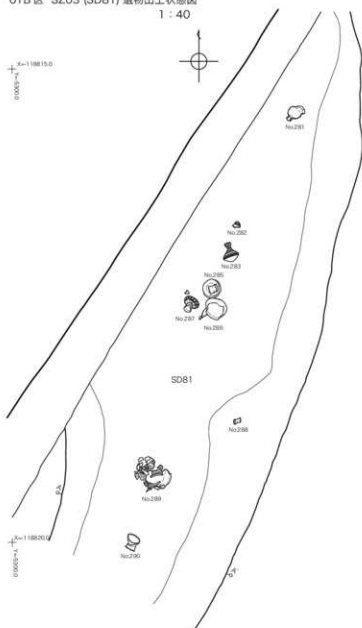




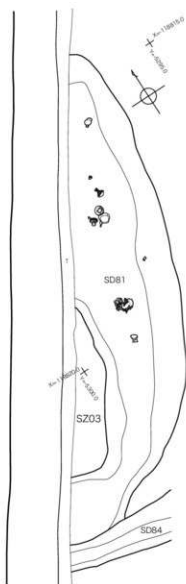


第9图 01B区 SZ01·02平·断面图 1:80

01B区 SZ03 (SD81) 遺物出土状態図
1:40

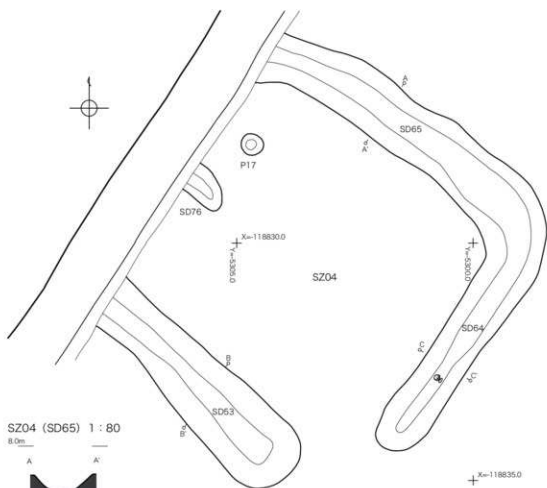


SZ03 断面図 1:40



SZ03 平面図 1:80

第10図 01B区 SZ03 平・断面・出土状態図



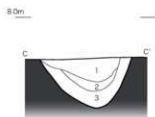
SZ04 (SD65) 1 : 80



SZ04 (SD53) 1 : 80

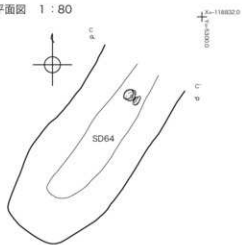


第11図 O1B区 SZ04 平面図 1 : 80



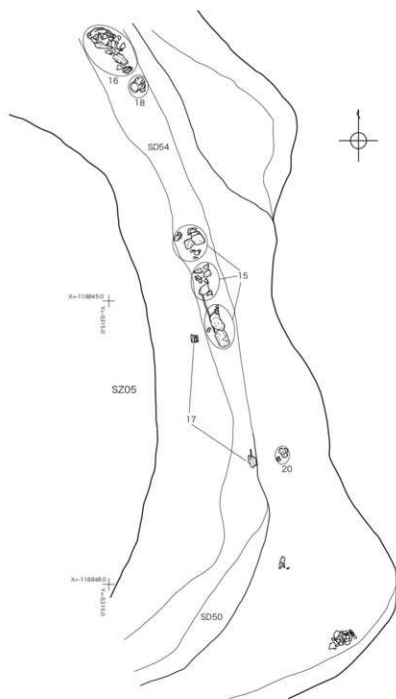
1. 2.5Y3/1 黒褐色砂質シルト
(2.5Y5/1 黄灰色砂質シルト混じる)
2. 2.5Y5/1 黄灰色砂質シルト
3. 5Y6/1 灰色砂質シルト

O1B区 SD64 断面図 1 : 40

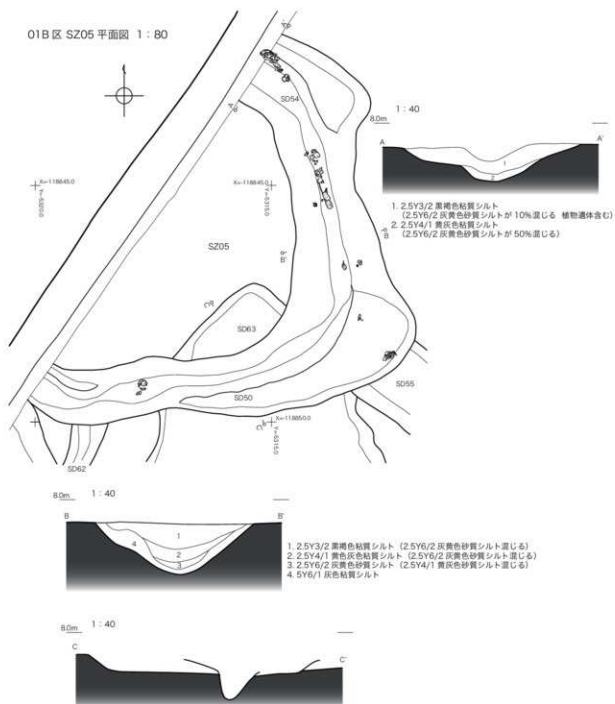


O1B区 SD64 遺物出土状態図 1 : 40

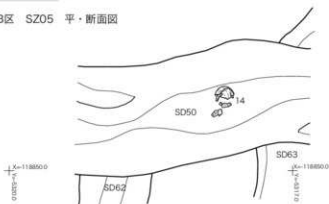
第12図 O1B区 SD64 断面・出土状態図



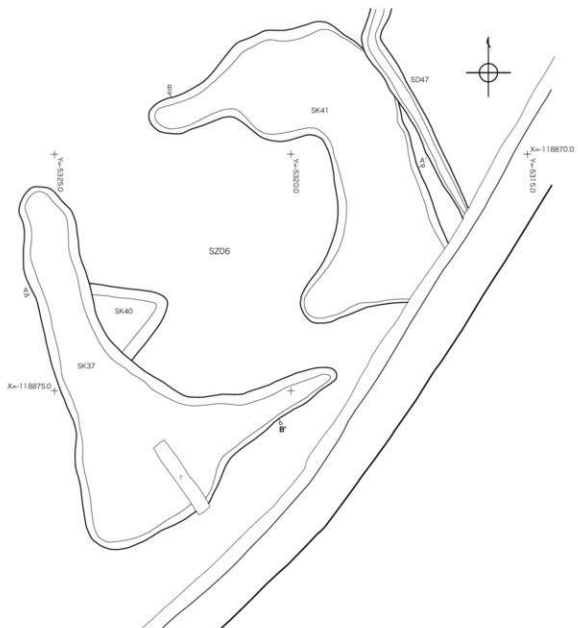
第13图 01B区 SZ05 (SD50·54) 遗物出土状态图 1:40



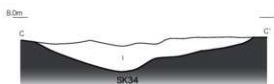
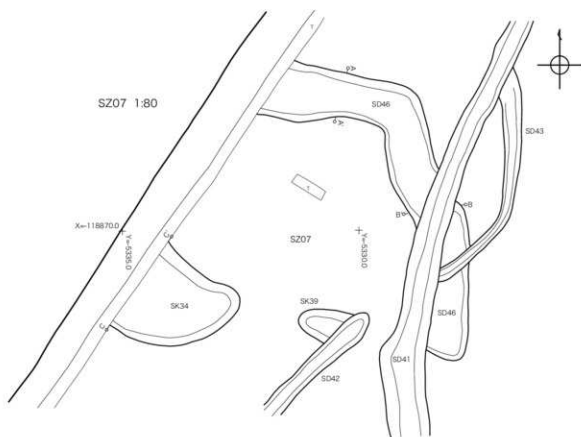
第14図 01B区 SZ05 平・断面図



第15図 01B区 SD50 遺物出土状態図 1:40

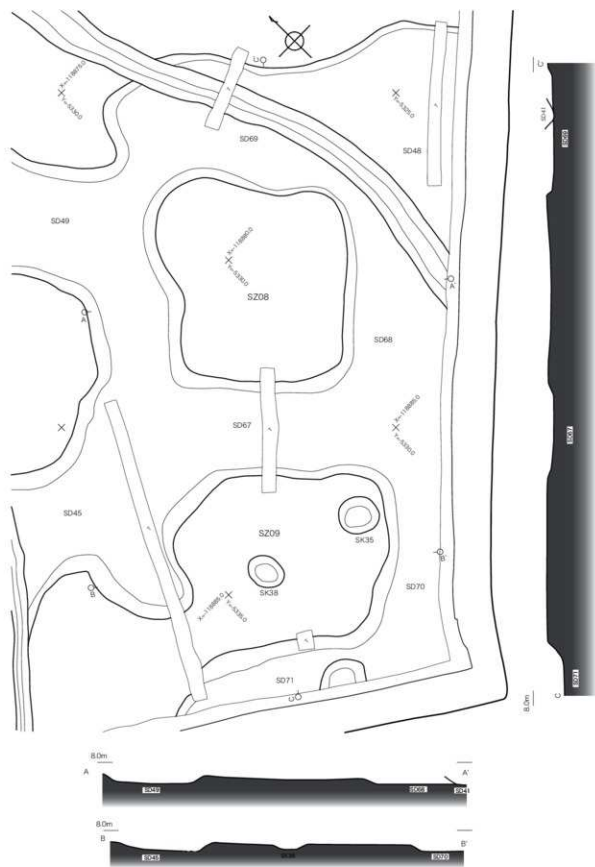


第16图 01B区 SZ06 平·断面图 1:80

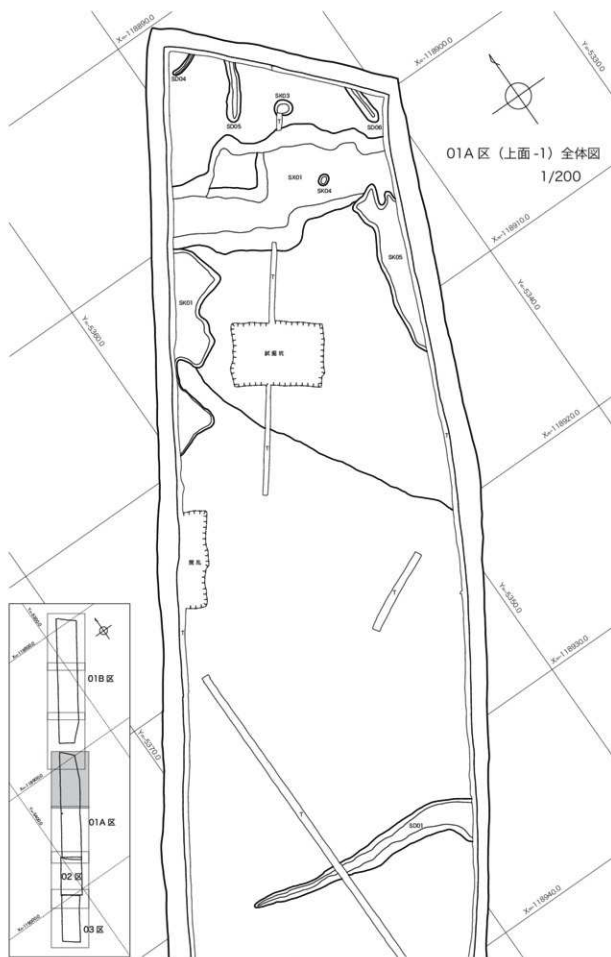


1. N3 / 细灰色粘粒粉砂

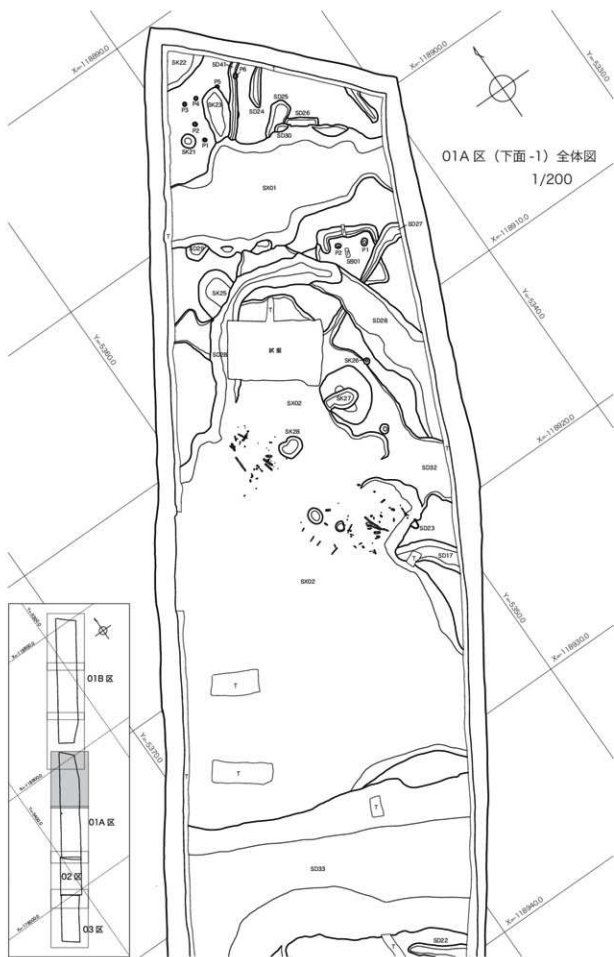
第17图 01B区 SZ07 平·断面图 1:80

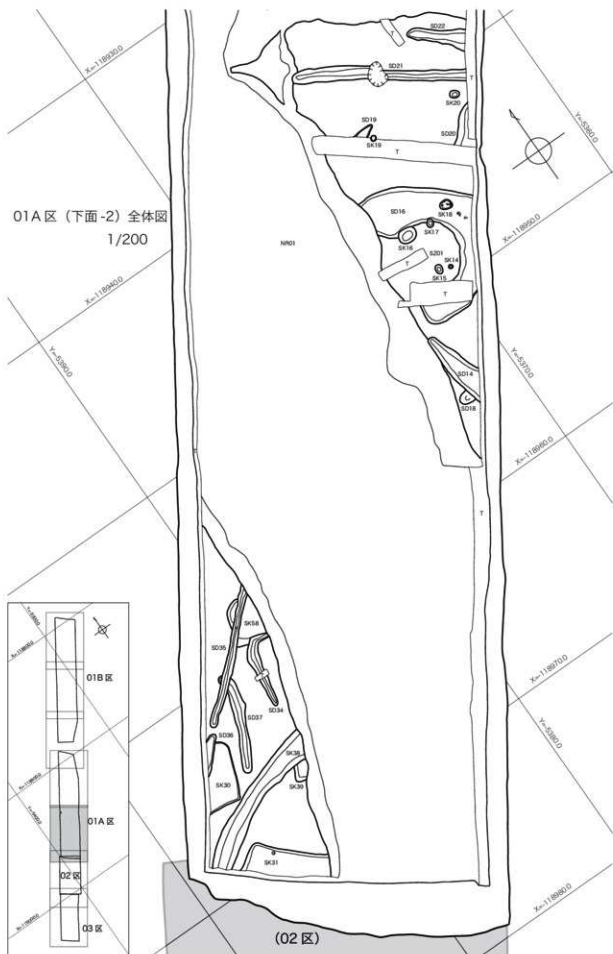


第18图 01B区 SZ08·09 平·断面图 1:80

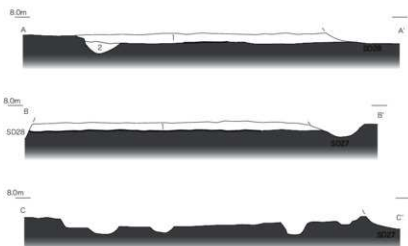
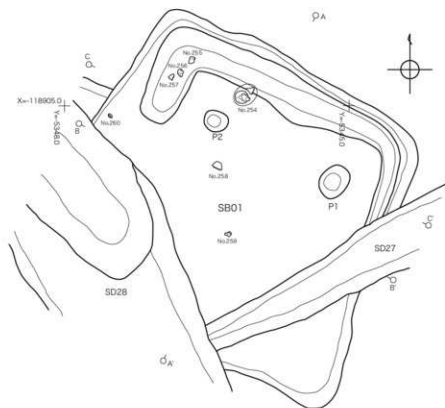


第19图 O1A区 (上面-1) 全体图



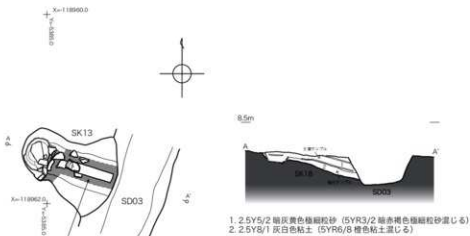


第22図 01A区(下面-2)全体図

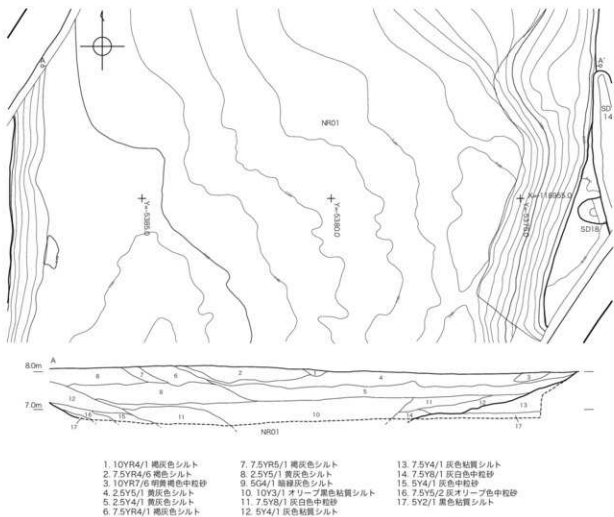


1. 2.5V4/1 黄灰色極細粒砂
2. 5V5/2 灰色オリゾル色極細粒砂

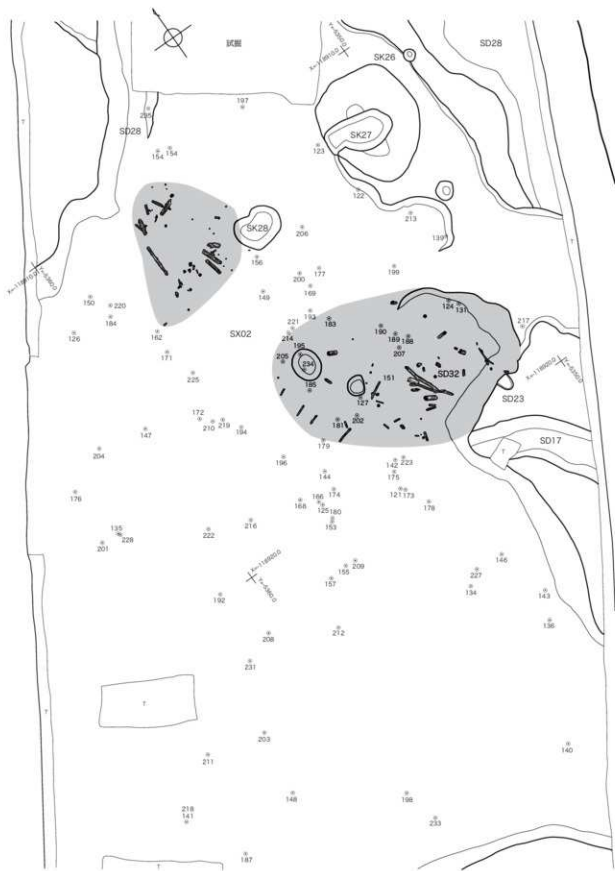
第23図 01A区 SB01 平・断面図 1:40



第24図 01A区 SK13 平・断面図 1:40

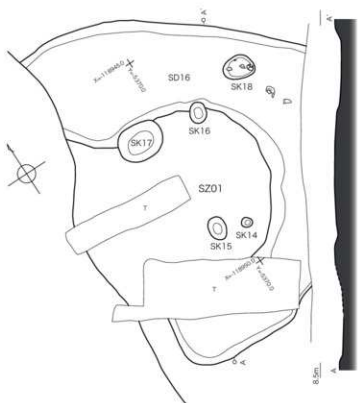


第25図 01A区 NR01 平・断面図 1:100

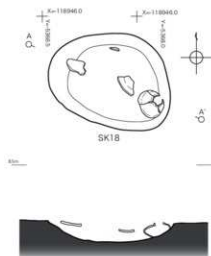


*番号は遺物の登録番号に対応

第26図 O1A区 SX02 詳細図 1 : 100

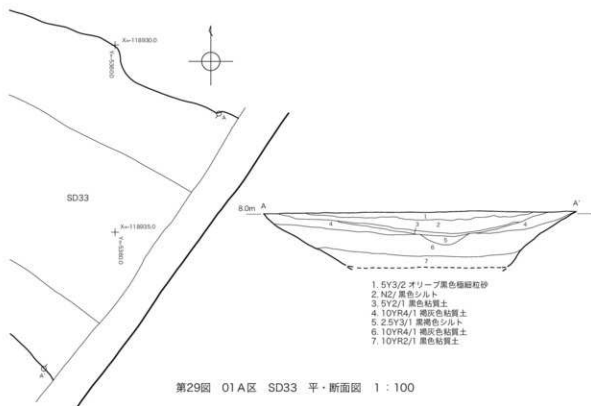


第27図 01A区 SZ01 平・断面図 1:80

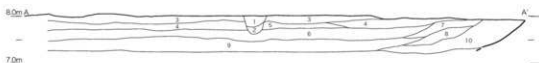


01A区 SK18 遺物出土状態図 1:20

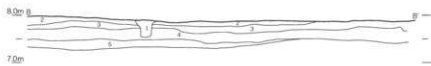
第28図 01A区 SK18 平・断面図 1:20



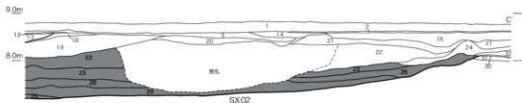
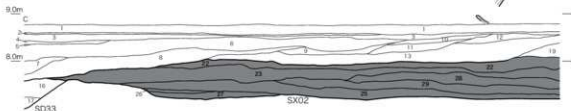
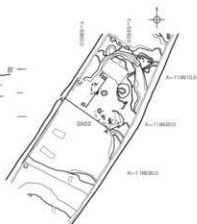
第29図 01A区 SD33 平・断面図 1:100



1. 10YR6/6 明黄褐色シルト (10YR7/4 に近い黄褐色中粒砂を互層状に含む)
2. 10YR6/6 明黄褐色シルト
3. 10YR6/8 明黄褐色シルト
4. 10YR4/1 褐灰色シルトと 7.5YR6/2 灰白色中粒砂の互層
5. 10YR4/1 褐灰色シルト
6. N1.5/ 黒色極細砂
7. 10YR6/8 明黄褐色シルト
8. N1.5/ 黒色極細砂 (N6/ 灰白色中粒砂を互層状に含む)
9. N1.5/ 黒色シルト
10. 5Y4/1 灰色シルト

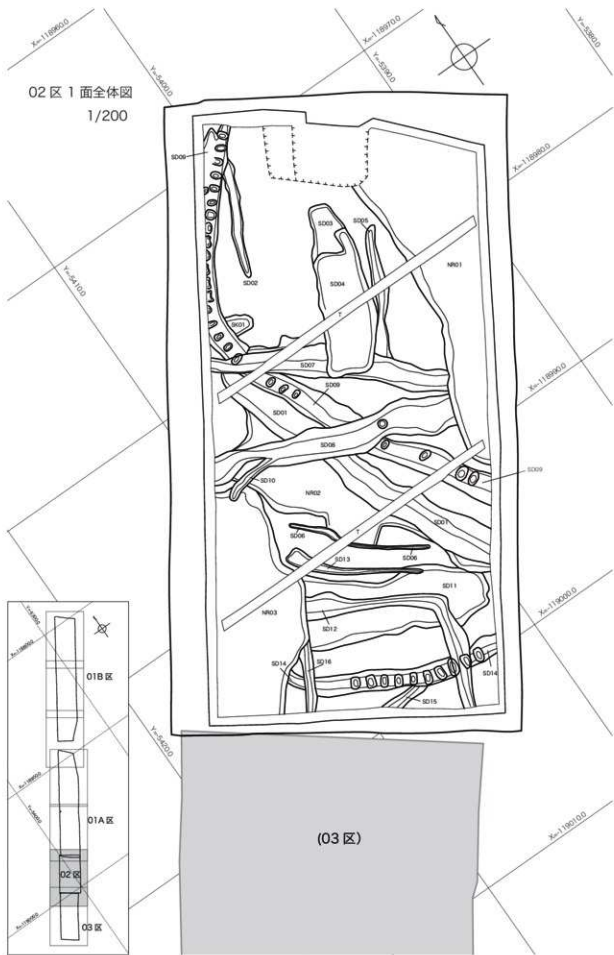


1. 10YR6/6 明黄褐色シルト
2. 10YR6/8 明黄褐色シルト
3. 10YR4/1 褐灰色シルト
4. N1.5/ 黒色シルト
5. N1.5/ 黒色シルト

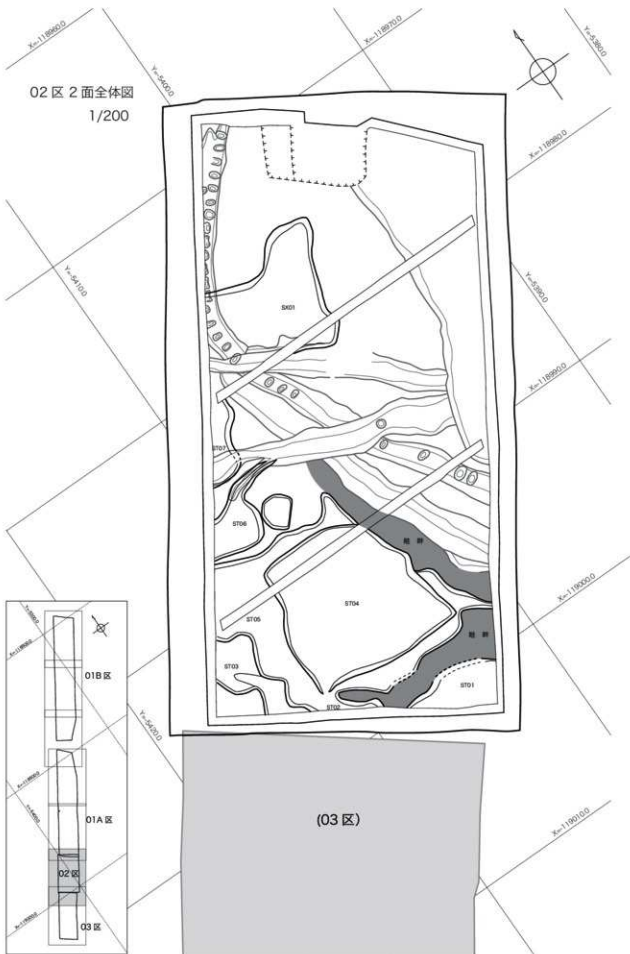


- | | | |
|---|---|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 2.5Y4/2 緑灰色シルト 2. 10YR4/4 褐色シルト 3. 10YR5/3 に近い黄褐色シルト 4. 10YR8/4 淡黄褐色極細砂 (10YR3/1 草褐色土ブロックを含む) 5. 10YR5/4 に近い黄褐色シルト 6. 2.5Y5/3 に近い灰色シルト 7. N3/1 緑灰色シルト 8. 10YR5/4 に近い黄褐色シルト 9. 10YR4/2 灰黄褐色シルト 10. 2.5Y6/2 灰黄色シルト 11. 10YR5/3 に近い黄褐色シルト | <ol style="list-style-type: none"> 12. 2.5Y7/4 淡黄色シルト 13. 10YR5/2 灰黄褐色シルト 14. 2.5Y6/3 に近い黄色シルト 15. 2.5Y7/4 淡黄色シルト 16. N4/ 灰色極細砂 17. 7.5Y2/1 黄色極細砂 18. 2.5Y7/4 淡黄色シルト 19. 2.5Y6/3 に近い黄色シルト 20. 2.5Y7/3 淡黄色シルト 21. 2.5Y6/4 に近い黄色シルト 22. 5Y5/2 灰オリーブ色シルト 23. 5GY4/1 緑オリーブ灰色シルト | <ol style="list-style-type: none"> 24. 10YR4/2 灰黄褐色シルト 25. 2.5GY2/1 黒色シルト 26. 5BG4/1 緑黄灰色極細砂 27. 2.5GY2/1 黒色粘土 28. 5Y3/2 オリーブ黒色シルト 29. 7.5Y2/2 オリーブ黒色シルト 30. 5Y6/1 灰白色中粒砂 31. 5Y6/2 灰オリーブ色極細砂 32. 5Y3/2 オリーブ黄色シルト |
|---|---|--|

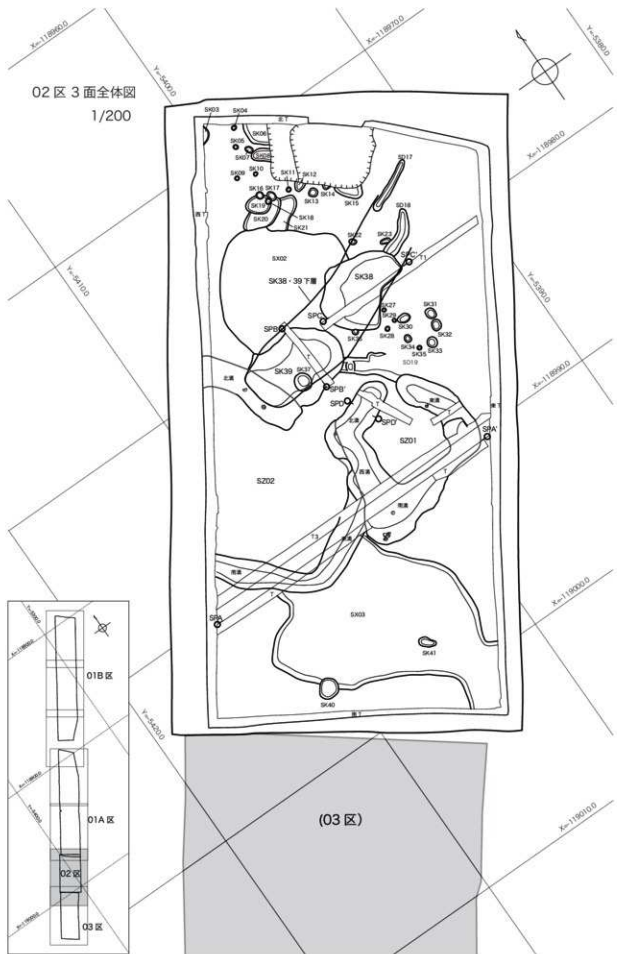
第30図 01A区 SX02 断面図 1 : 80



第31图 02区 1面全体图 1 : 200



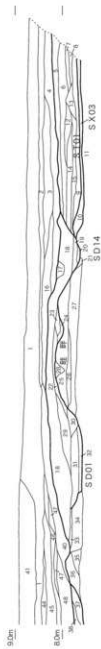
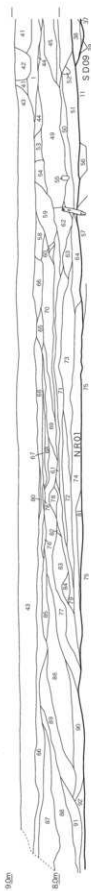
第32图 02区 2面全体图 1 : 200



02区 3面全体図
1/200

第33図 02区 3面全体図 1 : 200

02区東壁断面図 1/80



第34図 02区 東壁土層断面図 1:80

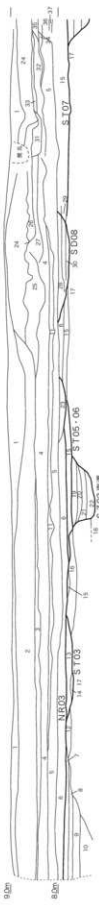
1. 10YR5/6 灰白色粘砂
2. 10YR6/3 土赤い黄白色粘砂
3. 10YR6/3 土赤い黄白色粘砂
4. 10YR6/2 土赤い黄白色粘砂
5. 10YR5/2 土赤い黄白色粘砂
6. 10YR5/2 土赤い黄白色粘砂
7. 10YR3/2 黄白色粘砂
8. 10YR3/2 黄白色粘砂
9. 10YR3/2 黄白色粘砂
10. 10YR5/1 黄白色シルト
11. 10YR6/6 黄白色粘砂
12. 10YR6/6 黄白色粘砂
13. 10YR6/6 黄白色粘砂
14. 10YR6/3 土赤い黄白色粘砂
15. 10YR4/4 黄白色粘砂
16. 10YR7/3 土赤い黄白色粘砂
17. 10YR7/3 土赤い黄白色粘砂
18. 10YR7/3 土赤い黄白色粘砂
19. 10YR6/6 黄白色粘砂
20. 10YR6/1 黄白色シルト・ロウソクの質土
21. 10YR6/1 黄白色シルト・ロウソクの質土
22. 10YR6/1 黄白色シルト・ロウソクの質土
23. 10YR6/2 黄白色粘砂
24. 10YR6/2 黄白色粘砂
25. 10YR6/2 黄白色粘砂
26. 10YR5/6 黄白色粘砂

27. 10YR5/2 土赤い黄白色粘砂
28. 10YR5/2 土赤い黄白色粘砂
29. 10YR4/2 黄白色粘砂
30. 10YR4/3 土赤い黄白色粘砂
31. 10YR5/1 黄白色粘砂
32. 10YR5/1 黄白色粘砂
33. 10YR5/3 土赤い黄白色粘砂
34. 10YR5/3 土赤い黄白色粘砂
35. 10YR6/3 土赤い黄白色粘砂
36. 10YR5/1 黄白色シルト
37. 10YR5/1 黄白色シルト
38. 5B5/1 黄白色シルト
39. 5B5/1 黄白色シルト
40. 10YR5/4 土赤い黄白色粘砂
41. 10YR5/4 土赤い黄白色粘砂
42. 10YR4/3 土赤い黄白色粘砂
43. 10YR4/2 黄白色粘砂
44. 10YR4/2 黄白色粘砂
45. 10YR4/3 土赤い黄白色粘砂
46. 10YR4/3 土赤い黄白色粘砂
47. 10YR/1 灰白色粘砂
48. 10YR4/2 黄白色粘砂
49. 10YR4/3 土赤い黄白色粘砂
50. 10YR5/1 黄白色粘砂
- 10YR/1 灰白色粘砂の互層

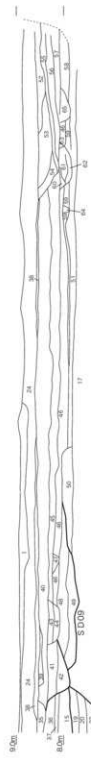
51. 2.5Y4/2 灰白色粘砂
52. 2.5Y4/2 灰白色粘砂
53. 10YR4/2 黄白色粘砂
54. 10YR6/2 土赤い黄白色粘砂
55. 10YR3/2 黄白色粘砂
56. 10YR3/1 黄白色粘砂
57. 5B5/1 黄白色シルト
58. 10YR4/3 土赤い黄白色粘砂
59. 10YR4/3 土赤い黄白色粘砂
60. 10YR5/4 土赤い黄白色粘砂
- 5B5/1 黄白色シルトの互層
61. 10YR4/4 黄白色粘砂
62. 10YR3/1 黄白色粘砂
63. 5B5/1 黄白色シルト
64. 5B5/1 黄白色シルト
65. 10YR5/2 黄白色粘砂
66. 10YR5/2 黄白色粘砂
67. 10YR4/3 土赤い黄白色粘砂
68. 10YR4/3 土赤い黄白色粘砂
69. 10YR4/3 土赤い黄白色粘砂
70. 10YR4/3 土赤い黄白色粘砂
71. 10YR4/3 土赤い黄白色粘砂
72. N7/灰白色粘砂

73. 5B5/1 黄白色粘砂
74. 5B5/1 黄白色粘砂
75. 5B5/1 黄白色粘砂
76. 5B5/1 黄白色粘砂
77. 10YR6/4 土赤い黄白色粘砂
78. 10YR5/1 黄白色粘砂
79. 10YR4/2 黄白色粘砂
80. 10YR4/2 黄白色粘砂
81. 10B6/1 黄白色シルト
82. 10YR4/3 土赤い黄白色粘砂
83. 10YR4/3 土赤い黄白色粘砂
84. 10YR4/3 土赤い黄白色粘砂
85. 10YR4/3 土赤い黄白色粘砂
86. 10YR4/3 土赤い黄白色粘砂
87. 10YR5/3 土赤い黄白色粘砂
88. 10YR4/3 土赤い黄白色粘砂
89. 10YR4/2 黄白色粘砂
90. N7/灰白色粘砂
91. 10YR6/3 土赤い黄白色粘砂
92. 5B5/1 黄白色粘砂

02区西壁断面図 1/80



第35図 02区 西壁土層断面図 1 : 80

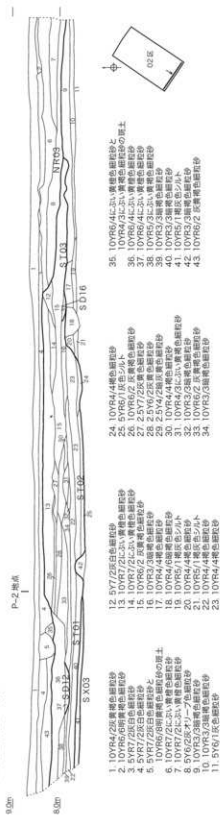


- 1 粘土・土
- 2 10R6/2 灰青色細粒砂
- 3 10R6/6 黄褐色細粒砂
- 4 10R6/3 赤土
- 5 10R7/2 赤土
- 6 5Y6/2 赤土
- 7 10R6/3 赤土
- 8 10R6/3 赤土
- 9 10R6/2 黄褐色細粒砂
- 10 10R6/2 黄褐色細粒砂
- 11 10R6/1 黄褐色細粒砂
- 12 10R6/2 黄褐色細粒砂
- 13 10R6/2 黄褐色細粒砂
- 14 10R6/2 黄褐色細粒砂
- 15 10R6/2 黄褐色細粒砂
- 16 10R6/2 黄褐色細粒砂
- 17 N6/1 灰青色細粒砂
- 18 N4/1 灰青色細粒砂
- 19 赤土
- 20 2.5Y/1 黄褐色細粒砂
- 21 2.5Y/1 黄褐色細粒砂
- 22 10R6/1 黄褐色細粒砂
- 23 10R6/4 赤土
- 24 10R6/5 黄褐色細粒砂
- 25 10R6/3 赤土
- 26 5S6/1 黄褐色細粒砂
- 27 10R6/3 赤土
- 28 5S6/1 黄褐色細粒砂
- 29 10R6/2 黄褐色細粒砂
- 30 2.5Y/1 黄褐色細粒砂
- 31 10R6/4 赤土
- 32 10R6/4 赤土
- 33 10R6/4 赤土
- 34 10R6/1 黄褐色細粒砂
- 35 10R6/3 赤土
- 36 10R6/2 黄褐色細粒砂
- 37 10R6/2 黄褐色細粒砂
- 38 5S6/1 黄褐色細粒砂
- 39 10R6/3 赤土
- 40 10R6/3 赤土
- 41 10R6/3 赤土
- 42 10R6/2 黄褐色細粒砂
- 43 2.5Y/6 黄褐色細粒砂
- 44 10R6/2 黄褐色細粒砂

- 45 2.5Y/2 黄褐色細粒砂
- 46 10R6/2 灰白色中粒砂
- 47 10R6/1 黄褐色細粒砂
- 48 10R6/2 灰青色細粒砂
- 49 10R6/3 赤土
- 50 2.5Y/2 黄褐色細粒砂
- 51 2.5Y/1 黄褐色細粒砂
- 52 10R6/5 黄褐色細粒砂
- 53 10R6/5 黄褐色細粒砂
- 54 10R6/5 黄褐色細粒砂
- 55 10R6/2 灰白色中粒砂
- 56 2.5Y/1 黄褐色細粒砂
- 57 10R6/2 黄褐色細粒砂
- 58 10R6/2 灰白色中粒砂
- 59 10R6/3 赤土
- 60 10R6/2 灰青色細粒砂
- 61 10R6/2 灰青色細粒砂
- 62 10R6/5 黄褐色細粒砂
- 63 10R6/5 黄褐色細粒砂
- 64 10R6/5 黄褐色細粒砂
- 65 10R6/5 黄褐色細粒砂

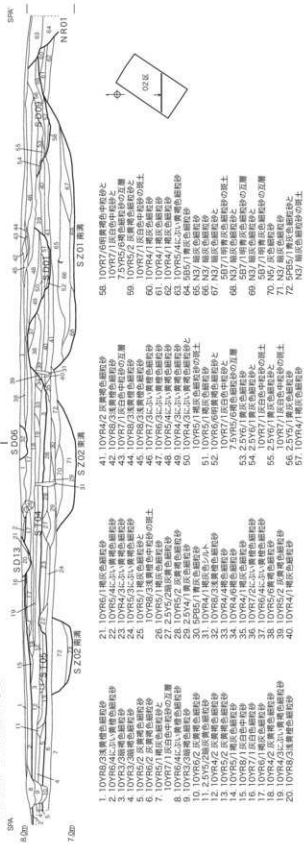


02区南壁断面図 1/80



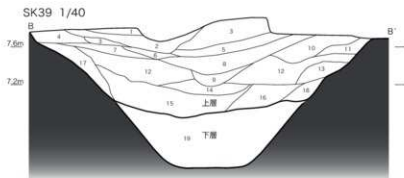
- 1. 10Y94/2 黒褐色細砂
- 2. 10Y94/4 黒褐色細砂
- 3. 5YR7/2 赤白中粒砂
- 4. 5YR7/2 赤白中粒砂
- 5. 5YR7/2 赤白中粒砂
- 6. 10Y96/2 黒褐色細砂
- 7. 10Y96/2 黒褐色細砂
- 8. 10Y96/2 黒褐色細砂
- 9. 10Y96/2 黒褐色細砂
- 10. 10Y96/2 黒褐色細砂
- 11. 5Y6/1 灰色細砂
- 12. 5Y7/2 赤白中粒砂
- 13. 10Y96/2 黒褐色細砂
- 14. 10Y97/2 赤白中粒砂
- 15. 10Y96/2 黒褐色細砂
- 16. 10Y96/2 黒褐色細砂
- 17. 10Y94/4 黒褐色細砂
- 18. 10Y94/4 黒褐色細砂
- 19. 10Y94/4 黒褐色細砂
- 20. 10Y94/4 黒褐色細砂
- 21. 10Y85/1 黄白色細砂
- 22. 10Y94/4 黒褐色細砂
- 23. 10Y94/4 黒褐色細砂
- 24. 10Y94/4 黒褐色細砂
- 25. 10Y96/2 黒褐色細砂
- 26. 10Y96/2 黒褐色細砂
- 27. 2.5Y7/2 赤白中粒砂
- 28. 10Y96/2 黒褐色細砂
- 29. 2.5Y7/2 赤白中粒砂
- 30. 10Y94/4 黒褐色細砂
- 31. 10Y94/4 黒褐色細砂
- 32. 10Y93/3 黒褐色細砂
- 33. 10Y96/2 黒褐色細砂
- 34. 10Y93/3 黒褐色細砂
- 35. 10Y96/2 黒褐色細砂
- 36. 10Y96/4 黒褐色細砂
- 37. 10Y96/4 黒褐色細砂
- 38. 10Y93/3 黒褐色細砂
- 39. 10Y93/3 黒褐色細砂
- 40. 10Y93/3 黒褐色細砂
- 41. 10Y93/3 黒褐色細砂
- 42. 10Y93/3 黒褐色細砂
- 43. 10Y96/2 黒褐色細砂
- 44. 10Y96/2 黒褐色細砂
- 45. 10Y96/2 黒褐色細砂
- 46. 10Y96/2 黒褐色細砂
- 47. 10Y96/2 黒褐色細砂
- 48. 10Y96/2 黒褐色細砂
- 49. 10Y96/2 黒褐色細砂
- 50. 10Y96/2 黒褐色細砂
- 51. 10Y96/2 黒褐色細砂
- 52. 10Y96/2 黒褐色細砂
- 53. 2.5Y6/1 黄白色細砂
- 54. 10Y96/2 黒褐色細砂
- 55. 2.5Y6/1 黄白色細砂
- 56. 2.5Y6/1 黄白色細砂
- 57. 10Y94/4 黒褐色細砂

02区東ベルト断面図 1/80

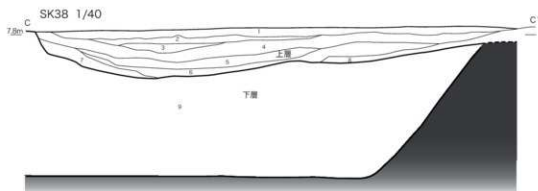


- 1. 10Y96/2 黒褐色細砂
- 2. 10Y96/2 黒褐色細砂
- 3. 10Y93/3 黒褐色細砂
- 4. 10Y93/3 黒褐色細砂
- 5. 10Y96/2 黒褐色細砂
- 6. 10Y96/2 黒褐色細砂
- 7. 10Y95/1 黄白色細砂
- 8. 10Y96/2 黒褐色細砂
- 9. 10Y93/3 黒褐色細砂
- 10. 10Y96/2 黒褐色細砂
- 11. 2.5Y5/2 赤白中粒砂
- 12. 10Y94/2 黒褐色細砂
- 13. 10Y96/2 黒褐色細砂
- 14. 10Y95/1 黄白色細砂
- 15. 10Y94/1 黄白色細砂
- 16. 10Y96/2 黒褐色細砂
- 17. 10Y96/2 黒褐色細砂
- 18. 10Y94/2 黒褐色細砂
- 19. 10Y96/2 黒褐色細砂
- 20. 10Y96/2 黒褐色細砂
- 21. 10Y96/2 黒褐色細砂
- 22. 10Y96/2 黒褐色細砂
- 23. 10Y96/2 黒褐色細砂
- 24. 10Y96/2 黒褐色細砂
- 25. 10Y96/2 黒褐色細砂
- 26. 10Y95/1 黄白色細砂
- 27. 10Y96/2 黒褐色細砂
- 28. 2.5Y4/1 黄白色細砂
- 29. 2.5Y4/1 黄白色細砂
- 30. 10Y95/1 黄白色細砂
- 31. 10Y94/1 黄白色細砂
- 32. 10Y96/2 黒褐色細砂
- 33. 10Y96/2 黒褐色細砂
- 34. 10Y94/4 黒褐色細砂
- 35. 10Y94/4 黒褐色細砂
- 36. 10Y94/4 黒褐色細砂
- 37. 10Y94/1 黄白色細砂
- 38. 10Y95/1 黄白色細砂
- 39. 10Y96/2 黒褐色細砂
- 40. 10Y94/1 黄白色細砂
- 41. 10Y94/2 黒褐色細砂
- 42. 10Y96/2 黒褐色細砂
- 43. 10Y97/1 赤白中粒砂
- 44. 10Y95/2 黒褐色細砂
- 45. 10Y96/2 黒褐色細砂
- 46. 10Y96/2 黒褐色細砂
- 47. 10Y96/2 黒褐色細砂
- 48. 10Y96/2 黒褐色細砂
- 49. 10Y96/2 黒褐色細砂
- 50. 10Y94/1 黄白色細砂
- 51. 10Y95/1 黄白色細砂
- 52. 10Y96/2 黒褐色細砂
- 53. 2.5Y6/1 黄白色細砂
- 54. 10Y96/2 黒褐色細砂
- 55. 2.5Y6/1 黄白色細砂
- 56. 2.5Y6/1 黄白色細砂
- 57. 10Y94/1 黄白色細砂
- 58. 10Y97/1 赤白中粒砂
- 59. 10Y96/2 黒褐色細砂
- 60. 10Y94/1 黄白色細砂
- 61. 10Y94/1 黄白色細砂
- 62. 10Y96/2 黒褐色細砂
- 63. 10Y96/2 黒褐色細砂
- 64. 8Y5/1 黄白色細砂
- 65. 8Y5/1 黄白色細砂
- 66. N3/ 黒褐色細砂
- 67. N3/ 黒褐色細砂
- 68. N3/ 黒褐色細砂
- 69. 5B7/1 黄白色細砂
- 70. N5/ 灰色細砂
- 71. 10Y96/2 黒褐色細砂
- 72. 5Y6/2 赤白中粒砂
- 73. N3/ 黒褐色細砂

第36図 02区 南壁・東西ベルト土層断面図 1 : 80



1. 2.5Y3/2 黒褐色極細粒砂
2. 2.5Y3/1 黒褐色極細粒砂と 2.5Y3/2 黒褐色極細粒砂の混土
3. 2.5Y4/2 暗灰黄色極細粒砂と 2.5Y3/1 黒褐色極細粒砂の混土
4. 2.5Y4/2 暗灰黄色極細粒砂と 2.5Y3/2 黒褐色極細粒砂の混土
5. 2.5Y3/1 黒褐色極細粒砂
6. 2.5Y3/2 黒褐色極細粒砂と 2.5Y3/1 黒褐色極細粒砂の混土
7. 2.5Y3/2 黒褐色極細粒砂
8. 2.5Y4/1 黄灰色極細粒砂と 2.5Y3/1 黒褐色極細粒砂の混土
9. 2.5Y3/1 黒褐色極細粒砂と 2.5Y5/1 黄灰色細粒砂の混土
10. 2.5Y4/2 暗灰黄色極細粒砂と 2.5Y4/1 黄灰色極細粒砂の混土
11. 2.5Y4/1 黄灰色極細粒砂と 2.5Y3/1 黒褐色極細粒砂の混土
12. 2.5Y3/1 黒褐色極細粒砂 (2.5Y5/1 黄灰色細粒砂を含む)
13. 2.5Y3/1 黒褐色極細粒砂と 2.5Y5/1 黄灰色細粒砂の混土
14. 2.5Y3/1 黒褐色極細粒砂 (2.5Y5/1 黄灰色細粒砂を含む)
15. 2.5Y3/1 黒褐色極細粒砂
16. 2.5Y3/1 黒褐色極細粒砂
17. 2.5Y3/1 黒褐色極細粒砂 (2.5Y5/1 黄灰色細粒砂を含む)
18. 2.5Y5/1 黄灰色細粒砂と 2.5Y4/1 黄灰色極細粒砂の混土
19. 2.5Y3/1 黒褐色極細粒砂・シルト (やや粘質、自然米粒・木葉多く含む)

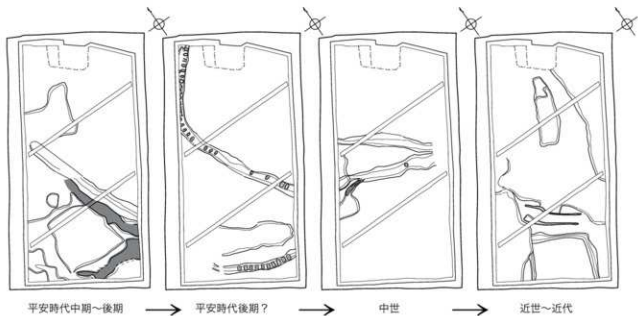


1. 2.5Y3/2 黒褐色極細粒砂
2. 2.5Y3/2 黒褐色極細粒砂と 2.5Y3/1 黒褐色極細粒砂の混土
3. 2.5Y3/1 黒褐色極細粒砂と 2.5Y3/2 黒褐色極細粒砂の混土
4. 2.5Y3/1 黒褐色極細粒砂と 2.5Y3/2 黒褐色極細粒砂のブロック状の混土
5. 2.5Y4/2 暗灰黄色極細粒砂と 2.5Y3/2 黒褐色極細粒砂の混土
6. 2.5Y3/1 黒褐色極細粒砂と 2.5Y5/2 暗灰黄色極細粒砂の混土
7. 2.5Y3/1 黒褐色極細粒砂と 2.5Y4/2 暗灰黄色極細粒砂の混土
8. 2.5Y4/2 暗灰黄色極細粒砂と 2.5Y4/2 暗灰黄色極細粒砂の混土
9. 2.5Y3/1 黒褐色極細粒砂・シルト (やや粘質、自然米粒・木葉多く含む)

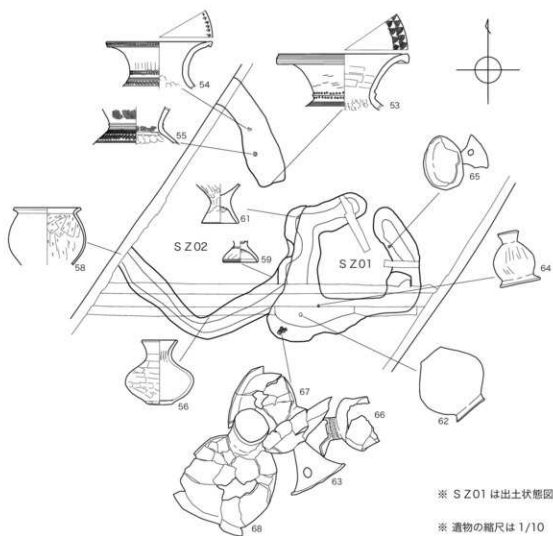


1. 10YR6/4 近い黄褐色細粒砂
2. 10YR5/2 灰黄褐色細粒砂
3. 10YR5/1 黄灰色細粒砂と 10YR7/1 灰白色細粒砂の互層
4. 10YR4/1 黄灰色細粒砂と 10YR7/1 灰白色細粒砂の互層
5. 10YR5/1 黄灰色細粒砂と 10YR7/1 灰白色細粒砂の互層
6. 10YR4/1 黄灰色細粒砂
7. 10YR4/1 黄灰色細粒砂と 10YR7/1 灰白色細粒砂の互層

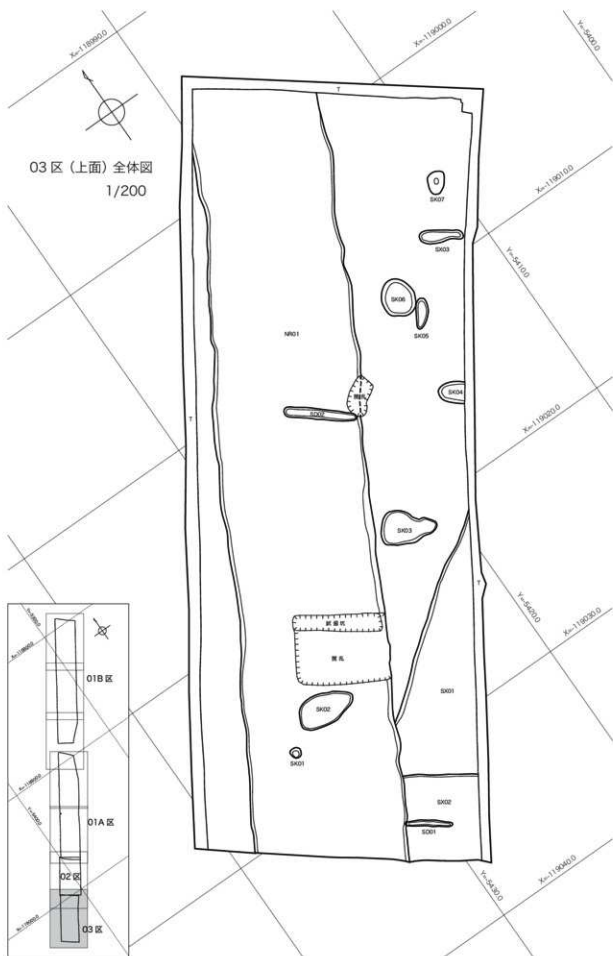
第37図 02区 SK38・SK39・SZ01 土層断面図 (1/40)

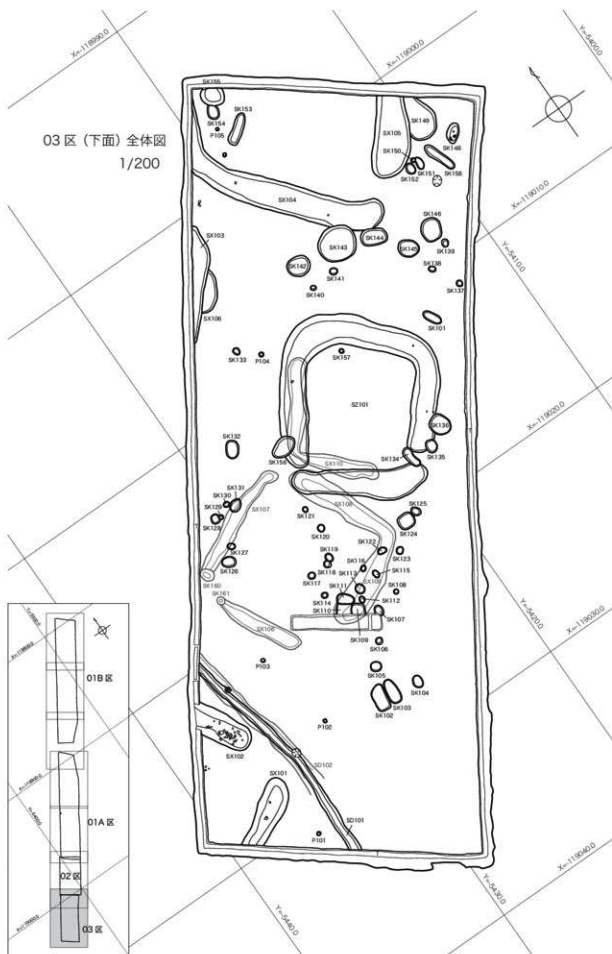


第38図 02区 1・2面遺構変遷図 (1/500)



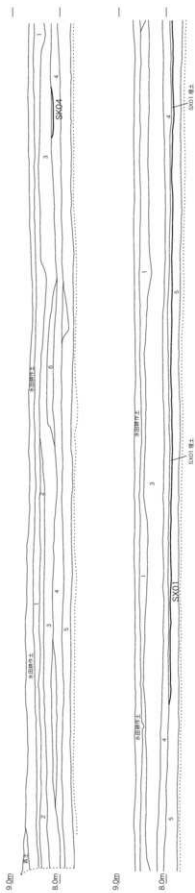
第39図 02区 SZ01・02遺物出土状況 (1/200)





第41图 03区(下面)全体图 1:200

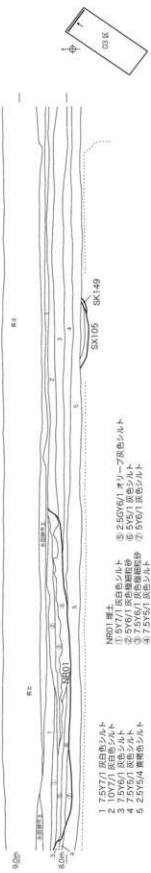
03区東側断面図 1/80



- 1 7.5Y7/1 灰白色シルト
- 2 10Y7/1 灰白色シルト
- 3 7.5Y6/1 灰白色シルト
- 4 7.5Y6/1 灰色シルト
- 5 2.5Y5/4 黄褐色シルト
- 6 5GY6/1 オリーブ灰色細砂
- 7 2.5GY/1 新オリーブ灰色細砂



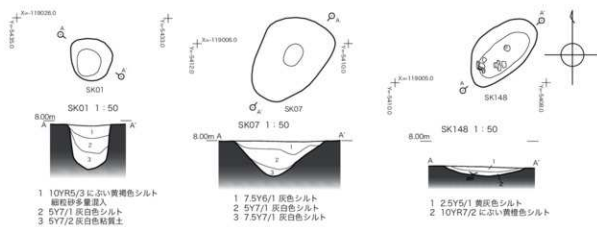
03区北側断面図 1/80



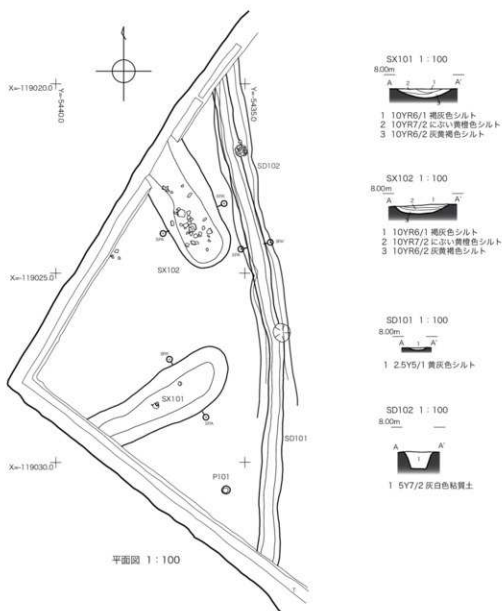
- NE01 層土
- ① 9Y7/1 灰白色シルト
- ② 7Y6/1 灰色シルト
- ③ 7.5Y6/1 灰色シルト
- ④ 7.5Y6/1 灰白色シルト
- ⑤ 2.5GY6/1 オリーブ灰色シルト
- ⑥ 5Y5/1 灰白色シルト
- ⑦ 5Y6/1 灰色シルト
- ⑧ 7.5Y5/1 灰白色シルト

- 1 7.5Y7/1 灰白色シルト
- 2 7.5Y6/1 灰白色シルト
- 3 7.5Y6/1 灰色シルト
- 4 7.5Y6/1 灰色シルト
- 5 2.5Y5/4 黄褐色シルト

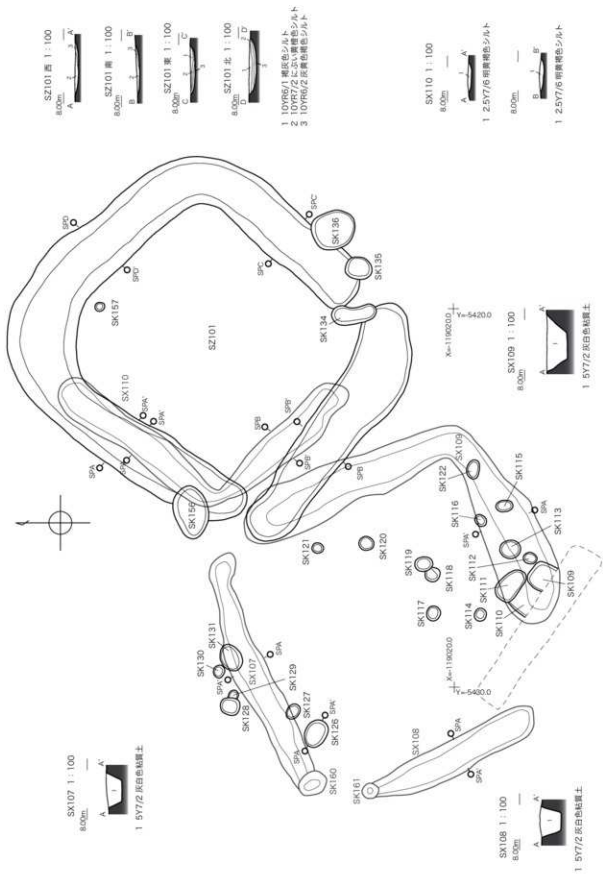
第42図 03区 土層断面図 1 : 80



第43図 03区 SK01・07・148 平・断面図 1:50



第44図 03区 SD101・102・SX101・102 平・断面図



第45図 03区 SD101・102・SX101・102 平・断面図

SZ101 西 1:100
8.00m
A
B
C
D

SZ101 南 1:100
8.00m
A
B
C
D

SZ101 東 1:100
8.00m
A
B
C
D

SZ101 北 1:100
8.00m
A
B
C
D

1. 10YR6/1 褐色色シルト
2. 10YR7/2 紅褐色シルト
3. 10YR6/2 赤褐色シルト

SX110 1:100
8.00m
A
B
C
D

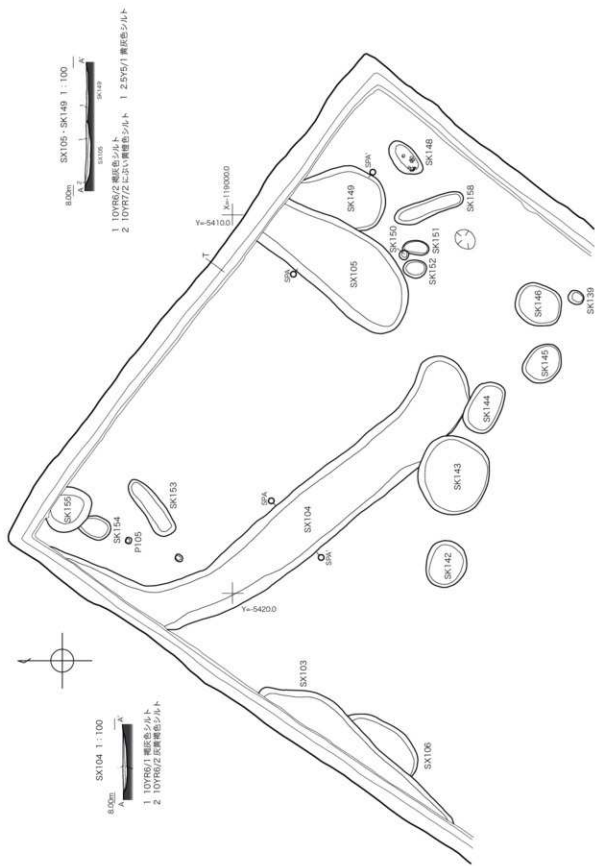
1. 2.5Y7/6 黄褐色シルト
8.00m
A
B
C
D

1. 2.5Y7/6 黄褐色シルト
8.00m
A
B
C
D

X=1190200
Y=54200
SX109 1:100
8.00m
A
B
C
D
1. 5Y7/2 灰白色粘壤土

SX107 1:100
8.00m
A
B
C
D
1. 5Y7/2 灰白色粘壤土

SX108 1:100
8.00m
A
B
C
D
1. 5Y7/2 灰白色粘壤土



第46図 03区 SX104 周辺遺構平・断面図

第V章 遺物

第1節 概要

今回の上橋下遺跡における調査では、北側の01B・A区において一定量の遺物が出土しているが、02・03区と地点が南になるほど出土遺物が少ない結果となった。原因として、01B・A区に比較して02・03区は、沖積平野の微高地から外れ、遺構も希薄になってゆくことが考えられる。

出土遺物の時期的比率では、弥生時代～古墳時代前期の土器が多くを占め、平安時代の灰釉陶器が少ないながら検出され、鎌倉・室町時代の灰軸系陶器（山茶碗類）の集中が確認され、少ないながら戦国時代以降の陶磁器、土製品等も確認された。

弥生時代から古墳時代前期の遺物がみとめられた遺構は、方形周溝墓を主体とし、わずかに土坑からも検出された。器種は、壺・甕を主体とし、少ないながら高坏もみとめられた。

平安時代の遺物では、灰釉陶器が包含層内や溝からわずかに検出され、平安時代中期にあたるものを主体とし、器種は、碗を主体とし、わずかに耳皿もみとめられた。

中世の遺物では、01A区における祭祀遺構から、山茶碗が集中して検出されたが、局部的でその他の地点からはわずかに検出された程度である。

戦国時代以降の遺物は、溝状の落ち込み、自然流路の埋土にわずかに検出される程度で、まともに出土する例は見られなかった。

ここでは、時期の把握がある程度可能な遺物について、時期別に説明する。なお、遺物が比較的まともに出土した遺構については、それぞれの遺構ごとに説明する。

第2節 時期別出土遺物

第1項 弥生時代から古墳時代

01B区SZ03 1～12はSZ03の東溝SD81より出している。1～7・12は凹線文土器。1～3は袋状口縁細頸壺で、1・2は平底、3は脚台が付く。1の口縁部には棒状工具による凹線が巡り、頸部にはイタによる2段の連続刺突、体部上半はクシによる直線文・簾状文・波状文が施される。また体部下半は下方へのケズリ成形・調整後に縦位→横位のミガキ調整がなされる。2の口縁部にはやや浅い凹線が巡り、体部上半には半截竹管またはクシによる直線文・簾状文・波状文が施され、体部下半はミガキ調整がみられる。3は口縁部・頸部にはイタによる凹線が、頸部・体部最大径部にはイタによる連続刺突、頸部・体部上半にはクシによる簾状文・扇形文、半截竹管による格子文が施され、体部下半はイタによるナデ調整がなされる。また口縁部の半分程が打ち欠かれている可能性があり、4が脚部になると思われる。5はナデ・ミガキ調整される鉢、外・内面に薄く煤・有機物が付着する。6・7・12は台付甕。6は口縁部が外湾して屈曲し、端面が沈線状に凹む。体部は頸部の横位タタキ→上半の縦位ハケ→上半の横位タタキ→中位～下位の斜位タタキ→下半の縦位ハケの順に成形・調

整が行われ、中位にイタ角による連続刺突が施される。内面は下半がケズリ、上半がハケ・イタナデ成形・調整される。7は口縁部が、強いヨコナデによりく字状に直線的に延びるもので、体部上半の横位タタキ・下半のやや斜位タタキ→上半のハケ→体部内中位～下位のハケ→上半の斜位タタキ→中位の斜位タタキの順に成形・調整される。体部内面は中位～上位付近にまでケズリ成形・調整が及ぶ。体部外面上部には煤が多量に付着する。8～11は古井式土器。8～10は太頭壺で、8はへらによる横位・斜位文様が描かれる。10は口縁部端面に浅い連続刺突が、体部には不揃いなハケ工具による直線・波状文が施される。11はナデ調整された甕の脚台。時期は長床式期・古井式期後葉にあたる。

01B区SZ04 SZ04の南東溝であるSD64より、13のワイングラス形高坏が出土している。13は坏口縁部がわずかに外湾するもので、外面はハケ後ミガキ調整される。脚部上半にはへら及び棒状工具による直線文が巡る。時期は山中式期後葉～廻間I式期初頭。

01B区SZ05 14はSZ05の南溝、15～20は東溝から出土している。外面をミガキ調整された14は長頭壺になるが、15・16は太頭壺。15は口縁端部が内傾するもので、外面に羽状のイタ連続刺突、内面にも斜位の連続刺突が施される。また体部上面にはクシ直線文と重なるように2段の波状文が描かれ、下半部には有機物が付着する。底部は突出して器厚が厚い。16は口縁端部が丸く上下に拡張されるもので、外面に3または2個の円形浮文（残存部分では3個一対が1ヶ所、2個一対が隣り合って2ヶ所みられ、円形浮文は合計で6方向にあったと考えられる）と部分的に波状文がみられる。体部上半にはクシ直線文と二枚貝による斜位の連続刺突が施され、中位にはハケ→ミガキ調整がなされる。また体部内面はイタナデ・ケズリ成形・調整される。17・18・20は甕。17は口縁部がわずかに内湾する大型甕、18は口縁部が直線的に上外方に延びる小型台付甕になる。時期は山中式期後葉～廻間I式期初頭。

01B区SD55 19は受口状口縁部で、口縁部外面と体部肩部にイタ連続刺突が施され、内面にはケズリ成形・調整がみられる。時期は山中式期後葉～廻間I式期初頭。

01B区SD66 古井式の壺体部上位（21）と中位（22）が出土している。文様は不揃いなハケ工具による直線文と波長の長い波状文、イタ刺突が施される。

01B区SD59 23は内傾して延びる口縁部をもつ長（短）頭壺で、体部外面は細かいミガキ調整がなされる。

01B区SD58 24は体部に二枚貝による縦羽状の条痕文が施される、水神平式深鉢。

01B区SD41 25はミガキ調整された小型壺で、26は外面にケズリ成形・調整された太頭壺になる。27はやや内湾する口縁部を有する甕で底部外面がケズリ成形・調整される。28はやや外湾しながら直立する口縁部をもつ甕でナデ調整、29はく字状に屈曲する口縁部をもつハケ調整甕になる。時期は松戸戸式期前半か。

01B区 30はH-44窟式期の須恵器坏蓋の杯、31は山中式期後葉から廻間I式期の壺、32・33は松戸戸式期の高坏・甕になる。

01A区SK24 34の長頭壺は磨減しており調整は不明、35・36は蓋、37はナデ調整される小型甕。時期は山中式期後葉。

01A区SK18 38は太頭壺の口縁部で、端部がわずかに上下に拡張し、竹管による連続刺突が施さ

れる。39は小型の太頸壺で、口縁端部が折り返されて、端面にイタによる斜位の連続刺突がなされる。また頸部外面には赤彩痕がみられる。40はナデ調整された直口壺。時期は八王子古宮式期。

01A区SD17 41はナデ調整される山中中期の甕脚台部。

01A区SD33 42は混入品と思われる条痕文深鉢の底部。43は小型太頸壺の体部で、上半部にはクシによる直線文、イタまたは棒状工具による連続刺突、3方向の円形浮文がある。44は同一個体と思われる高坏杯部と脚部。杯部は口縁端部内面がヨコナデによる面をもち、ミガキ調整される。脚部はクシによる直線文と上下一対の透し孔が3方向に開き、ミガキ調整が施されている。時期は廻間式期中葉。45～47は加工円盤になる。45は古井式壺を、46は凹線文系タタキ・ケズリ甕を用いている。3点とも側面を打ち欠いて整形されるが、45・46にはわずかに研磨痕がみられる。

01A区 48は山中式台付甕の脚台、49はNR01より出土した廻間式太頸壺の体部で同心円形（渦巻形）に赤彩が施される。50も廻間式の短頸壺。51は6世紀後半の有蓋高坏、52はSX02より出土した下呂石製の石織になる。

02区SZ02 53～55は北東溝、56・57・59・61は南東溝、58・61は南西溝から出土している。53～55は太頸壺。53は口縁部がゆるやかに屈曲して端面がやや垂下する太頸壺で、口縁端面に凹線、内面に扇形文が施される。また頸部には断面三角形の突帯が巡り、上下に竹管による連続刺突がなされる。体部はクシ直線文がみられる。54も口縁部がゆるやかに屈曲するもので、端部が折り返されて外傾面をなす。端面には竹管によると思われる凹線と連続刺突が、内面には扇形文がみられる。また頸部には竹管連続刺突、クシ直線文・波状文が施される。55は頸部に2条の突帯が巡り、体部にクシ簾状文・波状文・直線文が施される。56は長頸壺で、ゆるやかに外湾する口縁部をもち、端面は丸い。体部は中位で横に大きく張り出し、外面にはナデ調整がなされる。57～61は台付甕。く字状に折れる口縁部をもつ57・58は、体部外面はナデ調整、内面は頸部までケズリ成形・調整されている。58の体部外面には煤が多量に付着している。59～61は脚台部で、59は袋状に広がる脚端部外面にクシによる直線文（凹線）が、60はハ字状に広がる低い脚で内面にケズリ成形・調整がみられ、61は高い脚でナデ調整される。時期は八王子古宮式期。

02区SZ01 62～64・66～68は南溝、65は東溝から出土している。62は短頸壺であるが、磨減しているため調整は不明。63はミガキ調整された有蓋高坏で、脚部に3帯のクシ直線文が巡る。杯口縁部は外反する。65は椀形高坏でやや内湾する杯部をもつ。調整は磨減しているため不明。66はやや外湾する杯部をもつワイングラス形の高坏で、脚部にへら直線文・貝刺突・ミガキ調整がみられる。64・67・68は台付甕。64は小型甕で、内面中位までケズリ成形・調整がなされる。67もやや小型のもので、内面下半に縦位・上半に横位のケズリ成形・調整がなされる。68は球形の体部をもち、内面は縦位のケズリ成形・調整がなされている。時期は山中式期後葉。

02区SK38・39 69はSK38上層、71・72がSK39上層、74～84はSK38・39下層から出土している。また70はSK39の上層と下層が、73はSK39上層とSK38下層のものが接合している。69は球形の体部をもつ太頸壺で、体部外面と口縁部内面に横位のミガキ調整、体部内面にイタナデ調整がなされる。70・71はく字状口縁壺で、70はハケ調整、71はナデ調整される。72の台付甕の脚台には、内面にケズリ成形・調整がみられる。73はミガキ調整される椀形高坏で、口縁端部が外傾する面をなす。杯

部外面にはクシによる波状文・直線文、貝による連続刺突が、脚部には棒状工具による沈線・クシ直線文が描かれる。74はミガキ調整された壺底部。75は杯口縁端部が外傾する面をなす高杯、76はヘラ沈線が巡る高杯脚部、77・79はミガキ調整・クシ直線文・貝刺突が施されたワイングラス形高杯になる。また79の杯部から脚部外面には煤・有機物が付着している。78・80～83は台付甕で、78はナデ調整、80はハケ調整、ケズリ成形・調整がなされる。84は口縁端部が下外方に垂下して面をなす太頸部で、外面にイタによる直線文または凹線が、内面にはイタによる羽状の連続刺突がある。また外面はハケ調整、内面はミガキ調整される。これらの資料は調査時の混乱によって、上層・下層の区分が明瞭ではないが、山中式期中葉から廻間式期前葉に比定される。

03区SZ101 85は北東溝、86は北西溝から出土している。85は太頸部口縁部で、端部が下外方に垂下して面をなすもので、外面に羽状の連続イタ刺突、内面に羽状の連続イタ刺突と扇形文の組み合わせがみられる。86は磨減が激しいため調整が不明なワイングラス形高杯。時期は山中式期後半。

03区SX104 87・89は太頸部。87は口縁端部が下外方に垂下するもので、外面にクシ直線文、内面にイタ連続刺突が施される。89は下方に口縁端部が垂下するもので、外面はイタ状工具による凹線、内面に羽状のイタ連続刺突がなされ、頸部は外面がナデ調整、内面がミガキ調整される。88は台付甕の脚部。時期は八王子古宮式期か。

03区SX106 90は口縁端部がわずかに下外方・上内方に延びる太頸部で、口縁面にイタによる凹線、内面に扇形文が描かれる。91は有稜高杯で、杯外面に波状文・直線文が描かれる。時期は山中式期中葉。

03区SX109 92は有稜高杯の杯部で、口縁内面に2条の沈線、外面に波状文が施される。時期は山中式期中葉。

03区SX101 93は口縁端部が上方につまみ上げられ稜をもつ直口壺で、外面全体・口縁部内面はミガキ調整、体部内面はナデ・ハケ調整される。また底部外面は不定形な形の凹みがみられる。94はミガキ調整されたワイングラス形高杯で、脚部外面にクシ直線文とイタ連続刺突が交互に施文される。時期は山中式期中葉。

03区SX102 95・96とも太頸部底部。

03区SX103 97は有稜高杯、98く字状口縁甕で、両者とも磨減しているため調整は不明である。またミガキ調整された短頸部99もSX103である可能性がある。時期は山中式期後半。

03区SK148 100はミガキ調整された脚付直口壺。脚部には半截竹管によると思われる直線文とイタ連続刺突が施される。時期は山中式期中葉。

03区SK101 101は直口壺。磨減が激しく調整は不明である。

03区SD101・102 SD101出土の103は体部最大径が下位になる廻間式期の太頸部で、底部がやや内湾する。調整はナデ調整。SD102出土の104は植物束による条痕文が施された深鉢。時期は朝日式期・岩沼式期か。102の鉢はトレンチより出土していて確実な帰属遺構は不明であるが、時期はSD101出土の103と同時期の廻間式期と思われる。

03区 105はクシ直線文が施された加飾壺頸部、106・107は屈折脚高杯の脚部、108は碧玉製管玉。

第2項 古代

109～120は、灰陶陶器である。出土調査区の内訳は、114が01B区、109・119が01A区、110・111・115・116が02区、112・113・117・118・120が03区出土である。器種は、112・120が深椀で、119が耳皿、その他が椀である。

109～111は三日月高台を有し、111は高台断面がやや薄手である。109は01A区SX01出土で、内側に軸のタレがみとめられる。110は02区ST04出土で、109とともに黒笹90号窯式期の様相がみとめられる。02区SX01出土の111には、折戸53号窯式期の様相がみとめられる。115は02区SD01出土で、高台が低くずれており、116は02区SD11出土で、高台端部の断面形態は鋭角ではない。どちらも、東山72号窯式期の様相がみとめられる。119は01A区SK02出土の耳皿である。器形は小振りで、高台はみとめられない。東山72号窯式期の様相がみとめられる。

112～114・118・120は、遺構外出土品である。112・120は深椀で、120の器壁は厚手で百代寺窯式期の様相がみとめられる。118は、遺存度が低く皿の可能性も考えられるが、高台がつぶれ気味で東山72号窯式期の様相がみとめられる。高台内には、「寿」の可能性のある墨書が施されている。

第3項 中世

121～239は中世の遺物である。図示したものはほとんどが01A区SX02から出土しており、遺物の出土量の濃淡が著しいことが特徴となっている。

121～235は01A区SX02出土。椀が圧倒的で小皿がこれに加わる。これらのほとんどが尾張型で、わずかに瀬美・湖西型が含まれている。器面に使用痕と考えられる摩滅が観察できない資料が多く、外面にススが付着するものも含まれている。また、器面に貫通する亀裂が認められる資料も多く、墨書土器がある程度含まれることも特徴となっている。この他に土師器の皿が散見できることや、小瀬戸様式の器種が欠落するのが特色かもしれない。なお、紙面の関係から詳細は本書に添付されているCD-ROMに収録されている中世土器一覧表を参照とする。

121～216は椀。121～123は第6型式。121・122は瀬美・湖西型で墨書が確認できる。121が「本」か。124～164は第7型式。全て尾張型で、140・159～164に墨書が確認できる。140が「一」、159・164が「干」、162が「×」、163が「十」となる。165～192は第8型式。全て尾張型で、165は焼成時の輪トチが残存する。165・166・192が墨書土器で、165が「○」、166が「一」、192「の」か。193～216は第9型式。193～196は焼成時の輪トチが残存する。197・198が墨書で、198が「○」、197は判読できない。217～223は小皿。217が第5型式、218が第6型式、219が第7型式、223が第9型式となる。218が瀬美・湖西型で、他は尾張型となる。223・224は墨書で、223は記号状で花押かも知れない。224は壺。口縁部と底部を欠く。型部には押印文が確認できる。意匠は巴である。知多窯5～6型式期。225は鉢。口縁部片で、端部に面を持つ。内面は使用痕が明瞭となる。知多窯6型式期。

226～231は土師器。226は鍋。口縁部片となる。外面にススが付着する。227～231は皿。231は小型となる。230・231は外底部に回転糸切り痕が確認できる。232は青磁で椀の口縁部片。233・234は陶丸。235は加工円盤。椀の底部を使用している。

236は01A区SX02中に掘削されたSK25出土。椀で、渥美・瀬西型の第6型式。

237・238は01A区NR01から戦国時代以降の遺物に混入して出土した。いずれも尾張型の第9型式。

239は02区NR02出土。土師器皿である。

・銭貨

銭貨は13点出土している。量的には02区に集中する傾向にある。詳細は表を参照とする。1～10は02区SD 01上面出土。7点が錆着いた状態、3点がその周辺から出土している。その他は単独で出土したもので、11が02区SD06の埋土中、12・13が01A区SX02である。

第4項 戦国時代以降

240～258は、戦国時代以降の遺物である。図示したものはすべて01A区出土で、243が土器、255～258が土製品、その他は陶器である。出土位置の内訳は、240・241・243はSX01、242・244～258はNR01出土遺物である。

SX01 240・241は、瀬戸産と思われる天目茶碗と輪ハゲ皿で、241は削り出し高台である。いずれも17世紀後葉の様相がみとめられる。243は、土器内耳鍋である。半球形の体部で、口縁端部の断面形態が窪みを有し内外に張り出している。耳部は盛り上がり、16世紀中～後葉の様相がみとめられる。

NR01 244～246は陶器椀で、244・245は天目茶碗、246は腰錆椀である。244は体部の断面形態が開いており、内部には茶筌によるものと思われる使用痕がみとめられた。瀬戸・美濃産で、16世紀末葉の様相がみとめられる。245は、体部断面形態の立ち上がり強く、美濃産で17世紀中葉の様相がみとめられる。246は、上下で軸がかけ分けられており、瀬戸産で18世紀後葉の様相がみとめられる。242・247・248は陶器皿である。242・247は美濃産の丸皿で、17世紀後葉の様相がみとめられる。248は美濃産の灯明受け皿で、受け部が高く18世紀後葉の様相がみとめられる。249は灰釉が施された片口鉢で、口縁端部は短く折り返されており、18世紀後葉～19世紀前葉の様相がみとめられる。250は瀬戸・美濃産と思われる行平鍋で、19世紀中葉の様相がみとめられる。251・252は蓋物の身で、いずれも瀬戸・美濃産と思われるが、251は内部に軸が施されており、用途が限定されることも考えられる。どちらも、19世紀中葉の様相がみとめられる。253は土瓶の蓋と思われ、外面に上野軸が施されており、胎土の特徴から信楽産の製品を写した瀬戸産で、18世紀後葉～19世紀中葉の様相がみとめられる。254は美濃産の錆軸が施された徳利で、18世紀後葉～19世紀中葉の様相がみとめられる。255～258は、土製品である。255は鯛を背に担いだ恵比寿を象ったものと思われ、前後の型作りである。256は上下型作りの椀で、下半部や頭は欠損している。257は前後型作りの婦人を象った人形で、頭部以外は欠損している。258は、武者を象った人形頭部である。257・258ともに頭部の大きさから推定する高さは、座像だとしても20cmを超える大型品と思われる。歌舞伎などをモチーフにした三河土人形の一つだとすれば、明治期以降の可能性が考えられる。

第5項 木製品

上橋下遺跡からは、弥生中期後葉・鎌倉・江戸時代の3時期におよぶ木製品57点が出土している。

うち、ここでは52点の木製品について、時期ごとに概略を述べていくこととする。

1. 弥生中期後葉（1～34）

すべて01A区のSD33からの出土である。

1は鍔斧（太型始刃斧斧）の柄で、石斧装着箇所から上と、掘部下端を欠損している。アカガシ亜属の四分割材をもちいる。

2は直柄平鎌未成品の破片。最大幅は約18cmで、いわゆる広楕の部類に属する。3は直柄小型鎌。身のおよそ半分を欠損している。4は一木平鋤の身で、柄の大半を失う。5は組合せ平鋤の身。刃部に補修のための小孔がある。樹種は4のみクスノギ節の柾目材で、他はすべてアカガシ亜属の柾目材。

6は把手臼の破片。クスノギの芯持材をもちいる。西三河では、豊田市川原遺跡から、同じく弥生中期後葉のほぼ完成品が出土している。

7は羽物の櫂で、クスノギの横木取り。8・9は方形羽物容器（槽）。8はクスノギ、9はクリの芯持材からの横木取り。

10は高床建物のマダサロ置材。片開きで、図面上の左側に軸擦り孔が2ヶ所あくことから、扉の位置をつけ直している（転用？）ことがわかる。樹種はモミ属の柾目材。11は梯子。上半部を欠損し、ステップは2段のみ遺存している。クリの二分割材をもちいる。12～16はその他の用途が特定できない建築部材。うち12～14は、残存長が120cmを超える大型の部材で、高床建物にもちいたと推定される。12はコナラ節の二分割材、13はコナラ節の芯持材、14はマキ属の芯持材である。15・16は、残存長50cm程度と小型の部材で、15はマキ属、16は針葉樹のそれぞれ芯持材。

17～19は用途不明の部材。17はいわゆる有頭棒で、スギの板目材。18は穿孔をほどこした角棒で、樹種は針葉樹の二分割材である。19はマキ属の芯持材をもちいた角棒。

20・21は小穿孔をあげた板で、用途は不明。スギの板目材をもちいる。22は長辺の一端に抉りをほどこした板で、スギの板目材。

27～34は細長い薄板で、樹種は28がモミ属の板目材、他はすべてスギの板目材である。高床建物の屋根材か。

25はスギの追柾目をもちいた板で、29cmと幅が広い。高床建物の壁材か。

23はケンボナシ属の二分割材を製材した厚板である。24はクリの二分割材、26はクスノギ節のミカン割り材。農具・掘削具類の原材か。

2. 鎌倉時代（35～50）

すべて01A区SX02からの出土である。

35は漆桶の破片で、内外面に黒漆が遺存している。樹種はモクレン属。

36は曲物の銅板で、板皮で綴じた痕跡が残る。ヒノキの板目材をもちいる。

37は連歯の下駄で、歯がすり減ってかなり低くなっている。身の半分を欠損するため、左右のいづれかは不明。樹種はヒノキの板目材。

38～40は組仕口をもつ建築部材あるいは施設部材で、樹種はヒノキ、41～44の杭材と組合せて使用された可能性がある。41～44もすべてヒノキをもちいる。

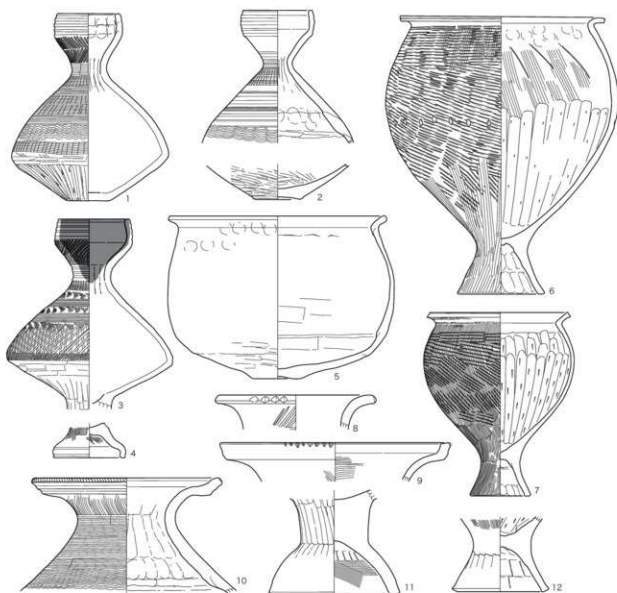
45は穿孔をもつ角棒で、樹種はカキノキ属。46はヤナギ属の丸棒。
 47はカキノキ属の柾目材による板。48・49はヒノキの柾目材をもちいた薄板で、曲物の側板の可能性ある。50はヒノキの板目材による板で、加工痕を明瞭にとどめる。

3.江戸時代 (51・52)

いずれも01A区SX01から出土。

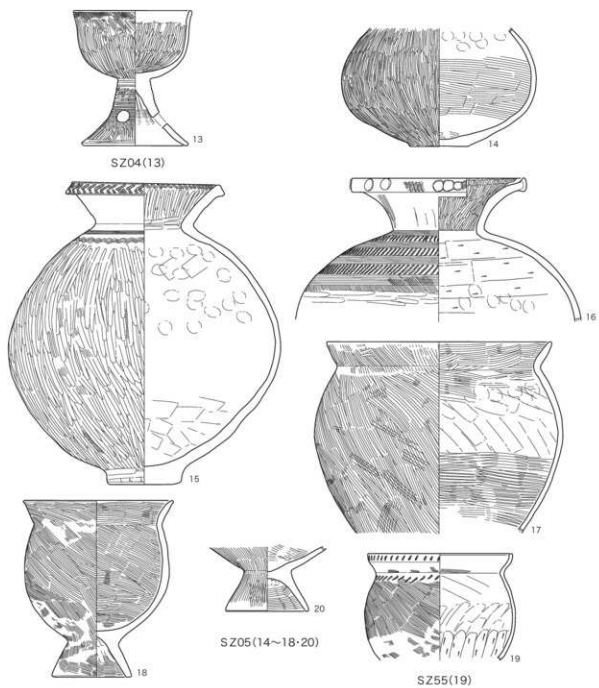
51は木札で、「十口」の墨書をもつ。樹種はヒノキの柾目材。

52もヒノキの柾目材による板である。

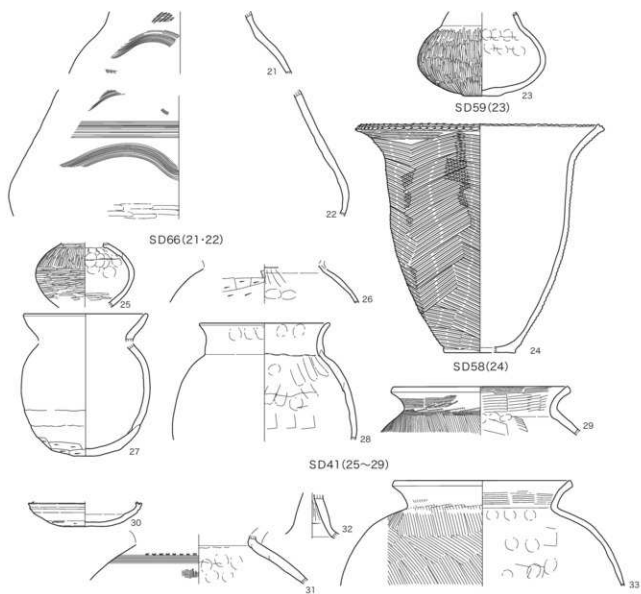


SZ03(1~12)

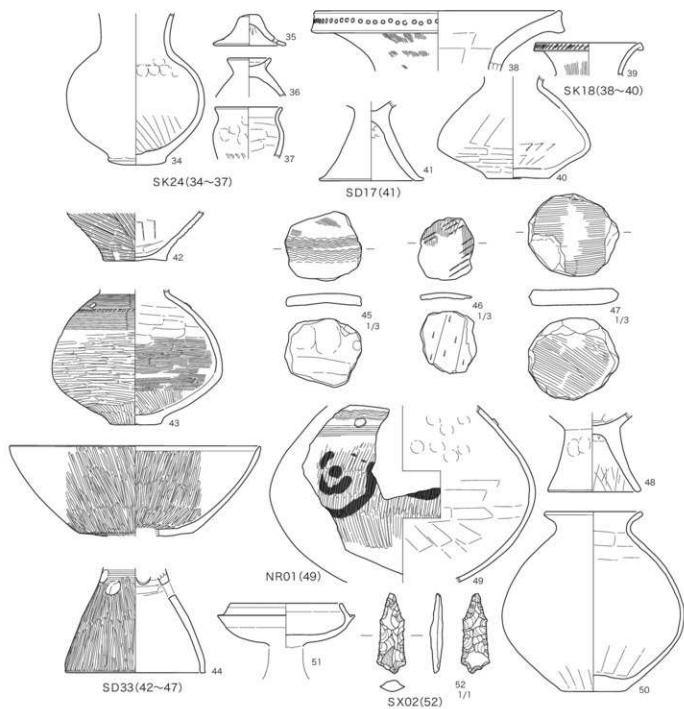
第47図 出土遺物(1)



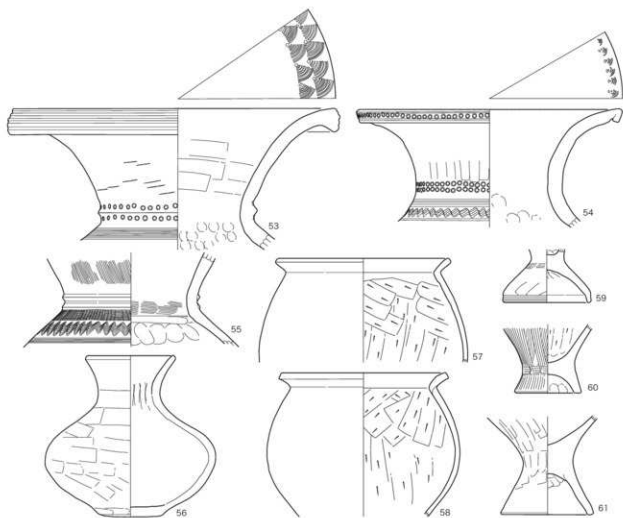
第48图 出土遗物(2)



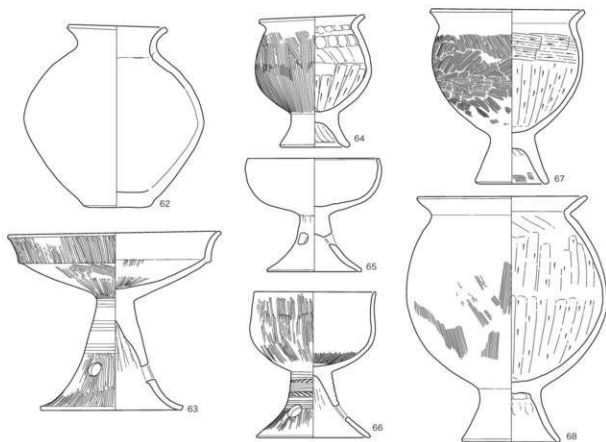
第49図 出土遺物 (3)



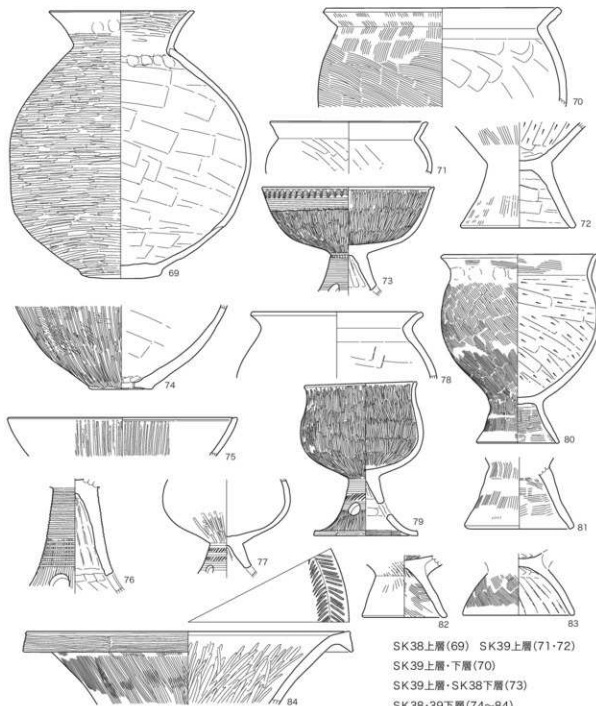
第50図 出土遺物(4)



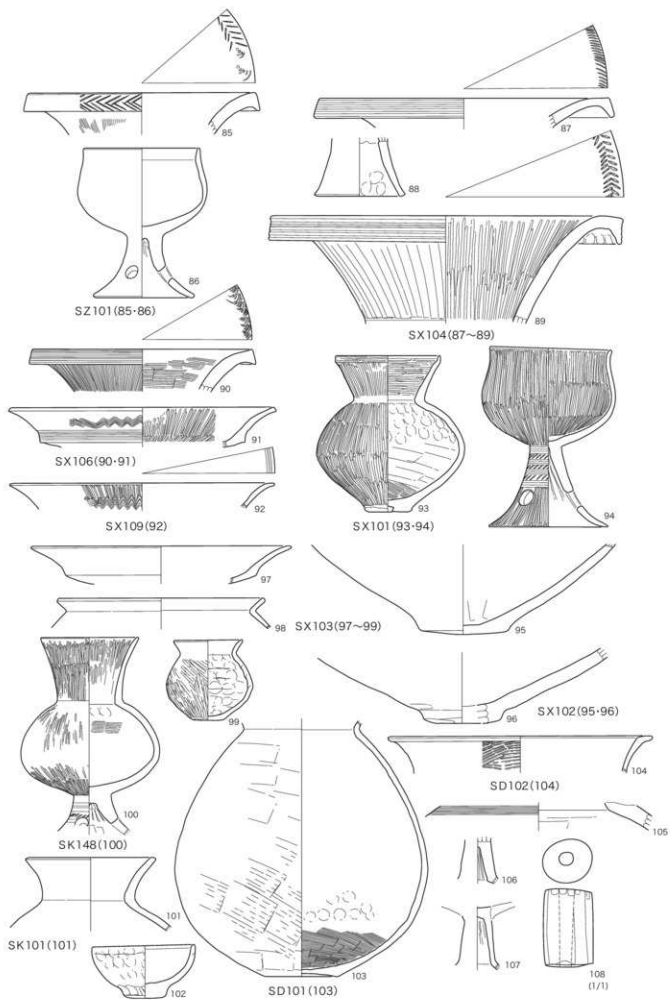
SZ02(53~61)



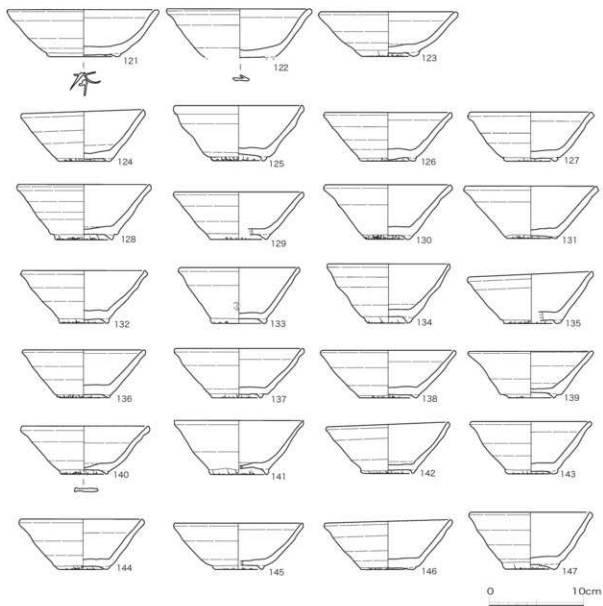
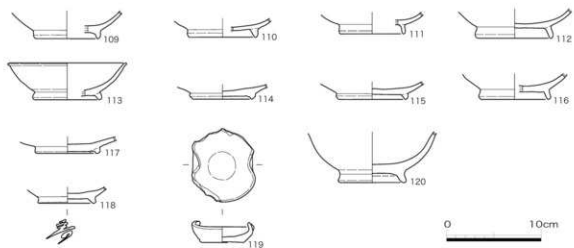
SZ01(62~68)
第51图 出土遗物(5)



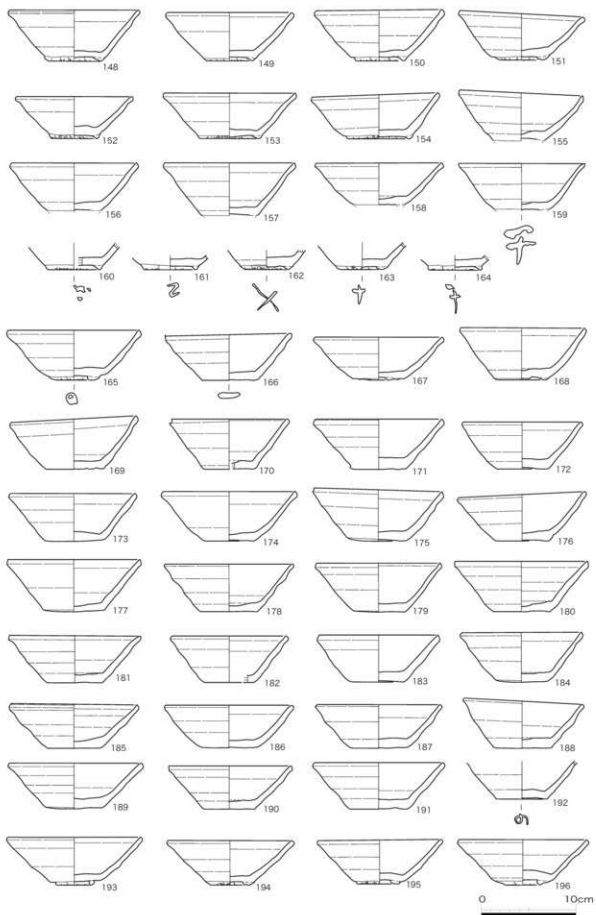
第52図 出土遺物(6)



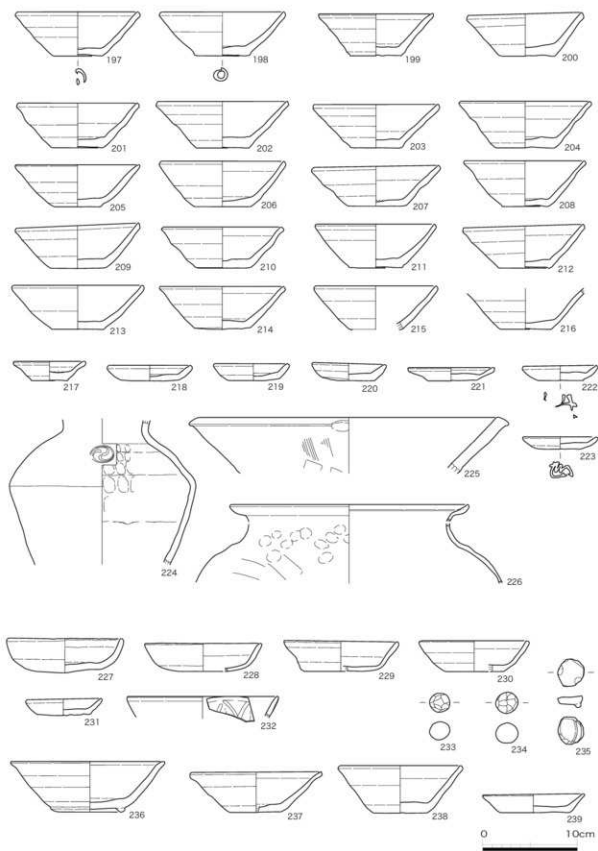
第53圖 出土遺物 (7)



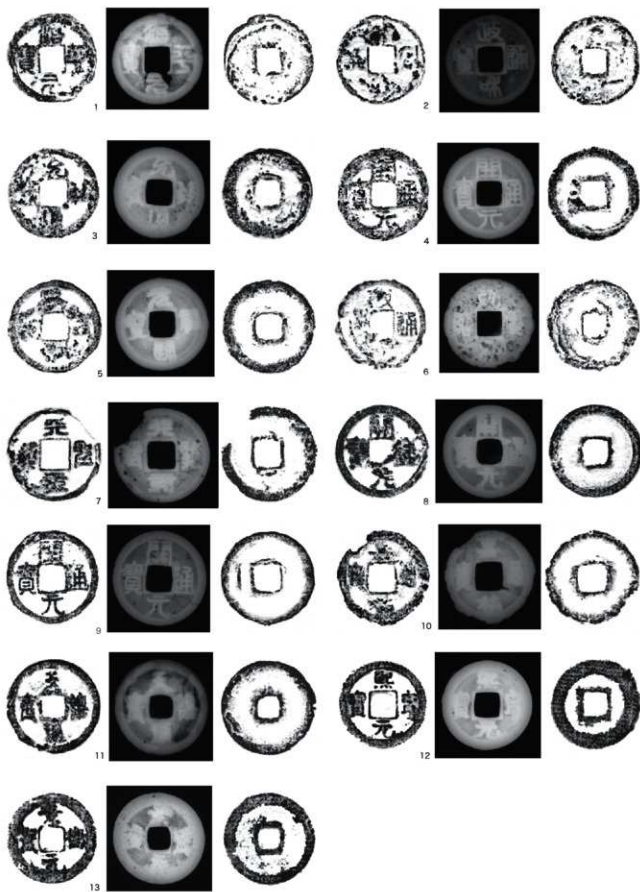
第54図 出土遺物(8)



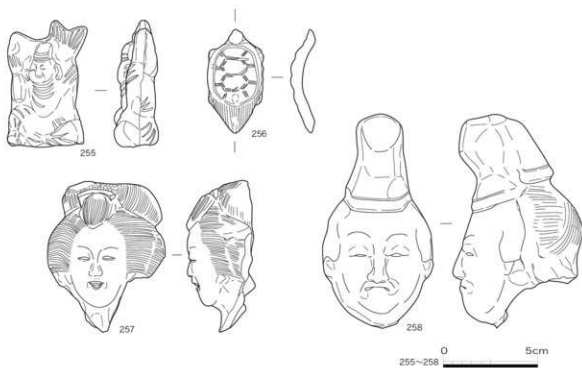
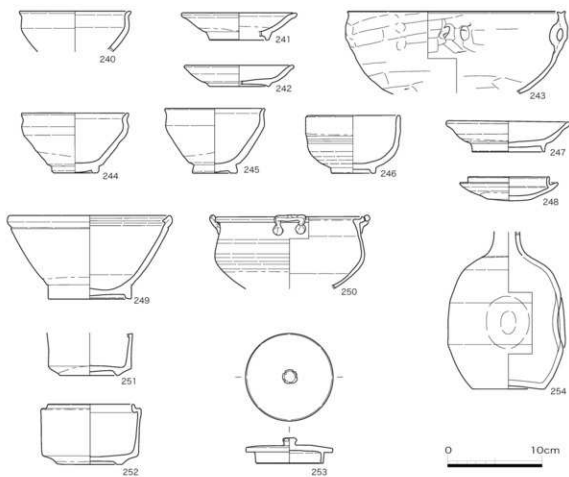
第55図 出土遺物(9)



第56図 出土遺物 (10)

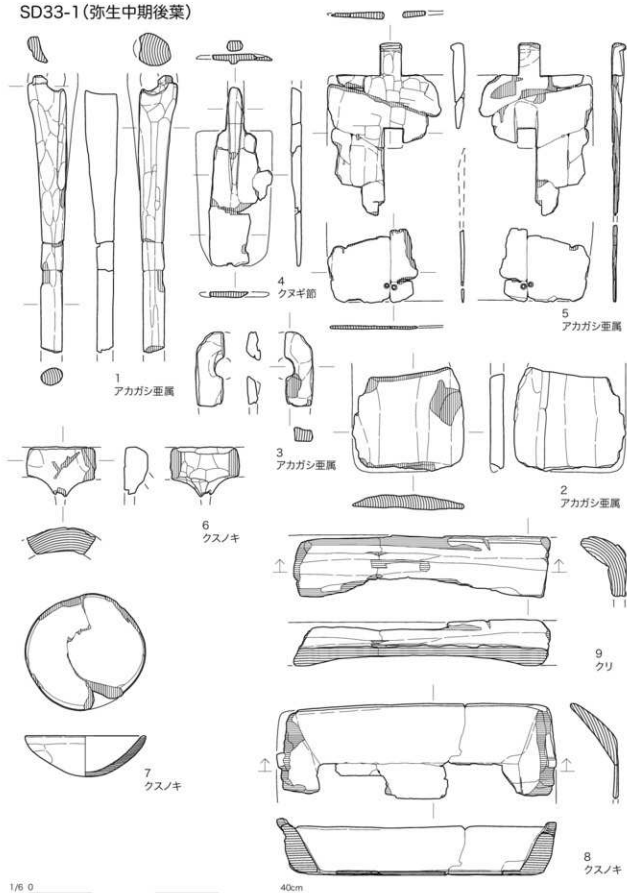


第57回 出土遺物 (11)



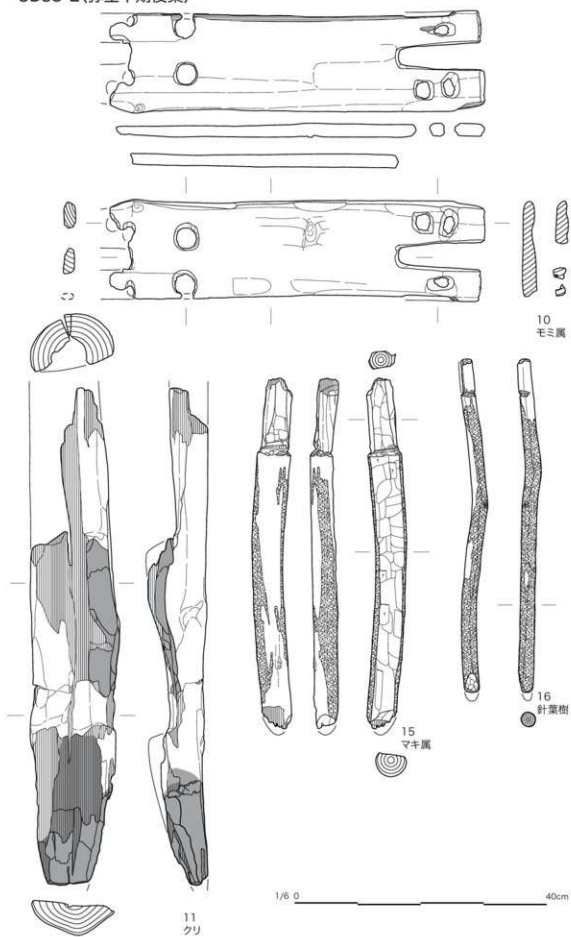
第58回 出土遺物 (12)

SD33-1 (弥生中期後葉)



第59図 出土遺物 (13)

SD33-2(弥生中期後葉)



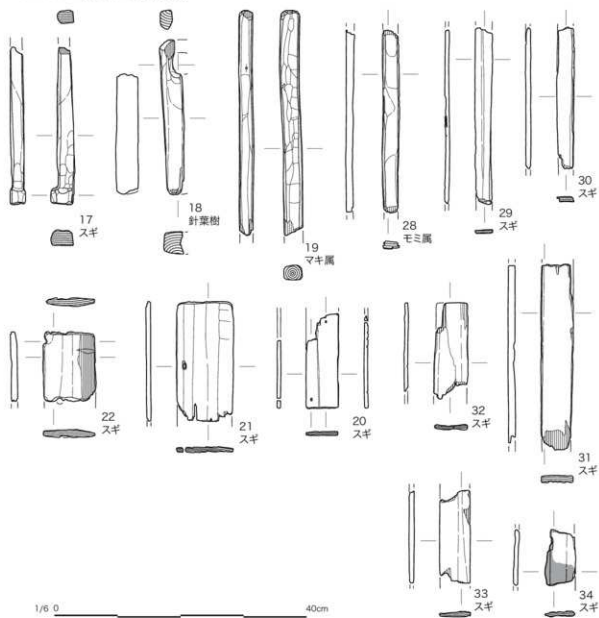
第60図 出土遺物 (14)

SD33-3(弥生中期後葉)



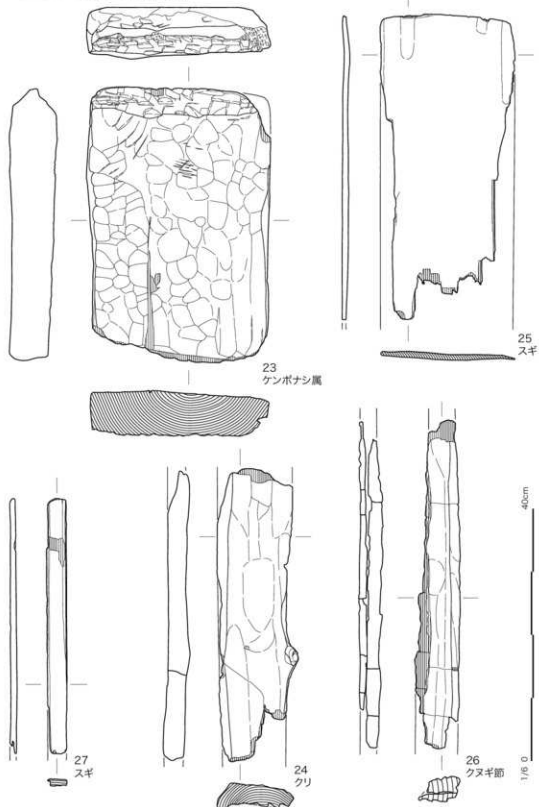
第61図 出土遺物 (15)

SD33-4(弥生中期後葉)



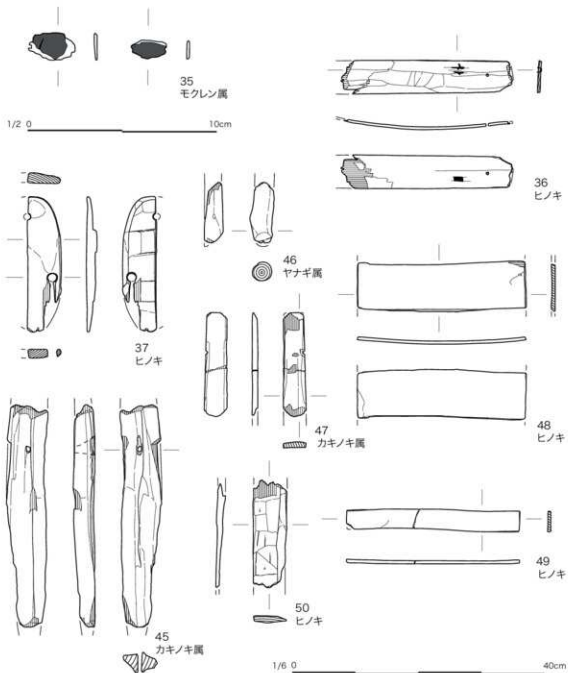
第62図 出土遺物 (16)

SD33-5(弥生中期後葉)



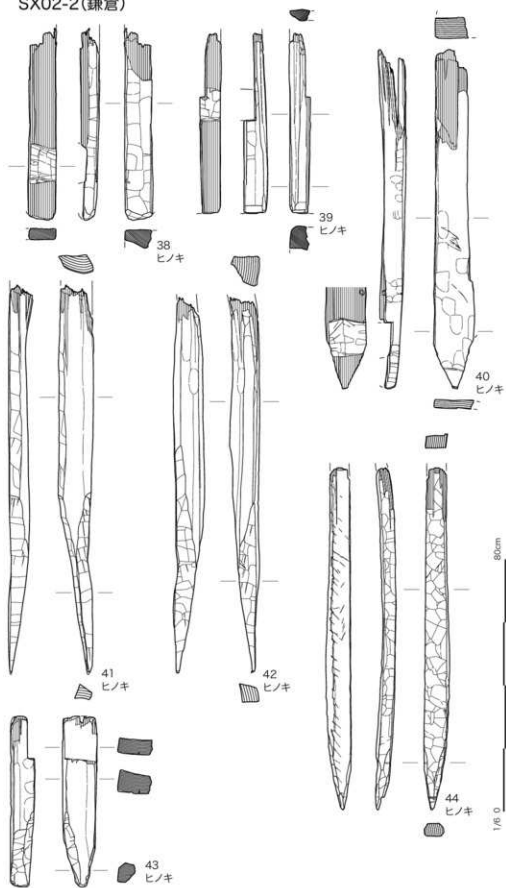
第63図 出土遺物 (17)

SX02-1(鎌倉)



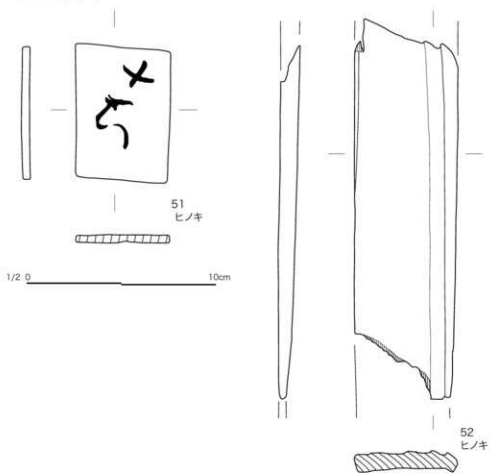
第64図 出土遺物 (18)

SX02-2(鎌倉)



第65図 出土遺物 (19)

SX01 (江戸)



第66図 出土遺物 (20)

第VI章 自然科学的分析

第1節 上橋下遺跡から産出した昆虫化石群集

森 勇一 (愛知県立津島東高等学校)

1.はじめに

昆虫はすべての生物で、最も種数が多い。水中・地表面・植物上をはじめ、多様な生活空間に適應して生活している。食性も、食植性から食肉性・食糞性・食屍性など多岐にわたる。昆虫分析は、このような昆虫の特性を利用し、過去の気候や植生、人々の暮らしぶり、山林開発の様子など、私たちを取りまく自然環境がどのように移り変わってきたか、土に埋もれた昆虫組成をもとに探ろうという試みである。

研究法の実際は、古生物学や地質学で従来用いられてきた方法に幾分改良を加えたものといえる。昆虫化石を見つけるには、地層をラミナ(葉理)に沿って割りながら探す。金属光沢のキラッとした輝きは昆虫、鈍く光るのはたいてい植物の化石である。試料が少ない場合、土ごと水に溶かし浮遊させて選別する。発見された昆虫化石はバラバラになっていて、多いものは百以上の体節片に分離している。これを顕微鏡下で1点ずつの昆虫のどの部位か現生標本と比較しながら同定するのである。昆虫の種の数が多いかゆえに、これがまた想像以上に大変であり、かつ時間のかかる作業となる。昆虫化石を調べようとする研究者が少ないのも無理からぬ話である。

2.試料および分析方法

上橋下遺跡は安城市川島町・古井町に位置し、矢作川右岸の微高地上に展開する低湿地遺跡である。遺跡調査は2001年10月より2002年3月(一次調査)、2003年1月～3月(二次調査)、および2004年1月～3月(三次調査)の3回にわたって実施され、一次調査では弥生時代後期・鎌倉時代・江戸時代の3時期、二次・三次調査では弥生時代後期から古墳時代初頭に加え、古代末-中世、江戸時代の3期の遺物包含層が検出されている。昆虫分析試料は、愛知県埋蔵文化財センターの鬼頭 剛氏によって第二次調査のトレンチ断面より採取されたものである。分析試料の採取層準は、弥生時代後期の02区SK38・39下層の土坑内堆積物である。

昆虫化石の抽出は、ブロック割り法と並行し水洗浮遊選別法により実施した。ブロック割りに用いた試料1の湿潤重量は16.2kg、また水洗浮遊選別を実施した試料2では6.0kgであった。

昆虫化石の同定にあたっては、筆者採集の現生標本と実体顕微鏡下で1点ずつ比較のうえ行った。同定後の標本は愛知県埋蔵文化財センター取蔵庫にて保管している。

3.分析結果

分析試料より抽出された昆虫化石は、ブロック割り法(試料1)214点、水洗浮遊選別法(試料2)213点の計427点であった(第2表)。昆虫化石群集は、陸生の食植性昆虫を主体に、主に湿潤地表面

上に多い地表性歩行虫で構成され、水生昆虫も伴われた。

次に、それぞれの分析試料から得られた昆虫組成について述べる。産出昆虫を分類群ごとにとみると、目レベルまで分類できたもの1目5点、科レベル13科164点、亜科レベル2亜科6点、族レベル1族1点、属レベルは7属53点、種まで同定できたものは23種169点であった。これ以外に、不明甲虫としたものは計29点であった。検出部位別では、ブロック割り法・水洗浮遊選別法ともに、上翅(片) Elytronが最も多く、ほかに腿脛節 Legs・前胸背板 Pronotum・腹部 Abdomenなどが認められた。

試料1からは、計214点の昆虫化石が発見された。産出昆虫のうち、水生昆虫が75点(35.0%)、地表性歩行虫が56点(26.2%)であり、うち食糞ないし食屍性昆虫は16点(7.5%)確認された。なお、陸生の食植性昆虫は75点(35.0%)、その他の昆虫は計8点検出されたのみであった。

試料2からは、計213点の昆虫化石が発見され、内訳は水生昆虫が20点(9.4%)、地表性歩行虫が89点(41.8%)、うち食糞ないし食屍性昆虫は29点(13.6%)であり、陸生の食植性昆虫は計69点(32.4%)、その他の昆虫は計35点であった。

種組成をみると、水生昆虫では、試料1および2を通じ、水生・食植性昆虫であるセマルガムシ *Coelostoma stultum* が計60点と多産したのが目立った。本種は、これまで日本各地の水田層中より頻りに確認され、水田指標昆虫(森, 1999)として知られる。このほか、食肉性のヒメゲンゴロウ *Rhantus pulverosus* (計3点)、キバククロヒメゲンゴロウ *Ilybius apicalis* (計5点)、ミズスマシ *Gyrinus japonicus* (計2点)なども発見された。いずれも水深の浅い止水域を好み、水田周辺に多い水生昆虫である。

食植性昆虫では、畑作物を加害することが多いヒメコガネ *Anomala rufocuprea* が計30点発見され、同様の生態を有するドウガネブイブイ *Anomala cuprea* (22点)、コガネムシ *Mimela splendens* (4点)、マメコガネ *Popillia japonica* (3点)、体節片が著しく小さく同定が困難なため、コガネムシ科 Scarabaeidae としたものが15点、サクラコガネ属 *Anomala* sp. とした昆虫片が20点認められた。このほか、食植性で主に草本科の葉上に多いゾウムシ科 Curculionidae が、浮遊選別を中心に計22点検出され、同じく草本科の葉を加害するアカガネサルハムシ *Acrothitium gaskevitchii* (1点)、ドウガネサルハムシ *Scelodonta lewisii* (1点)をはじめハムシ科 Chrysomelidae が計14点発見された。

地表性昆虫では、エンマコガネ属 *Onthophagus* sp. (計18点)、コブマルエンマコガネ *Onthophagus aripennisi* (4点)、マゴソコガネ *Aphodius rectus* (計5点)、マゴソガムシ *Pachysternum haemorrhoum* (2点) など、人糞や獣糞に集まる食糞性昆虫が多数検出された。動物の死体や獣糞に多いウジなどを捕食するオオヒラタシデムシ *Eusilpha japonica* (計8点)、エンマムシ科 Histeridae (計2点)、ハネカクシ科 Staphylinidae (計18点)なども確認された。

これ以外の地表性昆虫では、湿潤地表を好むツヤヒラタゴミムシ属 *Synuchus* sp. (計7点)、ヤマトトクリゴミムシ *Lachnocypris japonica* (1点)、ミズギワゴミムシ属 *Bembidion* sp. (1点)、ヒラタゴミムシ属 *Platynini* (1点)などが見いだされた。いっぽう、ミカワオサムシ *Carabus arrovianus* (1点) や、オオスハラゴミムシ *Diplocheila zealandica* (計2点)、サビキコリ *Sgrypnus binodulus* (計2点)、ハンミョウ *Cicindela chinensis japonica* (計4点)などは、むしろ乾燥した地表面上や畑作地、人家周辺に多い地表性歩行虫である。発見された体節片が小さく、そのため種名や属名が特定できないまま

オサムシ科 Carabidaeとしてとどめた昆虫化石が、計58点認められた。

4.昆虫化石群集から推定される古環境

上橋下遺跡より得られた昆虫化石群集は、陸生の食植性昆虫を主体に、水生昆虫と食糞ないし雑食性の地表性昆虫を随伴する昆虫組成とみなすことができる。オサムシ科が58点と多かったのは、ブロック割り法に加え水洗浮遊選別法を用いたため、腿脛節や腹部腹板などがバラバラに分離し、結果として多数計数されたものと考えられる。

昆虫分析試料を採取した土壌試料は、土器編年からすると、弥生時代後期（約1,800年前頃）のものと考えられる。必ずしも多くないが、コブマルエンマコガネやマグソコガネ・センチコガネ族・オオヒラタシメムシ・エンマムシ科など人家周辺に多い食糞ないし食屑性甲虫や、汚物食と考えるとよい双翅目 Dipteraの圏蛹などが本群集中に認められたことから、この時期、遺跡一帯に人為による環境汚染が進行していたと考えられる。

植生についての情報では、主に食植性昆虫の組成より遠近2タイプの植生空間について考察することができる。昆虫化石群集を産出した遺構とじかに接するところに存在した可能性が高い植生は、セマルガムシ・ガムシ科など食植性の水生昆虫や、ヤマトトクリゴミムシ・ツヤヒラタゴミムシ属・ミズギワゴミムシ属など水辺に生息する地表性甲虫類をもとに考察することができる。これらの昆虫の産出から、上橋下遺跡の土坑（SK38）周辺には、ところどころスゲ類の生育する湿地が存在し、ガムシ類の好む水草や藻などの水生植物が繁茂していたことだろう。稲作害虫は検出されなかったものの、湿地のうち水利の良い場所を選んで、水稲耕作が実施されていたことは十分考えられる。このことは、ヤマトトクリゴミムシ・セマルガムシ・マメゲンゴロウ・キベリクロヒメゲンゴロウなどといった水田指標昆虫の発見によっても支持される。

ヒメコガネやマメコガネ・ドウガネブイブイ・コガネムシをはじめ食葉性昆虫の出現は、遺跡内や昆虫分析試料を採取した遺構近傍の植生というより、上橋下遺跡北東方の丘陵地や台地上の植生に由来するものと考えられる。

ヒメコガネ・マメコガネがマメ類や各種畑作物を加害し、ドウガネブイブイやコガネムシもまたブドウ・クリ・カキなどの果樹や畑作物を食害することから、上橋下遺跡の後背地には畑作物や果樹などが植栽されていた可能性が考えられる。ヒメコガネを中心とした食葉性昆虫は、中世の山林開発や畑作地の増大に伴って日本各地で大増殖したことが知られている（森，1999）。弥生～古墳時代にかけての頃、本遺跡一帯ではこれらがすでに他の食植性昆虫を圧倒し、優占種になりつつあった可能性が指摘される。ハムシ科のアカガネサルハムシはブドウ・ノブドウ・エビヅルなどを食害し、ドウガネサルハムシもまたブドウやエビヅル・クサギなどに集まる性質がある。ハナムグリ亜科 Cetoniinae、カミキリムシ科 Cerambycidaeなどは主にクヌギ・コナラなどを中心とした落葉広葉樹林に多い昆虫である。ゾウムシ科やオトシブミ科 Attelabidae、コマツキムシ科 Elateridae、キマワリ属 *Plesiophthalmus* sp.など植物に由来する昆虫の産出も、遺跡のバックグラウンドの植生を考えると重要である。

水域環境に関する情報では、キベリクロヒメゲンゴロウやセマルガムシ・マメゲンゴロウなどの水

生昆虫や、ヤマトトクリゴミシ・ツヤヒラタゴミシ属・ヒラタゴミシ族などの地表性昆虫は、いずれも水辺を好みとくに水深の浅い止水域の存在を強く示唆している。前述したように、水生昆虫や地表性歩行虫の中に多数水田指標昆虫が含まれることから、弥生時代後期のころ、遺跡の周りに水田が存在した可能性が指摘される。

謝 辞

昆虫化石の水洗選別にあたっては、上田恭子氏（元愛知県埋蔵文化財センター研究補助員）にお世話になった。記してお礼申し上げる。

文 献

- 森 勇一（1994）昆虫化石による先史-歴史時代における古環境の変遷の復元-第四紀研究，33，331-349。
森 勇一（1997）虫が語る日本史-昆虫考古学の現場から。インセクタリウム，34（1）・34（2），18-23，10-17。
森 勇一（1999）昆虫化石よりみた先史-歴史時代の古環境変遷史。歴博国際シンポジウム「過去1万年間の陸域環境の変遷と自然災害史」。国立歴史民俗博物館研究報告第81集、国立歴史民俗博物館、311-342。

第2表 上橋下遺跡から産出した昆虫化石

生態	和名	学名	試料1	試料2	小計	
			XG16a SK38 030603 ブロック割	XG16a SK38 030604 浮遊選別		
水生	ゲンゴロウ科	Dytiscidae	P1 E2	P1 E1	5	
	ヒメゲンゴロウ亜科	Colymbetinae	T4		4	
	キバクロヒメゲンゴロウ	<i>Rhantus pulverosus</i> (Stephens)	E1	E2	3	
	マメゲンゴロウ	<i>Ilybius apicalis</i> Sharp	P1 E4		5	
	ミズスマシ	<i>Gaurodytes japonicus</i> Sharp		P1 E1	2	
		<i>Gyrinus japonicus</i> Sharp	E2		2	
	食性	ガムシ科	Hydrophilidae	H1 E4 L3 A1	P1 E2 L1	13
		ガムシ	<i>Hydrophilus acuminatus</i> Motschulsky	E1		1
		セマルガムシ	<i>Coelostoma stultum</i> (Walker)	P4 E46	P2 E8	60
	地表	エンマコガネ属	<i>Onthophagus</i> sp.	P3 E1 A1 L2	P1 E2 A3 L5	18
コブマルエンマコガネ		<i>Onthophagus atripennis</i> Waterhouse	E1 T1	H1 E1	4	
マグソコガネ属		<i>Aphodius</i> sp.		H1 E1	2	
マグソコガネ		<i>Aphodius rectus</i> (Motschulsky)		H3 P2 E3	8	
マгноソガムシ		<i>Pachysternum haemorrhoum</i> Motschulsky		P1 E1	2	
センソコガネ属		<i>Geotrupes</i> sp.	L1		1	
食痕	エンマムシ科	Histeridae	P2		2	
	オオヒラタシテムシ	<i>Eusilpha japonica</i> (Motschulsky)	P2 E1 A1	S1 P2 E1	8	
	オサムシ科	Carabidae	H1 M1 P3 E3 T3 A7	H3 S1 E5 T6 A17 L8	58	
地食・雑食性	ミカワオサムシ	<i>Carabus aronianus</i> Breuning	H1		1	
	ヤマトックリゴミムシ	<i>Lachnocrepis japonica</i> Bates	E1		1	
	ツヤヒラタゴミムシ属	<i>Synuchus</i> sp.	E4	E3	7	
	ミズギワゴミムシ属	<i>Bembidion</i> sp.		E1	1	
	ヒラタゴミムシ族	Platynini		P1	1	
	オオスナハラゴミムシ	<i>Diplochela zeelandica</i> (Redtenbacher)	E2		2	
	キマワリ属	<i>Plesiphthalmus</i> sp.	P1 E1 L2		4	
	ゴミムシダマシ科	Tenebrionidae	L1		1	
	サビキコリ	<i>Agrypnus binodulus</i> Motschulsky		P2	2	
	ハンミョウ	<i>Cicindela chinensis japonica</i> Thunberg	T1	E1 A1 L1	4	
食痕	ハネカクシ科	Staphylinidae	P4 T1 A2 L1	P1 E5 A4	18	
	コガネムシ科	Scarabaeidae	P1 T1	P1 E12	15	
陸食	サクラコガネ属	<i>Anomala</i> sp.	H1 S1 P1 E2 A1 L8	P1 E3 L2	20	
	ドウガネブイブイ	<i>Anomala cuprea</i> Hope	P5 E3 T1 A2 L3	P2 E6	22	
	ヒメコガネ	<i>Anomala rufocuprea</i> Motschulsky	H1 P6 E17 T2 A1 L1	E2	30	
	マメコガネ	<i>Popilla japonica</i> Newmann	P2 A1		3	
	コガネムシ	<i>Mimela splendens</i> Gyllenhal	E3 T1		4	
	ハナムグリ亜科	Cetoniinae	H1	H1	2	
	カミキリムシ科	Cerambycidae	L2		2	
	コメツクムシ科	Elateridae	T1	P1 E6	8	
	生性	ハムシ科	Chrysomelidae	E3	E8 T1	12
		アカガネサルハムシ	<i>Acrotholium gashchivtshii</i> (MOTSCHUL.)	E1		1
		ドウガネサルハムシ	<i>Scelodonta lewisii</i> Baly		E1	1
		ゾウムシ科	Curculionidae	E1	H3 P2 E11 T2 A3	22
		オトシブミ科	Atelabidae	P 1		1
		ノコギリヒラタムシ	<i>Oryzaephilus surinamensis</i> (Linnaeus)		E1	1
			C2	C3	5	
その他	双翅目	Diptera			5	
	アリ科	Formicidae		H4 A2 T1	7	
	ケラ	<i>Gryllotalpa africana</i> de Beauv.		L2	2	
	不明甲虫	Coleoptera	P1 T1 A1 L2 O1	H1 P1 E1 L2 O18	29	
合計			214	213	392	

(輸出部位凡例)

H(Head):頭部 An(Antenna):触角 M(Mandible):大顎 S(Scutellum):小橋板 P(Pronotum):前胸背板 C(Chrysalis):蛹膜 E(Elytron):翅膜 W(Wing):上翅 T(Thorax):胸部 A(Abdomen):腹部 L(Leg):腿節部 O(Other):その他

第2節 上橋下遺跡のプラント・オパール

鈴木 茂 (株式会社パレオ・ラボ)

プラント・オパールとは、根より吸収された珪酸分が葉や茎の細胞内に沈積・形成されたもの(機動細胞珪酸体や単細胞珪酸体などの植物珪酸体)が、植物が枯れるなどして土壌中に混入して土粒子となったものを言い、機動細胞珪酸体については藤原(1976)や藤原・佐々木(1978)など、イネを中心としたイネ科植物の形態分類の研究が進められている。また、土壌中より検出されるイネのプラント・オパール個数から稲作の有無についての検討も行われている(藤原, 1984)。このような研究成果から、近年プラント・オパール分析を用いて稲作の検討が各地・各遺跡で行われている。上橋下遺跡においても畦状遺構などが検出されており、水田稲作を検討する目的でプラント・オパール分析を行った。

1. 試料と分析方法

分析用試料は02区東西ベルト(第36図・第67図)のP-1地点(8試料)および南壁セクション(第36図・第67図)のP-2地点(10試料)より採取された18試料である。各試料について簡単に記すと、P-1地点最下部の試料1(71,72層)および試料1(30層)は灰色のシルト質粘土で、試料1層準付近で年代測定が行われ、 $2,080 \pm 30$ yrs BPが得られている。試料2~5(28, 3, 14, 18層)は灰褐色シルト、試料6(17層)は灰色シルト、最上部試料7(32層)は灰色の砂質シルトである。P-2地点最下部試料1~7(11, 23, 22, 34, 33, 28, 26層)は灰褐色~黒褐色の粘土で、試料3(22層)には炭化物の濃集がみられる。この22層において年代測定が行われ、 $1,955 \pm 30$ yrs BPが得られている。試料8(13層)は灰褐色のシルト質粘土、試料9(4層)は灰褐色の砂質シルト、試料10(1層)は灰色の砂質シルトで、最上部は灰色のシルトである。プラント・オパール分析はこれら18試料について以下のような手順にしたがって行った。

秤量した試料を乾燥後再び秤量する(絶対乾燥重量測定)。別に試料約1g(秤量)をトルペーカ-にとり、約0.02gのガラスビーズ(直径約40 μ m)を加える。これに30%の過酸化水素水を約20~30cc加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波ホモジナイザーによる試料の分散後、沈降法により10 μ m以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作成し、検鏡した。同定および計数はガラスビーズが300個に達するまで行った。

2. 分析結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料1g当りの各プラント・オパール個数を求めた(第5表)。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は試料1g当りの検出個数である。

P-1地点: 検鏡の結果、下位試料2を除く7試料よりイネのプラント・オパールが検出されたが、下位試料では2,000個前後である。上位の試料4~6では10,000個以上を示し、最上部試料7では約9,000個と減少している。最も多く検出されているのはネザサ節型であるが大きな傾向として上部に

向かい減少している。他の分類群はいずれも10,000個には達しておらず、その中でクマザサ属型は上部試料で多い傾向がみられる。ウシクサ族も上部に向かい増加して試料5でピークをつくっており、キビ族は試料6でピークをつくっている。またヨシ属も上部に向かい増加しているが、最上部試料7では得られていない。

P-2地点：下部の試料1, 3を除く8試料よりイネのプラント・オパールが検出されている。個数的には

第5表 試料1g当たりのプラント・オパール個数

試料番号	イネ (個/g)	イネ類群 (個/g)	ネザサ節型 (個/g)	クマザサ属型 (個/g)	他のクマザサ (個/g)	ヨシ属 (個/g)	シバ属 (個/g)	キビ属 (個/g)	ウシクサ属 (個/g)	不明 (個/g)
1-1	1,100	0	82,800	2,300	1,100	1,100	0	0	1,100	4,600
-1'	2,300	0	51,400	2,300	1,100	0	0	1,100	1,100	6,900
-2	0	0	47,100	4,700	2,400	3,500	0	0	3,500	13,000
-3	3,400	0	76,800	3,400	1,100	3,400	0	1,100	3,400	5,700
-4	12,000	0	43,500	4,400	1,100	4,400	0	2,200	4,400	9,800
-5	24,500	0	46,000	6,100	4,100	5,100	0	6,100	8,200	9,200
-6	22,700	0	24,700	0	2,100	5,200	1,000	7,200	5,200	9,300
-7	8,800	0	17,600	4,900	1,000	0	0	2,000	3,900	2,900
2-1	0	0	37,800	9,200	2,300	1,100	0	1,100	5,700	12,600
-2	1,100	0	40,500	5,600	0	5,600	0	1,100	4,500	6,600
-3	0	0	25,100	2,400	3,600	2,400	0	0	2,400	3,600
-4	12,500	0	29,400	3,400	4,500	6,800	0	4,500	4,500	9,100
-5	24,900	0	46,500	1,100	3,400	3,400	0	3,400	2,300	4,500
-6	21,000	0	39,600	1,200	0	1,200	0	3,500	1,200	9,300
-7	19,500	0	21,700	4,600	0	1,100	0	0	1,100	5,700
-8	12,600	0	16,100	3,400	1,100	0	0	0	2,300	4,600
-9	14,000	0	20,500	2,200	0	1,100	0	1,100	4,300	5,400
-10	21,500	1,100	18,100	2,300	0	0	0	1,100	2,300	5,700

試料4より上部で10,000個以上と高い数値を示しているが、試料2では1,000個ほどである。最も多く検出されているのはネザサ節型で、やはり上部では少なくなる傾向がみられる。クマザサ属型は上部に向かい減少するが上部ではやや回復しており、ウシクサ族も同様の傾向を示している。ヨシ属は試料2～5で約5,000個前後と他の試料に比べ多く、キビ族は4～6で他の試料より高い数値を示している。

3. 稲作について

上記したように、下部試料を除き多くのイネのプラント・オパールが検出された。検出個数の目安として、イネのプラント・オパールが試料1g当たり5,000個以上検出された地点から推定された水田址の分布範囲と、実際の発掘調査とよく対応する結果が得られている(藤原, 1984)。こうしたことから、稲作の検証としてこの5,000個を目安に、プラント・オパールの産出状態や遺構の状況をふまえて判断されている。上橋下遺跡において、P-1地点では試料4より上位で、またP-2地点でも試料4より上位試料で上記5,000個を越える数のイネのプラント・オパールが検出されている。これらは畦状の高まりの層準と対応していると考えられ、これらのことから試料4より上位層については稲作を支持する結果が得られたと判断される。時代は中世～古代(?)と考えられている頃である。また弥生時代後期のP-1地点下部試料1, 1'においても2,000個前後のイネが検出されている。個数的には少なく、上記から考えると稲作が行われていた可能性は低いと判断される。とはいうもの少ないながらイネが検出されていることから、少なくともこの時期にイネが存在していたと考えられ、

遺跡周辺部の一部で稲作が行われていた可能性もあると思われ、さらに検討が必要であろう。このように上橋下遺跡においては中世～古代(?)頃より近世にかけて水田稲作が行われており、弥生時代後期についてもその可能性があり、これについてはさらに検討が必要であろう。

4. 遺跡周辺のイネ科植物

多く検出されているネザサ節型のササ類(ケネザサ、ゴキダケなど)は開けた目の当たるところでの生育が考えられる。また、上位層で多い傾向がみられるウシクサ族(ススキ、チガヤなど)も同様のところでの生育が考えられる。現在の愛知県では丘陵のやや平坦な台状地においてススキ-ケネザサ群集がみられ(愛知県, 1995)、同様なイネ科植物が遺跡周辺丘陵部空き地や林縁部などに成立していたことが考えられる。一方、クマザサ属型のササ類(スズタケ、ミヤコザサなど)については、遺跡周辺に成立していたであろう森林の下の草的存在で生育していたと推測される。

ヨシ属(ヨシ、ツルヨシなど)は中世～古代(?)試料で多い傾向がみられ、弥生時代以降遺跡周辺に生育地を広げたヨシ属は稲作地やその周辺の水路などに多く生育していたのであろう。しかしながら近世に入り急減しており、稲作地の整備などの集約化にともないその生育地を狭められたのであろう。またキビ族についてはその形態からアワ、ヒエ、キビといった栽培種によるものか、エノコログサ、スズメノヒエ、タイヌビエなどの雑草類によるものかについては現時点においては分類できず不明である。しかしながらイネの増加にともなってキビ族も増加していることから栽培種というよりも稲作にともなう雑草類と考えられよう。しかしながらこのキビ族もヨシ属同様に近世に入り減少した。

引用文献

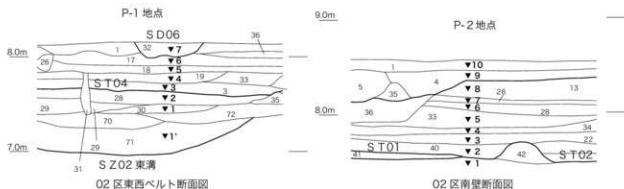
愛知県(1995) 愛知県の植物相, 南川 幸編, 328 p.

藤原宏志(1976) プラント・オパール分析法の基礎的研究(1) - 数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法 -,

考古学と自然科学, 9, p.15-20,

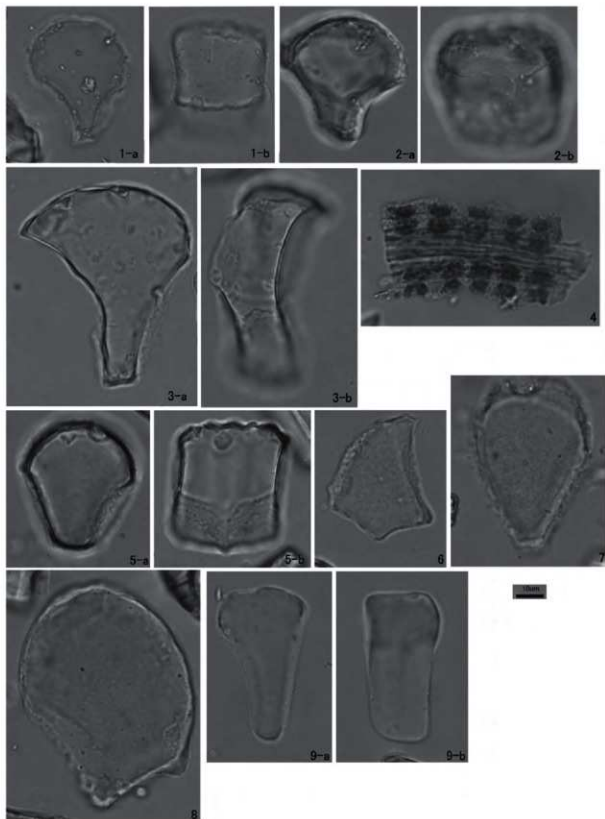
藤原宏志(1984) プラント・オパール分析法とその応用-先史時代の水田址探査-, 考古学ジャーナル, 227, p.2-7,

藤原宏志・佐々木彰(1978) プラント・オパール分析法の基礎的研究(2) - イネ(Oryza)属植物における機軸細胞珪酸体の形状 -, 考古学と自然科学, 11, p.9-20,



第 67 図 分析試料採取地点 1/40 (第 36 図参照)

▼ 採取地点



1～3：イネ (a：断面、b：側面) 1：P-1-5、2：P-2-10、3：P-2-6
 4：イネ型単細胞具醜体列 P-1-5 7：他のタケ亜科 (断面) P-1-6
 5：ネギザサ属型 (a：断面、b：側面) P-2-4 8：ヨシ属 (断面) P-2-4
 6：クマザサ属型 (断面) P-2-8 9：ウシクサ族 (a：断面、b：側面) P-2-10

第68図 上機下遺跡のプラント・オーバー

第3節 上橋下遺跡出土木製品の樹種同定

植田弥生 (株式会社パレオ・ラボ)

1. はじめに

当遺跡は、矢作川右岸の安城市川島町・古井町に所在し、矢作川右岸に流れる鹿乗川右岸の沖積低地の微高地(標高8.8m)に立地している。ここでは、弥生中期後葉(36点)・13世紀後半～14世紀(75点)・13世紀後半～14世紀?(2点)・江戸(3点)の木製品合計116点の樹種同定結果を報告する。弥生中期後葉の木製品は、鹿乗川の旧河道SD33から出土した板・建築材・丸太・鋤身・臼?・槽?など36点である。中世(13世紀後半～14世紀)の木製品は流路のSX02から出土した、板・建築材・木簡片?などと、瓶を構築していた杭の合計75点である。13世紀後半～14世紀?は、谷検出掘り下げから出土した板状2点である。江戸時代の木製品は、木札(墨書)・板・棒状(炭化)の3点である。これらの樹種同定を明らかにし、各時期の樹種利用の傾向と特徴について若干の考察を行った。

2. 試料と方法

木製品から材の3方向(横断面・接線断面・放射断面)を見定めて、剃刀を用い各方向の薄い切片を剥ぎ取り、スライドガラスに並べ、ガムクロールで封入し、永久プレパラート(材組織標本)を作成した。この材組織標本を、光学顕微鏡で40～400倍に拡大し観察した。

材組織標本は、愛知県埋蔵文化財センターに保管されている。

3. 結果

同定の結果、各時期の検出樹種数を第6表に集計した。

時期ごとの同定結果を記し、その後に検出された分類群の同定根拠とした材組織の特徴を記載し、提示した。

弥生時代中期後葉：SD33

36点からは、スギ(12点)・マキ属(3点)・モミ属(2点)の針葉樹3分類群、アカガシ亜属(4点)・クスノキ(3点)の常緑広葉樹2分類群、クリ(4点)・コナラ節(3点)・クヌギ節(2点)・ケンボナシ属(1点)の落葉広葉樹4分類群が検出された。針葉樹・常緑広葉樹・落葉広葉樹の複数種類が検出され、樹種利用は多様である。しかし、板はスギ、建築材はマキ属、丸太はコナラ節、柄はアカガシ亜属、鋤身はアカガシ亜属とクヌギ節、槽はクスノキとクリ、臼?はクスノキで、器種による選択性が見られた。

中世(13世紀後半～14世紀):SX02

75点からは、ヒノキ(25点)・サワラ(1点)・アスナロ(1点)・アカマツ(7点)・マツ属複雑管束亜属(9点)・コヤママキ(2点)の針葉樹6分類群、シノキ属(2点)の常緑広葉樹1分類群、モクレン属(1点)・ヤナギ属(8点)・モモorウメ(6点)・サクラ属(1点)・エノキ属(2点)・オウツバキ属(1点)・ニワトコ(1点)の落葉広葉樹8分類群、常緑性が落葉性かは特定できないカキノキ属(3点)・広葉樹A(1点)・広葉樹B(1点)の3分類群、そしてタケ亜科(2点)が検

出された。

弥生時代と同様にこの時期も、針葉樹・常緑広葉樹・落葉広葉樹のそれぞれ複数種類が検出されたが、これは輻杭材の利用樹種の多さを反映している結果と言える。輻杭材は、針葉樹はヒノキ・マツ属複雑維管束亜属（アカマツを含む）が多く、常緑広葉樹はシノキ属、落葉広葉樹はヤナギ属・モモロウメが多かった。これは、弥生時代中期後葉に優占出土した樹種とは異なっていた。輻杭材の多くは、直径3.0～10.0cmの芯持ち丸木材で、樹皮が残っているか、本来は付着していたがその後剥がれた状態に近いものも多かった。年輪数は約6～20年輪のものが多い。ほとんどがこのような形状であった。ヒノキ（8点）は分割材が多く、コウヤマキ（2点）・サワラ（1点）・マツ属複雑維管束亜属（1点）などにも分割材が見られ、年輪数は100年以上と非常に多い材であった。輻に関連する杭で、取り上げ番号が付されている杭4点（取り上げ番号51・52・18・66）もヒノキであった。建築材3点・下駄1点・板2点・板状2点・木札（黒書）1点・曲物側板1点・棒状1点もヒノキであった。ヒノキ以外には、板1点と角材1点がカキノキ、モクレン属が木筒片?1点がモクレン属、棒状1点がヤナギ属であった。

なお、谷検出掘り下げから出土した板状2点も、ヒノキとヒノキ科であった。

江戸：SX01

木札（黒書）はヒノキ、板はヒノキ、棒状（炭化）はタケ亜科であった。

4. 考察

弥生時代の木製品36点からはスギ・マキ属・モミ属・アカガシ亜属・クスノキ・クリ・コナラ節など合計10分類群が、中世の木製品75点からはヒノキ・アカマツ・マツ属複雑維管束亜属・シノキ属・ヤナギ属・モモロウメなど合計19分類群が検出された。弥生時代中期中葉と中世（13世紀後半～14世紀）の木製品からは、それぞれ針葉樹・常緑広葉樹・落葉広葉樹の各分類群が検出され、多様な樹種が利用されていたことが判った。

しかし、針葉樹と広葉樹の検出樹種の種類は、弥生時代と中世では明瞭な違いが見られた。弥生時代はスギが最も多く、スギは板や板状の木製品に多く利用されていた。また建築材はマキ属、丸太はコナラ節、柄はアカガシ亜属、鋤身はアカガシ亜属とクスノギ節、槽はクスノキとクリ、臼はクスノキなど、器種による選択性も明瞭であった。一方、中世になると、スギは検出されずにヒノキが優占していた。ヒノキは板や板状の木製品と建築材・杭・下駄・曲物側板など複数の器種に選択使用されていた。

当遺跡の弥生時代中期後葉ではスギが多く検出されたが、矢作川流域の弥生時代の本川遺跡（愛知県埋蔵文化財センター、2003）・川原遺跡（愛知県埋蔵文化財センター、2001）・釈迦山遺跡（安城市教育委員会、2001）などではスギは意外と少なく、ヒノキ・ヒノキ科・モミ属が多いようである（愛知県埋蔵文化財センター、2003）。コナラ節・クスノギ節が多く利用されていた点は類似している。当遺跡でスギが多い要因は不明であるが、今後周辺遺跡の資料増加を待つ必要がある。

中世の杭には、樹皮が残る芯持ち丸木または樹皮が剥がれたばかりの状態に近いものが多いことから、周辺の森林から伐採して利用していたと思われる。直径は3～10cmで、年輪数は6～10年輪前後

の丸木であり、枝材や森林管理のため間引いた幹材であった可能性が想像される。人為的干渉の高い二次林に生育するアカマツやマツ属複雑管束亜属も多く利用されていた。また栽培植物のモモまたはウメの杭も多いことから、集落で食料として栽培されており、材は耐久性があるので杭に利用されたのであろう。栽培されるカキノキ属も検出された。ヤナギ属の材は腐朽しやすいが、ヤナギ属の杭も多く利用されていた。ヤナギ属は、河畔林に生育するので堰に近い所から材を調達利用したと考えられる。少数ではあるが分割材の杭もあり、樹種はヒノキ・サワラ・コウヤマキ・マツ属複雑管束亜属のすべて針葉樹材で、多くは年輪数が100年を越えていた。これらは転用材と思われる。

5. まとめ

当遺跡では、弥生時代はスギが、中世ではヒノキが多く利用されていた。また弥生時代は器種により利用樹種に選択性が見られたが、中世ではいろいろな器種にヒノキが利用されていた。

弥生時代にスギが多く利用される傾向は、周辺遺跡などの報告にも見られた。またマキ属の利用が目立つのも、この地域の特徴と思われる。

中世の杭の多くは、芯持ち丸木で樹皮付きまたは樹皮が剥がれたばかりの状態に近いものが多かった。直径は3~10cmで、年輪数は6~10年輪前後の丸木が多いことから、周辺の森林から枝や幹部を伐採利用していたと考えられる。アカマツ・マツ属複雑管束亜属が多いことから、マツの二次林が成立していたと考えられる。また栽培植物のモモまたはウメの杭も多いことから、集落で食料として栽培されており、材は耐久性があるので杭に利用されたのであろう。ヤナギ属の杭も多いが、これは流路の河畔林から調達したと考えられる。分割材の杭であったヒノキ・サワラには、年輪数が100年を越えるものが目立ち、これらは転用材と思われた。

引用文献

『本川遺跡』愛知県埋蔵文化財センター、2003

『川原遺跡』愛知県埋蔵文化財センター、2001

『釈迦山遺跡』安城市教育委員会、2001

第6表 上横下遺跡出土木製品樹種の時期別比較

	時期 全生中世 後世	13C後半~14C		13C後半 ~14C?	13C?	合計	
		SDX33	SX02	分割材 芯持ち丸木	SX01		
樹種	木製品	木製品	分割材	木製品	木製品		
ヒノキ		15	8	2	1	2	28
サワラ							
アズキノ			1				1
ヒノキ科					1		1
スギ							
マキ属	12						12
カキノキ属	3						3
モミ属	2						2
マツ属複雑管束亜属			1	8			9
アカマツ				7			7
コウヤマキ			2				2
杉類	2						2
アカガシ亜属	4						4
クスノキ	3						3
シノブ木属			2				2

	時期 全生中世 後世	13C後半~14C		13C後半 ~14C?	13C?	合計	
		SDX33	SX02	分割材 芯持ち丸木	SX01		
樹種	木製品	木製品	分割材	木製品	木製品		
タリ	4			1			5
コナラ類	3						3
クマシロ	2						2
カンナナシ属	1						1
カクレシ属		1					1
ヤナギ属					7		7
モモ科ウメ		1		2			3
サクラ属			1	3			4
エノキ属				2			2
ナツヅクシ属				1			1
ニワトコ				1			1
カキノキ属		2		1			3
カシ木				1			1
分割材							
タケ虫材				2		1	3
合計	36	19	13	43	2	3	116

第4節 堆積環境

鬼頭 剛（愛知県埋蔵文化財センター）

1. はじめに

岡崎平野北部、安城市川島町・古井町の上橋下遺跡調査地点にて地下層序を観察する機会を得た。その層序解析、放射性炭素年代測定および表層地形解析の結果を報告する。

2. 試料および分析方法

上橋下遺跡の地下層序解析のため01A区南端においてオールコア・ボーリング調査を、02区および03区では遺構検出面からバックホーにより掘削し、層序断面を露出させ、層序断面図の作成と試料採取を行なった（第69図）。オールコア・ボーリングの掘削調査は2002年（平成14年）に01A区の南端において応用地質株式会社に依頼し、油圧式ロータリーマシンを用いて標準貫入試験併用のボーリング口径86mmのオールコアで実施した。深掘に伴う層序断面図の作成では層相・粒度・色調・堆積構造・化石の有無などの特徴を詳細に記載した。層序断面からは放射性炭素年代測定用試料を採取した。

放射性炭素年代測定は加速器質量分析（AMS）法により測定を行なった。試料は125 μ mの篩により湿式篩別を行ない、篩を通過したものを酸洗浄し不純物を除去した。石墨（グラファイト）に調整後、加速器質量分析計にて測定した。測定された¹³C濃度について同位体分別効果の補正を行なった後、補正した¹³C濃度を用いて¹⁴C年代を算出した。¹⁴C年代値の算出には半減期としてLibbyの半減期5,568年を使用した。¹⁴C年代の暦年代への較正にはCALIB4.3を使用した。測定は株式会社バレオ・ラボ（Code No.; PLD）に依頼した。

調査地周辺における現在の表層地形解析のため等高線図を作成した。作成は愛知県安城市発行の「都市計画基本図（1/2,500）」にプロットされた標高値を用いて鬼頭が作成した。等高線図上には上橋下遺跡の調査地点のほか、三田（2005a, 2005b）を参考にして調査地周辺の主要な遺跡をプロットした。

3. 分析結果

上橋下遺跡におけるオールコア・ボーリングの層序

地点1（01A区）の調査区南端でオールコア・ボーリングを実施した（第69図）。地表面（標高8.80m）から深度約20mの深掘断面を得た（第70図）。下位層より標高-11.20～-9.10mには粗粒砂を基質とする中礫サイズの角～亜角礫層からなる。石英や長石類の含有量が多いため、肉眼では白色を呈する。本層の最上部（標高-9.20～-9.10m）はシルトを基質とする細礫層が覆う。標高-9.10～-8.70mは植物片を混じえるシルト質砂層である。標高-8.70～-7.70mは層厚20cm程度の細礫層や細粒砂から極粗粒砂までの互層からなる。淘汰は良好であり、標高-8.40～-8.20mの細粒砂層には堆積構造として平行葉理が確認された。標高-7.70～-6.40mは塊状・均質なシルト質粘土層からなり、標高-7.10～-6.86mに細礫層の薄層が挟まれる。標高-6.40～-4.50mはシルトを基質とする細礫層から粗粒砂層ないしは極粗粒砂層からなる。基質のシルトの量比により本層は下部と上部に分けられ、標高-6.40～

-5.96mはシルト成分の優勢な細礫層からなり、標高-5.96~-4.50mは粗粒砂や細礫が卓越する。標高-4.50~-2.76mは砂質シルト層からなる。本層下部（標高-4.50~-3.50m）は細礫が多く含まれ、全体に上方に細粒化する。標高-2.76~-0.60mは層厚20~40cmの淘汰良好な細礫層と中粒砂層から極粗粒砂層との互層からなる。まれに植物片を含む。標高-0.60~0mは黒色を呈する塊状・均質な粘土層からなる。標高0.40~0.20mには褐灰色を呈する塊状で均質なシルト層が挟まれる。標高0~0.10mには粘土ブロックを混じえる細礫層の薄層に覆われ、標高0.10~1.10mは灰黄褐色ないし黒色の粘土層となる。粘土層の基質には粗粒砂サイズの砂粒子が分散し、標高0.90~1.06mには淘汰良好な粗粒砂層の薄層が挟まれる。標高1.10~2.90mには細礫や極粗粒砂とシルト質砂層の互層からなり、下部（標高1.10~2.20m）は淘汰良好な細礫~極粗粒砂層で、上部（標高2.20~2.90m）へ次第にシルト成分が優勢になる。全体に上方細粒化傾向を示す。標高2.90~3.30mは植物片を含むシルト質粘土層からなり、特に標高3.24~3.30mには植物の遺体のみからなる集積層がみられる。標高3.30~6.30mは淘汰良好な極粗粒砂~細粒砂層の互層となる。全体に砂粒子が卓越するものの、標高5.82~6.04mには砂質シルト層が挟まれる。標高6.30~8.68mは黄褐色ないしにぶい黄色を呈するシルト層~砂質シルト層である。地層中には砂粒子の分散がみられるところもあるが、全体にシルト成分が卓越する。標高8.68~8.80mは人工的な盛り土である。

4. 上橋下遺跡の深掘層序

02区で2地点（地点2および地点3）、03区で1地点（地点4）の計3地点で深掘による層序断面観察を行なった（第71図）。地点2は調査区（02区）中央部分に設定された層序確認のためのトレンチ部分にあたる。下位層より標高7.19~7.50mは灰色を呈するシルト質粘土層である。堆積物は塊状・均質で肉眼では堆積構造は確認できない。標高7.50~8.00mは灰褐色を呈する砂質シルト層からなる。本層も塊状・均質で堆積構造はみられない。標高8.00~8.13mは灰色の砂質シルト層からなる。シルト成分が卓越する。なお、標高7.19~7.50mの灰色シルト質粘土層からは弥生時代後期の、標高7.50~8.00mのシルト層からは古代~中世の遺物が出土する。

地点3は02区の調査区南端においてバックホーにより遺構検出面からさらに深く掘り下げた。下位層より標高5.17~5.52mは黒褐色のビート層である。植物に由来する分解の進んだ粘土、ヨシ属などの茎部や木片が混じる。標高5.52~6.08mは細粒砂層からなる。基質にシルトを混じえ、砂粒子の淘汰は良好である。肉眼で堆積構造は確認できなかった。標高6.08~7.28mは暗灰色~灰褐色の粘土層ないしシルト質粘土層からなる。塊状・均質で堆積構造はみられない。標高7.28~7.50mは黒褐色粘土層であり、上部には炭化物が層中全体に分散している。標高7.50~8.18mは灰褐色~褐色の粘土層である。堆積構造は確認できない。標高8.18~8.82mは灰褐色~褐色の粘土層ないし砂質シルト層からなる。堆積構造はみられない。本層の最頂部（標高8.82m）が現在の地表面である。なお、標高6.08~7.28mの粘土層ないしシルト質粘土層の最頂部（標高7.12~7.28m）からは弥生時代後期に遺物が、標高7.28~7.92mからは古代~中世、標高7.92~8.50mからは近世の遺物がそれぞれ出土する。

地点4では03区の南端においてバックホーにより深掘を行なった。下位層より標高4.24~4.73m

は淘汰良好な粗粒砂層であり、木片や植物片を含む層準もみられる。標高4.73～5.07mは黒褐色～暗褐色の腐植質粘土層からなる。塊状・均質で、植物の分解は進んでいる。標高5.07～6.45mはシルト質極細粒砂層である。基質のシルト成分は少ない。砂粒子の淘汰は良好である。標高6.45～7.15mは塊状で均質な灰色粘土層からなる。堆積構造は確認できない。標高7.15～7.96mは灰褐色～赤褐色のシルト層である。堆積構造は確認できない。草本類に由来する根跡が本層より上位層で確認できるように。本層の下部（標高7.15～7.60m）は灰色を、上部（標高7.60～7.96m）は赤褐色を呈して、色調の変化が著しい。標高7.96～8.85mは灰色シルト層である。堆積構造はみられない。また、標高7.15～7.96mにみられる灰褐色～赤褐色シルト層の上部（標高7.60～7.96m）からは弥生時代後期から古墳時代初頭の遺物が出土するようになる。

5. 放射性炭素年代測定

地点1（01A区）のボーリング資料から12試料（第7表）、地点2（02区）で2試料（第8表）、地点3（02区）で3試料（第9表）、地点4（03区）で8試料（第10表）の放射性炭素年代値を得た。

地点1のボーリング資料では、標高9.10～8.70mのシルト質砂層の標高8.90mから採取した植物片が43280±530 yrs BP (PLD-3083) とおよそ4万年前よりも古い年代値を示したが、それよりも上位の地層では標高4.45mの細礫混じりの砂質シルト層から採取した植物片が7425 cal yrs BP (PLD-3082)、標高6.60mのシルト層から採取した炭化物が2710, 2630, 2615, 2590, 2540, 2530, 2495 cal yrs BP (PLD-3072) と概ね約7000年前から約2500年前までの数値年代を示した。

深掘に伴う層序断面では地点3（02区）の標高5.17～5.52mにみられる黒褐色ビート層の標高5.20mから採取した木片が2945, 2935, 2925 cal yrs BP (PLD-2109)、地点4（03区）南端の標高4.24～4.73mにみられる粗粒砂層の標高4.24mから採取した有機質土壌で2845 cal yrs BP (PLD-2850)、標高4.73～5.07mにみられる黒褐色～暗褐色の有機質粘土層の標高4.78mから採取した木片が2710, 2630, 2610, 2590, 2535, 2530, 2495 cal yrs BP (PLD-2854) などと、約3000年前～2000年前代の数値年代を示す試料が多かった。

6. 調査地周辺の地形解析

地形解析のための、より詳細な等高線図を得るため愛知県安城市発行の「都市基本図（1/2,500）」を用いて等高線図を作成した。東西約2.8km、南北約2.0kmの範囲において、標高8.4mから標高13.0mまでの等高線が描ける（第72図）。範囲の西側および北東から東側では標高10mを超えて相対的に高くなっており、これらのうち西側でみられる標高10mから標高13mには第四系上部更新統の碧海層が露出する台地となっている。この台地の標高10mよりも低い東縁から現在の鹿乗川の流路とに挟まれる、安城市古井町・板井町の標高8.4mから標高9.0mにかけては、南北方向にのびる狭長な谷地形が確認され、とくに現在の西鹿乗川と鹿乗川とに挟まれる板井町で顕著である。

調査地点より約1.0km南東には現在の矢作川が南流するが、河川近傍の標高11mから西側へ向かうにしたがって徐々に標高を減じているのがわかる。矢作川右岸から西側の地域には舌状（ロープ状）の地形が確認でき、北の上佐々木町から安城町にかけて標高9.8mから標高10.4mまでで東西方向に

のびるもの、河野町から川島町にかけて標高9.8mから標高10.6mで東西方向にのびるもの、村高町北西城の標高9.8mから標高10.0mで東西方向ないしは北東-南西方向にのびるものがみられる。また、上橋下遺跡の東約100mには標高9.0mから標高9.4mで、北東から南西方向にのびるような周囲に比べて低く閉じた地形も確認できる。調査区は、標高10mよりも高い碧海層の露出する台地と現在の矢作川との間にひろがる沖積低地で、標高9.6mと標高9.8mとの間に認められる平坦面の上に位置している。

7. 考察

調査区における堆積環境

上橋下遺跡のオールコア・ボーリングでは標高11.0mから標高8.80mまでの層厚約20mの層層が得られ、全体に砂や礫といった粗粒な粒子が卓越した。最下位でみられる標高11.20～9.10mの中礫層は本試料中でもっとも高い45～50のN値を示した。この礫層を標高9.10～8.70mにはシルト質砂層が覆い、標高8.90mから採取した植物片は43280±530 yrs BP (PLD-1988)であった。

調査地点の西側の標高10mよりも高い地域には上部更新統の碧海層が露出した。碧海層の基底面は標高10mから標高20mにあるとされる(牧野内, 1988)。今回のボーリング資料の最下位層の基底面の標高は11.0から標高10.0mにあり、ちょうど碧海層の基底面にあたる標高値である。

ところで、碧海層の放射性炭素年代測定に関して、安城市篠目町の地下約2.5mより得られたモミの実が29000 yrs BPよりも前の値、西尾市道光寺町町の地下5.8mの木片が31000 yrs BPの報告がある(坂部, 1971)。それらの結果と比べると約4万年前の今回得られた値はおおよそ1万年ほど古い値である。礫や砂といった粗粒な粒子からなる堆積物中から得られた試料であるため、運搬されるときに水理エネルギーも高く、上流部から削割により再び運ばれた二次堆積物である可能性も否定できない。最下位層は碧海層であると予想されるものの、その値には慎重なとり扱いが必要である。

この砂礫層よりも上位には礫を含む砂層が卓越し、それらがくり返して堆積していることがわかった。これらの砂礫層について、標高4.50～2.76mには砂質シルト層がみられ、本層の標高4.45mから採取した植物片が7425 cal yrs BP (PLD-3082)、標高2.76～0.60mでみられる細礫層と中粒砂～極粗粒砂との互層から得た植物片(標高2.10m)は6660, 6650, 6640 cal yrs BP (PLD-3081)と、少なくとも約7400年前から約6600年前頃には当地は網状河川の活動的流路内であったことがわかった。オールコア・ボーリング資料でもっとも細粒な粒子が確認されるのが標高0.60～0mの黒色粘土層からである。本層の標高0.43mで得た土壌で6395, 6370, 6350, 6325, 6320 cal yrs BP (PLD-3080)、標高0.20mで得た土壌で4845 cal yrs BP (PLD-3079)の値であり、少なくとも約4800年前には本地点では後背湿地状の堆積物が堆積していたことがわかる。後背湿地となった後も調査地点には幾度となく活動的流路の存在がうかがえる。例えば、標高1.10～2.90mの細礫～極粗粒砂の互層や、標高3.30～6.30mの極粗粒砂層や細粒砂層との互層はその典型である。これらの砂層の標高2.60mで得た植物片は4255 cal yrs BP (PLD-3077)、標高5.50mで得た植物片は3000 cal yrs BP (PLD-3073)と、約4000～3000年前の間には活動的流路内の堆積物であった。

最上部はシルトを主体とする細粒堆積物が卓越するようになり、標高6.30～8.68mはシルト層～

砂質シルト層からなる。本層の標高6.60mから得た炭化物は2710, 2630, 2615, 2590, 2540, 2530, 2495 cal yrs BP (BC 760, 685, 665, 640, 590, 580, 545) (PLD-3072) と、縄文時代晩期の相対年代を示し、本層の標高7.0mよりも上位が遺構検出面となっている。このことから、縄文時代晩期以降に人為的な影響を被るようになったことがわかった。

約3000年前以降の堆積環境

地点1 (01A区) で実施したオールコア・ボーリングの層序解析結果から、標高6.30~8.68mの最上部にはシルト層や砂質シルト層といった細粒堆積物が卓越するようになった。また、本層の標高6.60mから得た炭化物は2710, 2630, 2615, 2590, 2540, 2530, 2495 cal yrs BP (PLD-3072) であり、この年代値以降、調査地点は砂層の卓越する網状河川的な活動的流路から水理学的な低エネルギー環境へと変化したことがわかった。つぎに地点2~4の解析結果をみると、標高6.0~6.5mを境にして層序は下位の砂層の卓越した層相と、その上位の細粒堆積物が卓越する層相と二分できる。標高6.0m付近でみられるこの特徴は先のオールコア・ボーリングの結果と調和的である。

堆積年代について地点3 (02区南端) の標高5.17~5.52mの黒褐色ビート層の標高5.20mから採取した木片が2945, 2935, 2925 cal yrs BP (BC 995) (PLD-2109)、標高6.08~7.28mの粘土層~シルト質粘土層の標高6.09mより採取した有機質土壌が2775 cal yrs BP (BC 830) (PLD-2108) と約2900~2700年前代の値を示した。また、地点4 (03区南端) でも最下位層である標高4.24~4.73mの粗粒砂層の標高4.24mから得た有機質土壌が2845 cal yrs BP (BC 895, 875, 860, 850, 845) (PLD-2850)、標高4.73~5.07mの有機質粘土層の標高4.78mから採取した木片が2710, 2630, 2610, 2590, 2535, 2530, 2495 cal yrs BP (BC 760, 685, 665, 640, 590, 585, 545) (PLD-2854) と、約2800~2500年前代を示すほぼ同じ値を得た。なお、地点4 (03区) の標高5.07mよりも上位の地層では、それよりも下位層が約2800~2500年前代を示すにも関わらず、標高5.07~6.45mのシルト質極細粒砂層の標高5.09mの有機質土壌が3330, 3285, 3270 cal yrs BP (BC 1380, 1335, 1320) (PLD-2849)、標高5.76mの有機質土壌が3315, 3310, 3265 cal yrs BP (BC 1365, 1360, 1315) (PLD-2848) とおよそ3300年前代前後を、上位の標高7.15~7.96mのシルト層の標高7.12mの有機質土壌は3315, 3255, 3215 cal yrs BP (BC 1365, 1295, 1275, 1265) (PLD-2851)、標高7.25mの有機質土壌が3060, 3050, 3035, 3010, 3000 cal yrs BP (BC 1110, 1095, 1085, 1060, 1055) (PLD-2852) と約3300~3000年前前後を示し、下位層と上位層との間で放射性炭素年代値の逆転現象が生じている。このことは、標高5.07mよりも上位の層相は、二次的な再堆積を伴うような高エネルギー環境下にあったと推察できる。これは、陸上河川において地点4付近が他の地点よりも相対的に低く、河川が流下しやすい場所であったことを示唆する。このことに関して、時間層序学(東層層序学)的に堆積物をみてみれば、地点3では標高6.09mで約2700年代を示すが、さらに南の地点4では標高4.78mでおよそ2700年前代を示し(第71図)、同じような年代値を示す層相の標高が1.3mほど南に低くなっている。このように、同じような年代値を示す層相は砕屑物がたまる際の堆積面を示し、上橋下遺跡の調査範囲では北から南へ傾斜して低くなっている古地形を推定することができる。現在の表層地形解析では調査範囲は標高9.6~9.8mの平坦面の上にあることを指摘した(第

71図)。この平坦面は川島町から桜井町にかけての標高9.4～9.8mにみられる北東から南西方向にのびる舌状（ロープ状）地形に含まれている。従って、この舌状地形は少なくとも約2700年前頃に北東から南西方向（岡崎市上佐々木町付近から安城市桜井町付近にかけて）へ堆積物を前進・付加させることで堆積地形を形成してきたものと思われる。

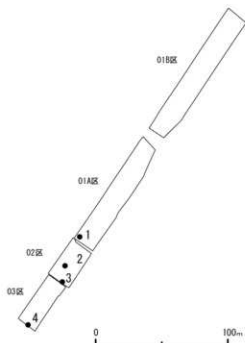
地点2（02区）の標高7.19～7.50mのシルト質粘土層の標高7.35mの炭化物は2040, 2025, 2010 cal yrs BP (BC 90, 70, 60) (PLD-2106) を、地点3（02区）の標高7.28m～7.50mの黒褐色粘土層の標高7.43mから採取した炭化物は1920, 1915, 1895 cal yrs BP (AD 30, 35, 55) (PLD-2107) を示し、約2000年前後に堆積物の累積により調査地点はほぼ平坦化したものと思われる。地点4（03区）ではおよそ2000年前代の値を示す試料が得られていないが、暗赤褐色シルト層は弥生時代後期から古墳時代の遺物が含まれるとの報告がある（松田, 2004）。この暗赤褐色シルト層は深掘を実施した地点4の標高7.60～7.96mにみられる赤褐色シルト層にあたり、先の2000年前代の層厚は標高7.60mよりも下位にあるものと推定される。いずれにせよ、約2000年前代の層厚は標高7.50m付近にあたり、その頃に平坦化が進行し、人為活動が行なわれたものと推定できる。

謝辞

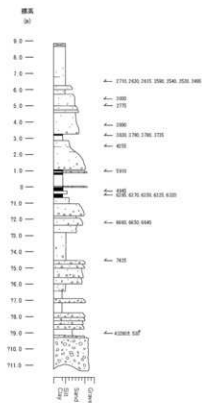
本論を作成するにあたり、オールコア・ボーリングの資料採取では応用地質株式会社中部支社の細田 宏氏・下山奈緒氏・竹村聖吾氏にお世話になった。愛知県埋蔵文化財センター調査研究員の松田 訓氏・宮腰健司氏・池本正明氏には上橋下遺跡に関する考古学的情報を教えていただいた。分析試料の整理・保管と原因の作成では整理補助員の服部久美子氏・村上志穂子氏にお手伝いいただいた。記して厚くお礼申し上げます。

文献

- 牧野 猛・小井土由光, 1988, 第5章 第四系, 山下 昇・紺野義夫・糸魚川淳二編日本の地質5「中部地方I」, 共立出版, 144-177.
- 松田 訓, 2004, 上橋下遺跡, 愛知県埋蔵文化財センター平成15年度「年報」, 愛知県埋蔵文化財センター, 31.
- 坂部和夫, 1971, 矢作川流域の第四系と14C年代-日本の第四紀層の14C年代 (64) -, 地球科学, 25, 46-48.
- 三田敦司, 2005a, 古井遺跡群, 愛知県史 資料編3「考古3 古墳」, 愛知県, 534-542.
- 三田敦司, 2005b, 二子古墳, 愛知県史 資料編3「考古3 古墳」, 愛知県, 546-547.

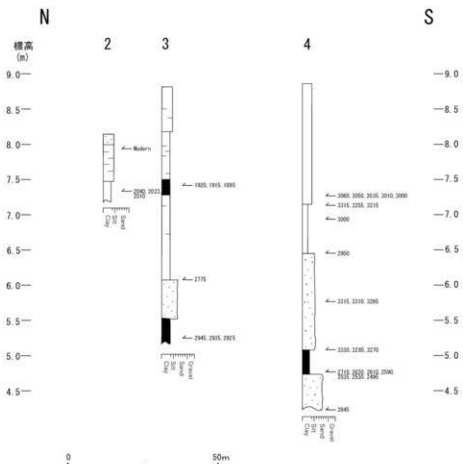


第69図 上橋下流跡におけるボーリング調査および深掘実施地点
地点1はボーリング調査,地点2~4は深掘地点を示す。

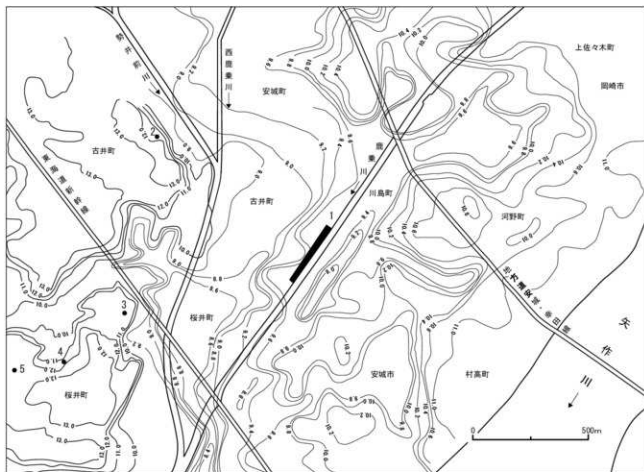


第70図 地点1 (01A区)のボーリング調査における柱状図

矢印は放射性炭素年代測定を試料採取層厚を,数値は暦年代較正值 (cal yrs BP) を示す。



第71図 地点2 (02区),地点3 (02区),地点4 (03区)における南北順序断面図
各地点の順序は経線方向に投影している。矢印は放射性炭素年代測定を試料採取層厚を,数値は暦年代較正值 (cal yrs BP) を示す。



第72図 調査地点周辺の等高線図

数字1～5は調査地点と周辺の主な遺跡を示す。

1 上横下遺跡（今回の調査地点） 2 塚越古墳 3 二子古墳 4 碧海山古墳 5. 堀内古墳
等高線（m）は安城市発行の「都市計画基本図（1/2500）」の標高値を基に鬼頭が作成。
等高線間隔は0.2mである。

地名は上佐々木（かみささき）、河野（かわの）、村高（むらたか）川島（かわしま）、安城（あんじょう）、
古井（ふるい）、桜井（さくらい）である。

第7表 地点1 (O1A区) ボーリング調査の放射性炭素年代測定結果

標高 (m)	埋蔵物	試料の種類	^{14}C 年代 (yrs BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	POB	暦年代正誤 (1 σ , AD/BC)	暦年代正誤 (1 σ , cal yrs BP)	1 σ 暦年代範囲 (AD/BC, probability)	1 σ 暦年代範囲 (cal yrs BP, probability)	Lab code No.(method)
-4.50	シルト質砂層	植物片	4320 \pm 30	-27.6	-	-	-	-	-	PLD-3063(AMS)
-4.45	縦溝掘り目	植物片	6305 \pm 45	-33.5	BC 5475	7425	BC 5445-5415(32.7%) BC 5485-5405(28.4%) BC 5405-5375(27.0%)	7395-7365(34.2%) 7435-7415(28.1%) 7350-7325(27.8%)	PLD-3082(AMS)	
-2.10	縦溝掘り目 縦溝状砂層	植物片	5830 \pm 45	-28.3	BC 4710,4700, 4095	6660,6650, 6640	BC 4725-4665(53.1%) BC 4645-4615(19.9%) BC 4775-4750(18.0%)	6675-6615(53.1%) 6590-6565(20.9%) 6720-6700(15.1%)	PLD-3081(AMS)	
-0.43	粘土層	土塊	5585 \pm 45	-27.3	BC 4440,4420, 4400,4375, 4370	6395,6370, 6350,6325, 6320	BC 4410-4360(60.2%) BC 4455-4430(29.3%)	6360-6310(62.4%) 6405-6380(28.1%)	PLD-3080(AMS)	
-0.20	粘土層	土塊	4280 \pm 40	-36.0	BC 2895	4845	BC 2915-2880(100%)	4865-4830(100%)	PLD-3079(AMS)	
1.05	腐植層	ピート	5130 \pm 50	-27.7	BC 3960	5910	BC 3865-3855(48.8%) BC 3980-3935(45.4%)	5930-5885(48.4%) 5810-5755(47.8%)	PLD-3078(AMS)	
2.60	シルト質砂層	植物片	3860 \pm 45	-28.2	BC 2305	4255	BC 2355-2280(48.6%) BC 2405-2360(26.1%)	4305-4230(48.8%) 4355-4310(25.5%)	PLD-3077(AMS)	
3.25	植物片腐植層	植物片	3520 \pm 45	-30.8	BC 1880,1840, 1830,1785	3830,3790, 3780,3735	BC 2250-2230(10.4%) BC 1890-1765(97.6%)	4200-4180(10.9%) 3840-3715(98.3%)	PLD-3076(AMS)	
3.90	砂質シルト層	植物片	3600 \pm 40	-28.5	BC 1945	3890	BC 1980-1890(85.3%) BC 2015-1995(14.7%)	3930-3840(84.9%) 3965-3945(15.1%)	PLD-3075(AMS)	
5.00	中粒砂層	植物片	2685 \pm 35	-29.4	BC 825	2775	BC 840-805(75.2%) BC 895-875(24.8%)	2790-2750(75.8%) 2845-2825(24.2%)	PLD-3074(AMS)	
5.30	縦溝掘り目 縦溝状砂層	植物片	2895 \pm 35	-33.6	BC1050	3000	BC 1125-1010(100%)	3075-2960(98.6%)	PLD-3073(AMS)	
6.60	シルト層	炭化物	2485 \pm 35	-13.6	BC 760,685,665, 640,590,580, 545	2710,2630, 2615,2590, 2540,2530, 2495	BC 670-535(71.6%) BC 725-675(20.6%)	2620-2485(71.6%) 2670-2625(20.6%)	PLD-3072(AMS)	

第8表 地点2 (O2区) の放射性炭素年代測定結果

標高 (m)	埋蔵物	試料の種類	^{14}C 年代 (yrs BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	POB	暦年代正誤 (1 σ , AD/BC)	暦年代正誤 (1 σ , cal yrs BP)	1 σ 暦年代範囲 (AD/BC, probability)	1 σ 暦年代範囲 (cal yrs BP, probability)	Lab code No.(method)
7.35	シルト質粘土層	炭化物	2080 \pm 30	-25.3	BC 90,70,60	2040,2025, 2010	BC 115-50(78.9%) BC 155-135(21.1%)	2065-1995(81.0%) 2100-2080(19.0%)	PLD-2106(AMS)	
7.95	シルト層	植物片	-515 \pm 30	-30.8	Modern	Modern	-	-	PLD-2105(AMS)	

第9表 地点3 (O2区) 深掘の放射性炭素年代測定結果

標高 (m)	埋蔵物	試料の種類	^{14}C 年代 (yrs BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	POB	暦年代正誤 (1 σ , AD/BC)	暦年代正誤 (1 σ , cal yrs BP)	1 σ 暦年代範囲 (AD/BC, probability)	1 σ 暦年代範囲 (cal yrs BP, probability)	Lab code No.(method)
5.20	長繊維ピート層	木片	2830 \pm 30	-28.8	BC 995	2945,2935, 2925	BC 1010-970(54.8%) BC 960-925(45.2%)	2955-2915(52.6%) 2910-2875(47.4%)	PLD-2109(AMS)	
6.09	粘土層	有機質土塊	2690 \pm 30	-26.6	BC 830	2775	BC 840-805(70.1%) BC 895-875(29.9%)	2790-2755(72.8%) 2845-2825(27.2%)	PLD-2108(AMS)	
7.43	長繊維シルト層	炭化物	1955 \pm 30	-25.7	AD 30,35,35	1920,1915, 1895	AD 20-80(93.2%)	1930-1870(94.6%) 1945-1940(5.4%)	PLD-2107(AMS)	

第10表 地点4 (O3区) 深掘の放射性炭素年代測定結果

標高 (m)	埋蔵物	試料の種類	^{14}C 年代 (yrs BP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	POB	暦年代正誤 (1 σ , AD/BC)	暦年代正誤 (1 σ , cal yrs BP)	1 σ 暦年代範囲 (AD/BC, probability)	1 σ 暦年代範囲 (cal yrs BP, probability)	Lab code No.(method)
4.24	縦溝掘り目	有機質土塊	2740 \pm 40	-29.2	BC 895,875,860, 850,845	2845	BC 905-830(100%)	2855-2780(100%)	PLD-2850(AMS)	
4.78	長繊維7層褐色 腐植質粘土層	木片	2485 \pm 40	-28.3	BC 760,685,665, 640,590,585, 545	2710,2630, 2610,2590, 2535,2530, 2495	BC 740-725(47.1%) BC 760-755(24.1%) BC 940-530(6.8%) BC 675-670(2.1%)	2620-2485(66.2%) 2670-2625(20.4%)	PLD-2854(AMS)	
5.09	シルト質腐植質砂層	有機質土塊	3080 \pm 40	-25.7	BC 1380,1335, 1320	3330,3285, 3270	BC 1365-1305(54.3%) BC 1405-1365(43.0%)	3335-3255(54.9%) 3270-3210(46.0%)	PLD-2849(AMS)	
5.76	シルト質腐植質砂層	有機質土塊	3045 \pm 40	-24.5	BC 1365,1360, 1315	3315,3310, 3285	BC 1320-1260(53.9%) BC 1385-1335(44.1%)	3270-3210(53.9%) 3355-3285(45.2%)	PLD-2848(AMS)	
6.32	灰色粘土層	有機質土塊	2895 \pm 35	-23.1	BC 1000	2950	BC 1045-970(73.6%) BC 960-930(26.4%)	2995-2920(71.1%) 2910-2875(28.9%)	PLD-2847(AMS)	
6.92	灰色粘土層	有機質土塊	2895 \pm 35	-21.9	BC 1050	3000	BC 1125-1010(100%)	3075-2960(98.6%)	PLD-2853(AMS)	
7.12	灰色粘土層	有機質土塊	3035 \pm 35	-22.0	BC 1365,1295, 1275,1265	3315,3255, 3215	BC 1320-1260(54.8%) BC 1375-1335(32.9%)	3270-3210(57.4%) 3325-3285(34.7%)	PLD-2851(AMS)	
7.25	長繊維シルト層	有機質土塊	2910 \pm 35	-23.1	BC 1110,1095, 1085,1060, 1055	3060,3050, 3035,3010, 3000	BC 1130-1035(80.2%)	3060-2965(80.2%)	PLD-2852(AMS)	

第VII章 総括

第1節 01A区SX02について

前述したように、01A区SX02（以下、SX02と省略する）は01A区の下面で検出された中世前期の遺構である。すでに第IV章で報告されているように、比較的大きな遺構で、01A区のほぼ1/4程度を占めるが、調査区内では全形が確認できていない。ここではSX02の性格を理解するため、調査所見やその後の検討で得られた知見をまとめておく。

SX02は上面で検出されたNR01の埋土を取り除いた状態で検出された遺構である。NR01は01A区の北側から流れる旧河道で、01A区の中央部で南東と南に分岐する。川幅は南東が約24m、南が幅約12mだが、南側へ向かう流れは川底が深く、下面の調査最終段階で実施した断ち割り調査においても、まとまった量の近世～近代の陶磁器類が出土している。一方、南東の流れは近世～近代の堆積層が薄い。SX02が上面段階で完全に埋没していなかったために生じた水流であろうか。また、SX02の埋土からはイシガイの貝殻が生息時の状態で数点出土しており、ここが活動時に冠水状態であったことも推定できる。

次に、SX02の全体像を推定する。まず、SX02を南東から北西に突き抜ける自然流路と考えてみたい。この場合、SX02の検出されている主要部分は、流路の北東岸を大きく拡張したもので、後述する杭の集中部分を挟んだ反対側では、SD17・28・32などがこれに合流している。また、SD27も規模は小さいが、これらの溝と同様に含めて理解できるのかもしれない。しかし、SX02を自然流路と理解した場合には、上流となる南東側が北西側に比較して異常に細いことが不可解となっている。調査区外で幅が絞られているかもしれないが、あるいはこの部分もSD17・28・32と同様の溝として理解すべきなのかもしれない。この場合、SX02は自然流路ではなく、溝の合流部分に設定された遺構と考えられる。ただし、この部分は後述する杭の集中部分の南西側となり、他の溝が全て杭の集中部分より北東部に位置するのに対して合流方法が異なる。いずれにしても、SX02は冠水した状態で機能する構造で、これに合流する溝のうちSD27・28・32は重複するため、これがある程度長期に渡って機能していると考えられる。

ところで、SX02に特徴的となるのは第73図にアミカケで表現した杭の集中部分である。杭には木製と竹製とが使用されており、概ね4:1で木製が主体となる。杭の長さは、竹製が20cm前後に集中するが、木製では長さのパラツキが大きく、1mを超えるものまで含まれている。杭は直立した状態のみでなく、横方向で検出されたものや小枝も含まれている。ところで、こうした遺構は堤防状の構築物の芯構造として理解される事が多い（小山田 2004）^{*}。SX02もこの考えに従うのであれば、北西部と南東部に構築物を築くことにより、SD17・28・32などのSX02に合流する溝の水量をコントロールする役割が推定できる。

SX02は出土遺物も特徴的となる。出土遺物は多量で、中世前期の土器を中心とする。土器類には完形品も多く含まれている。出土地点はSX02の全域に及ぶが、杭集中部分の少し外側に多くな

る傾向も観察できる。土器類の器種を観察すると、腕がほとんどで小皿が若干これに加わる。腕と小皿は尾張型の5型式～9型式に属し、やや広い次期幅を持っているが、上記のようにS X02の継続時期もやや長く考えられるため矛盾しない。

出土している腕・小皿は、焼成時の焼きひずみや焼き割れが観察できる資料も多く、使用痕が確認できない資料も存在している。一方、スガが付着した資料や墨書土器も一定量が含まれている。一過性の特殊な使用状況であったのだろう。焼成不良品が多数混在する理由も、これと同様であろうか。また、土器類にはいわゆる古瀬戸が含まれていないことや、器種が腕に集中するありかたも特徴といえる。こうした状況は通常の集落遺跡資料とは異なった個性となっている。

出土遺物にはこの他にウマ頭骨も1点出土している。保存状態が悪く、ほとんど原型をとどめていない。検出直後の降雨により失われてしまったが、検出時には頭頂部も全て残存しており、犠牲獣と考えられる。北西側の杭集中部の南西部から出土したもので、土坑を確認できていないが、堤状の盛土中もしくは基底部付近に埋納されたものであろうか。この他、残存状態が悪く種が確定できない獣骨片が、ウマ頭骨の周囲から数点出土している。

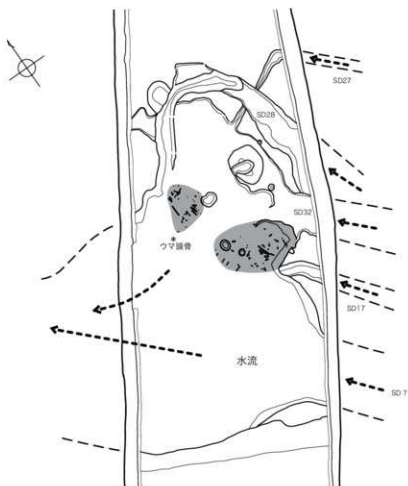
以上のように、S X02は冠水した状態で機能した遺構で、溝が合流していることから溝により水を集める用途が想像できる。堤防状の盛土が想定できることから、ここでは水量の制御もなされていたことが想定できる。こうした状況は、S X02がある程度の水準を保った土木技術により構築されたことを想像させる。合流する溝が切り合うことから度々改修も試みられていたであろうか。一方、祭祀の存在も確認できた。具体的な姿は不明だが、出土した土器の時期幅が広いことから、同様の祭祀が繰り返し実施されていることが考えられる。犠牲獣は水との関わりで説明されることが多く（板井 1992）、S X02にふさわしい存在と言えよう。ただし、現状では部分的な検出にとどまり、具体的な性格は明らかにできない。今後の課題となるであろう。

注

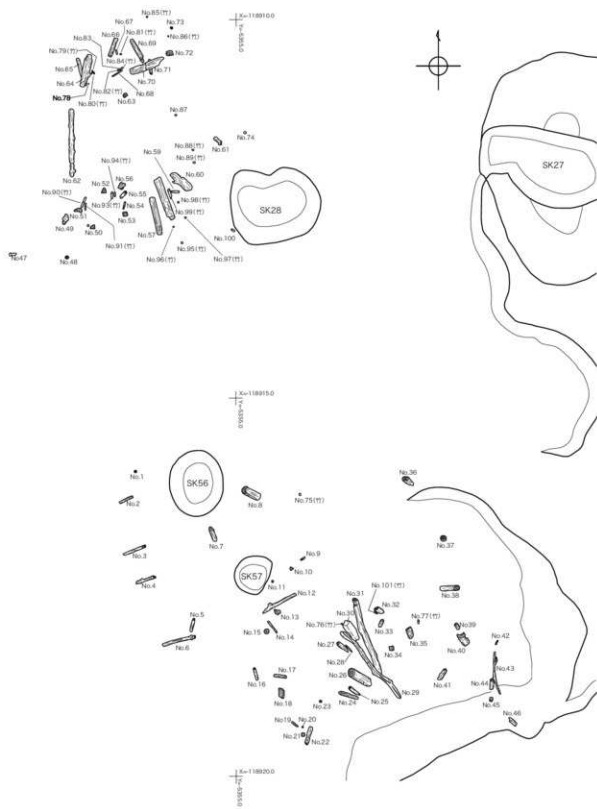
*ただし、調査時には筆者を含めて杭集中部を構築物の芯構造とする認識に至ることができず、調査時には盛土の残存を意識した検討を加えていない。しかし、土器の出土地点が、想定される土盛の位置、つまり杭集中部とその周囲とは基本的に重ならず、土器がS X02に投棄された段階には盛土が存在していた可能性が高い。なお、土盛は調査時にも基底部が残存するものこれに気付かなかった可能性も存在するが、S X02は上面の自然河道が重なるまで、基本的には冠水した状態で緩やかに埋没が進むため、土盛が強固に構築されたものでなければ、自然崩壊も進行するものと考えている。

引用文献

- 小山田宏一 2004 「築堤と灌漑」『第12回春日井シンポジウム2004年 水と大地』春日井市教育委員会・春日井シンポジウム実行委員会
- 板井秀雄 1992 「殺牛馬信仰に関する文献史料の再検討」『信濃』第44巻 第4号



第73図 O1A区 SX02概念図 1:300



第74图 01A区 SX02机坪出状况 1 : 50

第2節 木製品

ここでは上橋下遺跡出土の木製品について、器種組成および樹種組成の視点から若干の分析をおこなう。ただし江戸時代の木製品はわずかにすぎないため、時期を弥生時代と鎌倉時代に絞って考察をすすめる。

第1項 上橋下遺跡出土木製品の特徴 (第75図)

弥生中期後葉の木製品はSD54出土の1点を除き、他の34点はすべてSD33からの出土である。弥生中期の木製品としては、同じ愛知県内の清須市朝日遺跡 (IV期-176点)・春日井市勝川遺跡 (IV期-89点)・小坂井町藤東遺跡 (IV期-56点) に較べると少ないが、西三河地方ではこれまでで最も多い出土点数となる。

器種は掘削具 (直柄平楸未成品・直柄小型楸・一木平鋸・組合せ平鋸)・農具 (臼)・工具 (縦斧柄)・容器 (椀・槽)・建築部材 (マグサor蹴放し・梯子・その他の建築部材)・加工棒・加工板と比較的バラエティーに富んでいる。なかでもマグサor蹴放し (10)、柱材 (12・13)、屋根材の可能性を有するスギの薄板 (20~22・31~34) は、いずれも掘立柱建物の建築部材と考えられ、当該期の建物構造を復元するうえで貴重な資料といえる。容器では、個人用食器としての椀 (7) が重要である。木製の椀や高杯・鉢などは、朝日・阿弥陀寺・藤東など、愛知県内でもごく限られた遺跡からしか出土しないため、おそらくは拠点的な集落に居住する首長層のみが使用できたものと考えている。一方、縦斧柄 (1) のほか、未成品 (2) や板材 (23)・分割材 (24・26) など、製作途上の木製品がふくまれている点は、愛知県下のみならず、伊勢湾周辺の弥生時代集落出土の木製品群と共通する要素である。

鎌倉時代では、容器 (漆椀・曲物側板)・服飾具 (下駄)・建築部材・杭・加工棒・加工板があり、やはり生活の匂いが伺えるが、掘削具・農具・工具は全く出土していない。

第2項 周辺の遺跡との比較

上橋下遺跡出土の弥生中期後葉 (および鎌倉) の木製品群を、愛知県内の他遺跡出土資料と比較する (第76図)。ただし、基日寺町阿弥陀寺遺跡・豊田市川原遺跡は出土点数がごく少数であるために、比較対象からははずしている。

(1) 器種組成

弥生時代では、上橋下遺跡は掘削具 (未成品をふくむ) の占める比率が木製品全体のわずかに1割程度とさきわめて低い。その一方で、建築部材が2割と他の遺跡に較べて多いことが特徴としてあげられる。また、狩猟具・武器 (弓・楯など) や祭祀具・威儀具こそないものの、西三河にある他の遺跡 (岡島・西中神明社南) に較べて器種数が多く、バランスがとれた印象をうける。

鎌倉時代は前述のように、掘削具・農具・工具が欠落しており、弥生時代の遺跡から出土する木製品の器種組成とは全く異なっていることが特徴といえる。

(2) 樹種組成 (第77図)

弥生時代の上橋下遺跡は、針葉樹が5割を超えており、なかでもスギが4.3%と非常に高い割合を占めている。同様にスギが優占種の弥生集落として、朝日遺跡があげられる。朝日遺跡の全樹種中でスギの占める比率は、弥生中期後葉こそ21%にすぎないが、弥生中期前葉では38.7%におよんでいる。朝日遺跡では、弥生中期後葉まではスギが高率を占めるが、ヒノキ科(ヒノキ・サワラ・アスナロ・ネズコなど)も多く、弥生後期以降はスギをしのいでヒノキ科(特にヒノキ)が優占種となる¹⁾。朝日遺跡の立地する濃尾平野では、周囲の丘陵高所から山地の奥深くにはヒノキ科が、そして丘陵の谷筋や洪積台地と接する低い位置にスギ林が形成されていたと推定している。

一方、上橋下遺跡が所在する西三河地方では、同じ矢作川流域に立地する西尾市岡島遺跡(愛知県埋蔵文化財センター1990)でヒノキ属(ヒノキ・サワラ)が多く、スギは皆無である。スギは、上橋下遺跡と同じ古井遺跡群内の安城市中狭間遺跡(安城市教育委員会1999)・下懸遺跡2)・岡崎市坂戸遺跡(新編岡崎市史編集委員会1987)で若干出土しているのみで、豊田市伊保遺跡(猿投遺跡調査会1974)・本川遺跡(愛知県埋蔵文化財センター2003)・安城市釈迦山遺跡(安城市教育委員会2001)など、ほとんどの遺跡ではヒノキ科が優占している。やや地域を広げて西三河全域で見ると、境川流域の知立市西中神明社南遺跡(知立市教育委員会1992)ではスギがイヌガヤとともにおよそ2%を占め、ヒノキ科はない。東三河(豊川流域)では、豊橋市砥郷遺跡でスギがなく、小坂井町藤東遺跡はヒノキよりもスギが多い。

以上のように、西三河から東三河にかけての地域では、スギとヒノキ科のいずれかが優占する遺跡がモザイク状に分布している状況が伺える。濃尾平野のような広大な沖積低地が存在せず、矢作川や豊川といった大河川の付近まで丘陵や洪積台地が迫っている三河地方では、小丘陵(台地)単位でスギあるいはヒノキ科とともにマキ属・イヌガヤ・モミ属・アカガシ亜属・コナラ亜属(クヌギ節・コナラ節)・クリ・クスノキ科・サカキといった樹種が森林を形成しており、弥生～古墳時代の人々は、居住する集落に近接した丘陵から、必要な木材を適宜伐採して利用していた可能性が高い。

古代以降は、あきらかにヒノキ科への依存度が高くなり、愛知県下の多くの遺跡でも全樹種中の半数から9割近くをヒノキ科が占めるようになる(樋上2002)。鎌倉時代の上橋下遺跡も同様である。このことは、単に人間の関与によって遺跡周辺の植生が変化しただけではなく、官能的な性格の集落を中心に、ヒノキ科を主体とする意図的な樹種の選択がなされたことによっている。その結果、集落周辺の植生に強く依存した(尾張低地部はやや異なるが)弥生～古墳時代の木製品生産とは異なる、長距離の木材(および製品の)移送を前提とした広域的で、しかもヒノキ科を主体とする極端に偏った樹種選択による木製品の生産・流通網(山田2005)が形成されていくこととなった。

註

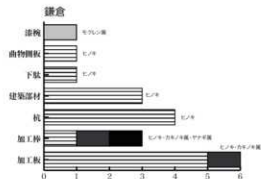
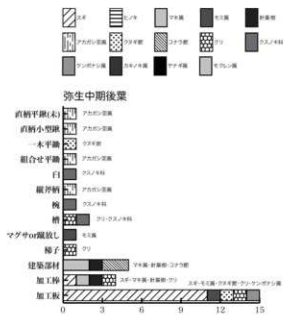
1) 現在、作成中の『朝日遺跡VII』(2006年度刊行予定)に、「朝日遺跡出土木製品の樹種組成と周辺の古植生」と題して筆者が執筆した、朝日遺跡出土木製品の樹種組成の分析結果を引用している。詳しくは、そちらを参照されたい。

2) 愛知県埋蔵文化財センターで2000年度に調査し、一部樹種同定をおこなっている。2006年度現在、整理・報告

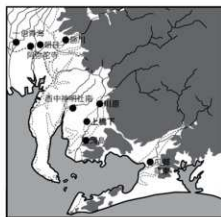
書作成中で、報告書は未刊。

参考文献

- 愛知県教育委員会1982『朝日遺跡』
愛知県教育サービスセンター1984『勝川』
愛知県埋蔵文化財センター1990『阿弥陀寺遺跡』
愛知県埋蔵文化財センター1990『岡島遺跡』
愛知県埋蔵文化財センター1992『勝川遺跡IV』
愛知県埋蔵文化財センター1992『朝日遺跡III』
愛知県埋蔵文化財センター1998『一色青海遺跡』
愛知県埋蔵文化財センター2001『川原遺跡』
愛知県埋蔵文化財センター2003『本川遺跡』
安城市教育委員会1999『中伏間遺跡』
安城市教育委員会2001『釈迦山遺跡』
小坂井町教育委員会1960『藤東遺跡調査報告書』
小坂井町教育委員会1961『藤東遺跡調査報告書 第2次』
猿投遺跡調査会1974『伊保遺跡』
新編岡崎市史編集委員会1987『坂戸遺跡』『新編岡崎市史 史料 考古上』
豊橋市教育委員会1963『瓜郷』
知立市教育委員会1992『西中神明社南遺跡発掘調査報告書』
名古屋市教育委員会2002『朝日遺跡第12次発掘調査報告書』
樋上 昇2002『樹種からみた尾張地域の木製品』『考古学フォーラム』15
樋上 昇2003『春日井市勝川遺跡出土木製品の再検討』『研究紀要』第4号 愛知県埋蔵文化財センター
山田昌久2005『完新世日本列島における木部資源の建築材利用構想の変遷』『日本植生史学会 第20回大会講演要旨集』日本植生史学会

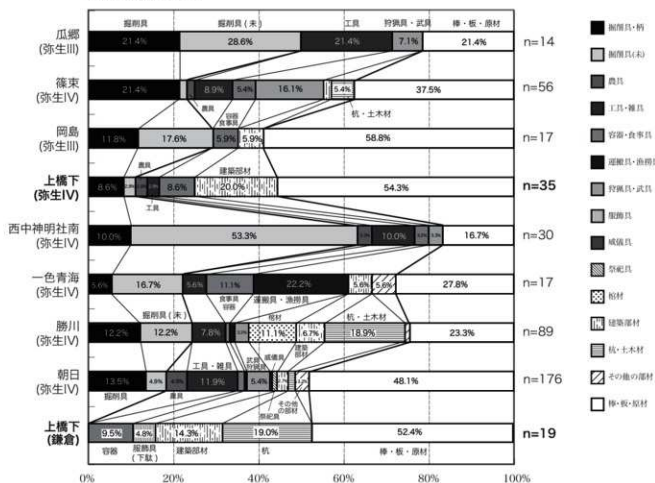


第75図 上機下遺跡出土木製品の器種・樹種組成

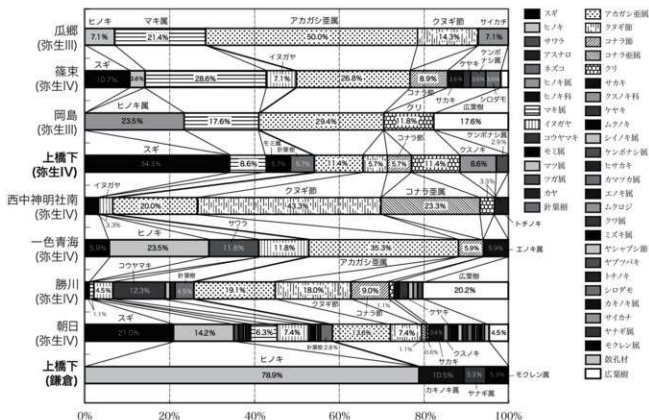


第76図 弥生中期の木製品出土遺跡

器種組成比較グラフ



樹種組成比較グラフ



第77図 愛知県内遺跡出土木製品の器種・樹種組成比較グラフ

第3節 まとめ

本報告書では、三ヶ年度にわたって調査を行った上橋下遺跡01A・B区、02区、03区について整理報告作業を行った。調査によって得られたいくつかの情報について、その意味するところをまとめてみたい。

・空間的特質

各調査区の遺構については、複数面での検出が行われている。この中で、01A区の上面、02区の1面、03区の上面では、中～近世の遺物をともなう遺構が検出されている。自然流路と、それに関連するものと思われる溝状遺構がほとんどで、土坑もわずかに検出されているが、遺構の規模が小さいものや遺物をともなわないものなど、観察される情報が乏しく、掘削時期、掘削理由の判断が明確にできない。プラントオパール分析においては、上位面での試料から稲作を指示する検定結果が得られており、自然流路及び溝状遺構は、水田耕作にともなう利用された可能性が指摘できよう。01A区から検出された流路内の杭は、堰として利用されたものと考えられる。これらに使用された材は、樹皮が残るものや割られたばかりの状態に近いものが多く、6～10年輪前後の丸木で、近隣から伐採したこれらを使用して水量の制御もなされていたことが推定されている。さらにこの周辺からは、犠牲獣、黒書土器、一過性の特殊な使用状況を思わせる椀や小皿も出土している。このことから当該期の祭祀が、この地点で繰り返し実施された可能性が指摘されている。したがって、中～近世の調査地点周辺は、水田耕作地として利用される中で、周辺に存在したと思われる森林から伐採して堰を設け、祭祀にも利用される場とされていた姿が想定できよう。

01A・B区の下面、02区3面、03区下面では、弥生時代中期から古墳時代前期の遺物をともなう遺構が検出されている。最も多いのは方形周溝墓で、明確なものは01B区と03区に見られ、01A区、02区では連続性が途切れる。この空白部は、自然流路が蛇行して展開しているため、主として自然的な要因による流路の改変によって、この時期の遺構が消滅したことが考えられる。したがって、検出された遺構から考えられる、弥生時代中期から古墳時代前期の調査地点周辺は、近隣に所在したと考えられる集落の墓域として、利用されていたことが考えられる。各調査区内において、居住の痕跡がうかがえる住居跡の検出は、01A区下面における弥生時代後期の竪穴住居跡が1例のみである。しかし、02区における土坑（弥生時代後期）で、堆積物から採取した昆虫化石では、調査地点周辺において人為による環境汚染が進行していた傾向が検証されている。プラントオパール分析では、この時期の稲作は、調査地点周辺の一部において、わずかに可能性が考えられる程度の結果である。昆虫化石からは、この時期の稲作害虫は検出されていない。したがって弥生時代後期の調査地点周辺では、自然流路上流部となる北側に人為的な環境汚染が進行するような集落の存在が考えられ、この存在にともなう墓域が展開し、稲作行為は近隣では少なかったことが想定される。ただし、水域環境に関しての昆虫化石の分析では、水生昆虫や地表性歩行虫が多数含まれることが確認されているため、調査地点の周囲に多数の水田が存在した可能性を考えなければならず、分析結果によっては相反する姿が解釈できることになり、これらのことから試料の扱いには注意する必要がある。堆積環境

の分析では、約2000年前に調査地点周辺の平坦化が進み、人為的な活動が可能な環境が整ったと思われるため、弥生時代中期からの遺構・遺物の検出は、こうした自然的な要因に導かれて成立したものと考えられる。

・時期的解釈

今回の調査における出土遺物は、層序において面的に明確な区別は不可能ながら、戦国時代から近世にかけての時期、鎌倉・室町時代、平安時代、弥生時代中期から古墳時代前期と、概ね4時期がみとめられた。

戦国時代以降の遺物では、戦国時代末から近世初頭の時期、近世後期から明治期が少ないながらもとりをみせ、この時代的変革期に一定規模での土地改変によってこれらの遺物が調査地点にもたらされたものなのか、興味深い。中世の遺物は、01A区SX02から出土の灰軸系陶器（山茶碗類）が大半を占め、出土地点が集中するにもかかわらず、時期には鎌倉から室町時代と幅があることから、特定の地点での廃棄が繰り返されてきたことが推察された。平安時代の遺物では、灰軸陶器が少ないながら各調査区にて出土している。これらには一定のまとまりはみとめられないものの、平安時代中期における調査地点周辺を解釈する上で、必要な資料となるであろう。弥生時代中期から古墳時代前期の遺物については、方形周溝墓の溝内から出土しているものが多く、墓城の展開した時期を考える上で欠かせない資料となっている。弥生時代中期の中では、朝日・岩滑式期のものがわずかにみられ、やや間が空いて、古井式期からは古墳時代前期の松河戸式期まで各時期がみとめられるため、本格的な墓城としての利用は、古井式期からのように想定できるのではないだろうか。

・結語

今回の調査では、鹿乗川の改修にともなって、碧海台地と矢作川の間に広がる沖積平野部の中で、南北に二百数十mの掘削作業を行い、そこで検出された遺構・遺物について整理報告した。周辺では、微高地の複雑な展開により、いくつもの遺跡が群を為す状況が確認されている。この沖積平野部には、旧河道が複雑に入り込んでいて、各遺跡の範囲を把握するための障害となっている。弥生時代中期から古墳時代前期にかけての墓城の展開などから、近隣に確実な所在したと判断できる当該期の集落も、その実態は未解明である。また、近世の黎明期、終焉期において、一定のまとまりが見られる遺物については、支配体制の変更にともない、耕作地管理、開発に変化が生じた結果かどうかを探る上で、今後も検討する必要があるであろう。こうした状況をひとつずつ解明するためにも、全容の把握に向けて今後もさらに調査事例の積み重ねが必要であろう。



1 : 2000

第78回 調査地点方形周溝墓位置図

写
真
图
版

写真図版目次

図版1

- (1) 01A区1面全景 (北東から)
- (2) 01A区2面全景 (北東から)

図版2

- (1) 01A区SX02杭検出状況 (東から)
- (2) 01A区SX02杭検出状況 (西から)
- (3) 01A区SX02杭検出状況 (東から)
- (4) 01A区SX02杭検出状況 (南から)
- (5) 01A区SX02犠牲獣 (南から)

図版3

- (1) 01A区SX02墨書土器出土状況 (北から)
- (2) 01A区SX02遺物集中部 (南西から)
- (3) 01A区SX02出土状況 (南から)
- (4) 01A区SX02出土状況 (西から)
- (5) 01A区SB01完掘状況 (南東から)
- (6) 01A区SB01出土状況 (南東から)
- (7) 01A区SZ01周辺 (東から)
- (8) 01A区SD33断面 (西から)

図版4

- (1) 01B区下面全景 (南西から)
- (2) 01B区下面北端部 (上から)
- (3) 01B区下面中央部 (上から)
- (4) 01B区南端部 (上から)
- (5) 01B区SZ01・SZ02 (東から)

図版5

- (1) 01B区SZ03 (南から)
- (2) 01B区SZ03出土状況 (南から)
- (3) 01B区SZ04 (南東から)
- (4) 01B区SZ04出土状況 (南西から)
- (5) 01B区SZ05出土状況 (南西から)
- (6) 01B区SZ06 (北東から)
- (7) 01B区SZ08 (南東から)
- (8) 01B区SZ09 (南から)

図版6

- (1) 02区3面 (西から)
- (2) 02区3面 (西から)
- (3) 02区3面 (南西から)
- (4) 02区3面 (東から)
- (5) 02区3面 (北東から)

図版7

- (1) 02区SZ01南溝出土状況 (南西から)
- (2) 02区SZ01南溝出土状況 (南東から)
- (3) 02区SZ01南溝出土状況 (北東から)
- (4) 02区SZ01東溝出土状況 (南から)
- (5) 02区SK39出土状況 (南東から)
- (6) 02区SZ02南溝出土状況 (南から)
- (7) 02区SZ02南溝出土状況 (西から)
- (8) 02区SZ02南溝出土状況 (北東から)

図版8

- (1) 02区2面 (南西から)
- (2) 02区2面 (南から)
- (3) 02区2面 (西から)
- (4) 02区東壁断面 (北から)
- (5) 02区東壁断面 (北から)

図版9

- (1) 02区1面 (南西から)
- (2) 02区1面 (南東から)
- (3) 02区1面 (南東から)
- (4) 02区SD14 (東から)
- (5) 02区SD09 (北東から)

図版10

- (1) 03区上面全景 (南西から)
- (2) 03区下面全景 (南西から)

図版11

- (1) 03区SZ101全景 (西から)
- (2) 03区SZ101 (北西から)
- (3) 03区SZ101北ベルト (北西から)
- (4) 03区SX101出土状況 (北から)
- (5) 03区SX104・SX105 (西から)
- (6) 03区SK148出土状況 (南東から)
- (7) 03区SK111周辺 (北東から)
- (8) 03区SX101断面 (東から)

図版12

- (1) 03区SX101・SX102 (西から)
- (2) 03区SX101・SX102 (北から)
- (3) 03区SX102出土状況 (南から)
- (4) 03区SD102 (南から)
- (5) 03区SX107～SX109 (北から)
- (6) 03区SX107断面 (南西から)
- (7) 03区SX109南溝断面 (北西から)
- (8) 03区SX110 (東から)

図版13

遺物写真 (1)

図版14

遺物写真 (2)

図版15

遺物写真 (3)

図版16

遺物写真 (4)

図版17

遺物写真 (5)

図版18

遺物写真 (6)

図版19

遺物写真 (7)

図版20

遺物写真 (8)

01A区（空中写真）

図
版
1



(1) A区第1面全景（北東から）



(2) A区第2面全景（北東から）

01A区 (下面)

図版
2



(1) SX02 杭検出状況 (東から)



(2) SX02 杭検出状況 (西から)



(3) SX02 杭検出状況 (東から)



(4) SX02 杭検出状況 (南から)



(5) SX02 犠牲獣 (南から)

01A区 (下面)



(1) SX02 墨書土器出土状況 (北から)



(2) SX02 遺物集中部 (南西から)



(5) SX02 出土状況 (南から)



(4) SX02 出土状況 (西から)



(5) SB01 完態状況 (南東から)



(6) SB01 出土状況 (南東から)



(7) SZ01 周辺 (東から)



(8) SD33 断面 (西から)

01B区 (下面)

図
版
4



(1) 下面全景 (南西から)



(2) 下面北端部分 (上から)



(3) 下面中央部分 (上から)



(4) 下面南端部 (上から)



(5) SZ01・02 (東から)

01B区



(1) SZ03 (南から)



(2) SZ03 出土状況 (南から)



(3) SZ04 (南東から)



(4) SZ04 出土状況 (南西から)



(5) SZ05 出土状況 (南西から)



(6) SZ06 (北東から)



(7) SZ08 (南東から)



(8) SZ09 (南から)

02区

図版
6



(1) 3面 (西から)



(2) SZ01 (西から)



(3) 3面 (南西から)



(4) SZ01 (東から)



(5) 3面 (北東から)

02区



(1) SZ01 南溝出土状況 (南西から)



(2) SZ01 南溝出土状況 (南東から)



(3) SZ01 南溝出土状況 (北東から)



(4) SZ01 東溝出土状況 (南から)



(5) SK39 出土状況 (南東から)



(6) SZ02 南溝出土状況 (南から)



(7) SZ02 出土状況 (西から)



(8) SZ02 南溝出土状況 (北東から)



(1) 2面 (南西から)



(2) 2面 (南から)



(3) 2面 (西から)



(4) 東壁断面 (北から)



(5) 東壁断面 (北から)



(1) 1面 (南西から)



(2) 1面 (南東から)



(3) 1面 (南東から)



(4) SD14 (東から)



(5) SD09 (北東から)

03区



(1) 上面全景 (南西から)



(2) 下面全景 (南西から)

03区



(1) SZ101 全景 (西から)



(2) SZ101 (北西から)



(3) SZ101 北ベルト (北西から)



(4) SX101 出土状況 (北から)



(5) SX104・105 (西から)



(6) SK148 出土状況 (南東から)



(7) SK111 周辺 (北東から)



(8) SX101 断面 (東から)

03区



(1) SX101・102 (西から)



(2) SX101・102 (北から)



(3) SX102 出土状況 (南から)



(4) SD102 (南から)



(5) SX107~109 (北から)



(6) SK107 断面 (南西から)



(7) SX109 南溝断面 (北西から)



(8) SX110 (東から)



遺物写真 (1)



49



53



56



62



63



64



68



65



69



66



73



67



79







169



209



224



172



219



227



184



220



228



189



222



229



194



222



231



195



223



236



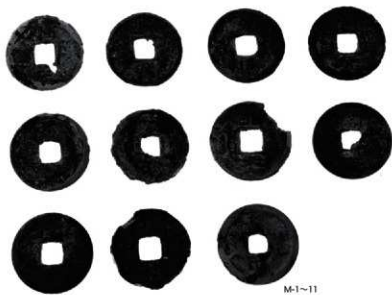
207



223



239





6-1



3



1-1



6-2



4



1-2



7-1



5



8



7-2



26



9



10-1



10-2



16



15-1



14



15-2



12



13



37-1



37-2

報告書抄録

ふりがな	かみほしかいせき
書名	上橋下遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第145集
編集者名	松田 訓・池本正明・宮腰健司・樋上昇・鬼頭剛・森勇一・鈴木茂・植田弥生
編集機関	愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須新田野方802-24 ℡0567-67-4161
発行年月日	西暦 2007年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °	東経 °	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
上橋下遺跡	愛知県安城市	23213	54089	34°55'53"	137°06'19"	01.10.9 ～2002.3.22	5400	農業用の改修に伴う発掘調査
				34°55'50"	137°06'17"	03.1.15 ～2003.3.24		
				34°55'49"	137°06'16"	04.1.7 ～2004.3.31		

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上橋下遺跡	墓域ほか	弥生～近世	方形周溝墓 土坑・溝	弥生・土師器 山茶碗	

文書番号	内容
	発掘届出 (13理セ第77-2号・2001.8.28) 通知 (13教生第36-17号・2001.9.17)
	発掘届出 (14理セ第117号・2002.12.4) 通知 (14教生第72-10号・2003.1.6)
	発掘届出 (15理セ第83号・2003.11.28) 通知 (15教生第72-9号・2004.1.13)
	終了届・保管証・発見届 (13理セ第182号・2002.3.26)
	終了届・保管証・発見届 (14理セ第181号・2003.3.26)
	終了届・保管証・発見届 (15理セ第129号・2004.3.30)
	鑑査結果通知 (13教生第36-17号・2002.6.3)
	鑑査結果通知 (14教生第72-10号・2003.6.2)
	鑑査結果通知 (16教生第135号・2004.4.19)

要約	内容
	本遺跡は、碧海台地東端と矢作川との間に広がる沖積平野に展開する。3ヶ年度に別れた調査では、弥生時代中～後期の方形周溝墓を主体とした遺構が複数検出され、墓域としての利用が考えられることから、当該期に近隣に所在した集落も想定される。本遺跡は、沖積平野に展開する遺跡群に含まれているものと思われる。周辺の集落を含めた実態を解明する上で、貴重な資料として位置づけることができよう。

かのりがわ
鹿乗川流域遺跡群
(高圧線鉄塔移設地点)

例 言

- 1 本書は愛知県安城市板井町・東町・姫小川町・小川町・木戸町地内に所在する、鹿乗川流域遺跡群の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、愛知県土木部（当時）河川課による鹿乗川改修工事に伴う事前調査として、財団法人愛知県埋蔵文化財センター（当時）が、愛知県教育委員会を通じて委託を受けて実施した。調査総面積は800㎡である。
- 3 発掘調査は、平成10年10月～平成11年3月にまで行い、調査面積は100㎡を八ヶ所、合計800㎡を実施した。さらに平成17年度には調査報告書作成のため、整理作業を実施した。
- 4 現地における発掘調査は、愛知県埋蔵文化財センター調査課主査・木下一（現西尾中学校教諭）、同調査研究員・松田 訓（現主任）が担当した。
- 5 調査にあたっては、愛知県土木部河川課、愛知県教育委員会文化財保護室、愛知県埋蔵文化財調査センター、安城市教育委員会をはじめとして、多くの関係諸機関の御協力を得た。
- 6 本書の編集は松田 訓が担当し、執筆分担は第V章第2節を宮腰健司が、それ以外を松田が担当した。
- 7 報告書整理作業については松田 訓が担当し、整理作業には次の方々に参加を得た。
平野昌子（調査研究補助員）、鈴木小百合・野中栄子（整理補助員）
遺物の実測、トレースは、国際航業株式会社に作業を委託した。
- 8 本書掲載の遺構写真は松田が撮影し、遺物写真は金子知久（写真工房 遊）に委託した。
- 9 本書に示す座標数値は、国土交通省告示に定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠し、旧基準「日本測地系」で表記した。また、海拔表記は、東京湾平均海面高度（T.P.）の数値である。
- 10 本書で示す土色名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』による。
- 11 本書中の各遺構名については、冒頭に調査区名を付記した。たとえばB区の土坑005については、「B区SK005」とした。
- 12 遺物の整理番号と登録番号の対象は、表として添付のCDに収録した。
- 13 遺構写真や図面類などの調査記録は、本センターにて保管する。
- 14 出土遺物は、愛知県埋蔵文化財調査センターにて保管する。
- 15 本書の作成にあたり、城ヶ谷和広氏・藤澤良祐氏には出土遺物の時期的解釈において、多くのご指導を得た。さらに本遺跡の報告にあたって、次の諸氏、諸機関にご指導、ご協力をいただいた。記して感謝したい。（五十音順、敬称略）
岡安雅彦 鈴木と江 山崎純男
安城市教育委員会

目 次

第 I 章 調査の経緯	
第 1 節 調査に至る経緯	1
第 2 節 調査の経過	1
第 II 章 遺跡の位置と環境	
第 1 節 遺跡の位置	2
第 2 節 歴史的環境	4
第 III 章 調査の概要	6
第 IV 章 遺構	
第 1 節 基本層序	7
第 2 節 遺構	8
第 V 章 遺物	
第 1 節 概要	26
第 2 節 主要遺構別出土遺物	26
第 VI 章 まとめ	30

图表目次

插图目次

第1图	道跡位置图	2
第2图	道跡周辺地形图	3
第3图	周辺道跡位置图	5
第4图	F区配置图	6
第5图	基本層序概念图	7
第6图	A区(上面)平・断面图	13
第7图	A区(下面)平・断面图	14
第8图	A区S B01平・断面图	15
第9图	A区S X01平・断面图	16
第10图	B区平・断面图	17
第11图	C区平・断面图	18
第12图	D区平・断面图	19
第13图	E区平・断面图	20
第14图	F区(上面)平・断面图	21

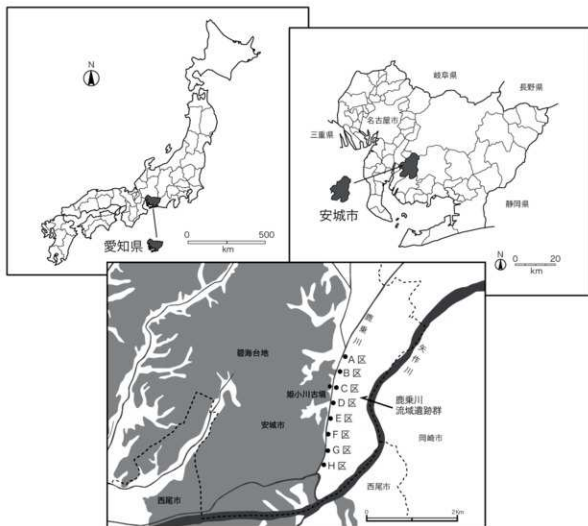
第15图	F区(下面)平・断面图	22
第16图	F区S X01平・断面图	23
第17图	G区平・断面图	24
第18图	H区平・断面图	25
第19图	出土遺物実測图(1)	28
第20图	出土遺物実測图(2)	29
第21图	調査地点周辺图	32

表目次

第1表	調査行程	1
-----	------	---

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置



第1図 遺跡位置図

愛知県は日本列島のほぼ中央、太平洋側に位置し、旧国名では尾張および三河にあたる。鹿乗川流域遺跡群の位置する安城市は、愛知県東部を占める三河地域の西側平野部に位置し、市域は三河湾にそそぐ矢作川の中流域右岸に展開する。市域の境界は、北で豊田市・知立市と、東で岡崎市と、南で碧南市・西尾市と、西で刈谷市・高浜市と接する。

鹿乗川流域遺跡群は、碧海台地東端を流れる鹿乗川流域に所在し、碧海台地と、矢作川右岸との間に形成された沖積平野との境界部に展開する。旧態は水田、畑地等である。調査地付近の現地表高は、北側のA区で標高約8.2m、南側のH区で約7.4mを測る。



第2図 道跡周辺地形図 (国土地理院1/20万地勢図「豊橋」)

第2節 歴史的環境

今回の各調査地点は、弥生時代から近世にいたる遺構・遺物が確認されたが、出土遺物の主体は弥生・古墳時代・古代である。

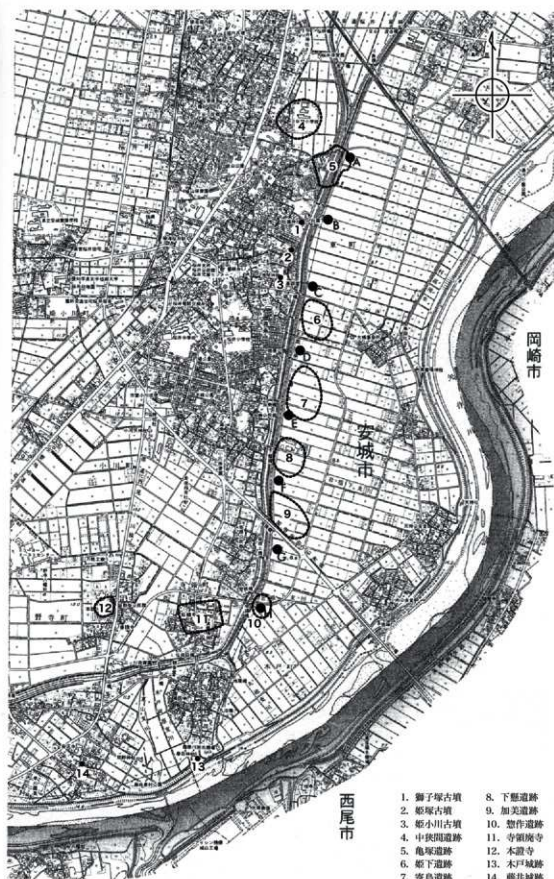
『愛知県遺跡地図(2)-知多・西三河地区-』によれば、安城市内に分布する埋蔵文化財包蔵地は、記念物を除いて191ヶ所が掲載されている。本節では、周辺に分布する遺跡の中で、調査地点が位置する鹿乗川流域、碧海台地東辺の弥生～古墳時代を中心に概観してみる。

安城市内において、弥生時代の遺物が確認できる主要地点は、今回の調査地点A～H区周辺および、A区より約2km北側までの鹿乗川流域に集中する。近年、安城市教育委員会がその連続性をとらえて、A区の西側に隣接する亀塚遺跡を南端とし、その北側約2kmに展開する遺跡群を、鹿乗川流域遺跡群と呼称するようになっている。今回の調査地点は、この遺跡群の南側に展開する。調査地点周辺で確認できる弥生時代の遺跡は、A区の北西約300mの位置に中狭間遺跡、A区を北東辺とする範囲に市指定史跡の亀塚遺跡、D区とE区の間範囲が指定されている寄島遺跡、E区とF区の間範囲が指定されている下懸遺跡、F区とG区の間範囲が指定されている加美遺跡、H区周辺に範囲が指定されている惣作遺跡などである。中狭間遺跡は、昭和54年に小学校建設に伴って調査が行われ、弥生時代中期、古墳時代前期を中心とする土器が多く出土しており、掘立柱建物と思われる柱穴も確認されている。亀塚遺跡は、昭和48・52年に調査が行われ、52年の調査地点では人面文土器が出土している。加美遺跡は、昭和63年に当センターが調査を行い、弥生時代中期の方形周溝墓、古墳～平安時代と時期区分される竪穴住居が報告されている。下懸遺跡は平成12年度、惣作遺跡は平成16年度に本センターが調査を行い現在整理中であるが、弥生時代中期から古墳時代前期を主体とする遺構、遺物が検出されている。

古墳時代に入ると、調査地点西側の碧海台地縁辺部には、桜井古墳群が形成される。B区西側には市指定史跡の獅子塚古墳、B区とC区の間西側には市指定史跡の姫塚古墳、C区の西側には国指定史跡の姫小川古墳などが、台地縁辺に並存する。獅子塚古墳は、当初、円墳として認識されたが、現在では地籍図の区画などから、前方後円墳の後円部が改変を受けつつ残存しているととらえられている。姫塚古墳は、現況から円墳または方墳と考えられている。すぐ南には、わずかな高まりが残り、これを前方部の残がいとしてとらえる考えも示されたが、解明には到っていない。姫小川古墳は、古墳時代前期の前方後円墳である。この位置から約1.5km北方には、三河地域最大級の二子古墳があり、昭和2年に両墳とも国史跡に指定されている。

古代では、奈良時代の瓦片が出土する寺領庵寺が、碧海台地の南東辺に築かれる。伽藍配置の一部も確認されているが、古代寺院としての実態は未解明である。

中世に到ると、西三河地域には本願寺下の寺院が勢力を拡大して、支配体制を脅かすまでになる。この中心的な存在の一つであった本證寺が、碧海台地南東辺よりやや内陸に入った地に開かれる。さらに、台地縁辺部には、木戸城、藤井城といった中世城館が築かれるようになる。いずれも居館的な規模で、小豪族群像による支配を物語るっており、混とんとした時代を経て、近世の幕藩体制に組み込まれたことを示している。



第3図 周辺遺跡分布図 (1/20000)

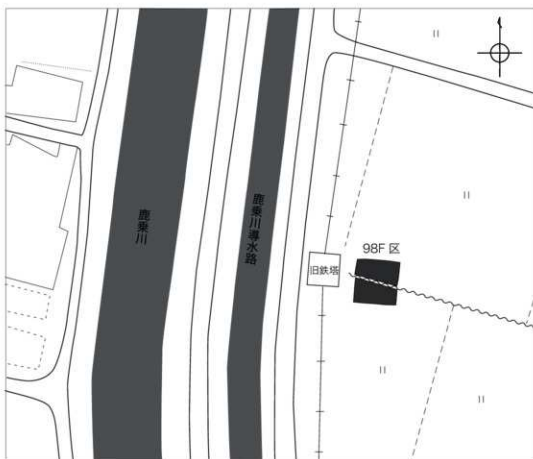
第III章 調査の概要

調査区は、二級河川鹿乗川の改修工事に伴って、高压線鉄塔を移設する予定地8ヶ所に設定した。したがって、各調査区は鉄塔基部に合わせられたため、一辺約10mの正方形で、北側から南に向かって、A区～H区とし、周辺環境と調整しながら調査を進めた。

調査地点は、沖積低地を流れる河川脇で、周囲を含めて旧態は水田である。このため、水稲耕作時には湧水層が上がって調査が困難であるため、発掘調査は年度下半期に実施することとなった。

各調査区内の表土除去は、機械（バックホウ）掘削によって行った。排土は、その調査区に隣接する水田にビニールシートを敷いて仮置きし、調査終了後にこれを埋め戻した。

各調査区では、遺物包含層掘削から、遺構検出作業に入り、遺構掘削、写真撮影、測量を行い、最終的に基盤層を確認して、調査を終了した。



第4図 調査区配図

第IV章 遺構

第1節 基本層序

鹿乗川流域における基本層序を概観すると、第5図のような状況がみてとれる。各調査地点は、碧海台地の東側縁辺部で、現況はいずれも水田である。A～H区間は、南北に約2.4kmあるが、現水田面を比較すると、最も北側のA区は標高8.2mを測り、最も南側のH区は7.4mを測る。A～H区の比高は、0.8mの差をもつ。両区間の傾斜は、0.03%である。

A～H区間は、碧海台地の東辺である。この台地縁辺部は、地点によって張り出し部や切れ込み部があり、一様ではない。したがって、各調査区の層序は、台地縁辺のどの部分にかかっているかによって、隣り合うものでも異なる様相が見られ、各区に共通した堆積状況はとらえられなかった。個別の層序は調査区ごとに図示するが、ここでは、全体的な様相を概略的に説明する。

水田耕作土の下には、淡色のシルト層が0.2～0.5m堆積する。その下には、灰色シルトなどが堆積し、その直上を目安として機械掘削を行い、この時期を面的にとらえるために検出作業を試みた。その結果、A・F区では、わずかながらこの層にて遺構を検出した。近世の陶器片がわずかに出土したが、検出作業中の遺構外資料であり、時期決定資料として扱えるものではなかった。この灰色シルトは、炭化物を含むもの、極細粒砂の混入にて斑土状になるものがみられ、少量の弥生時代後期から古墳時代前期の遺物が確認された。さらにこの下位には、基盤層として扱った灰白色シルト、灰白色極細粒砂が確認できた。台地の張り出し部にかかる調査区では、水田造成時に旧態は削平されたものと思われ、水田耕作土直下にて、灰オリーブ色のシルトや粗粒砂が観察された。低地にあたる部分では、粘質土、粘土が淡色のシルト層下で観察できた。したがって調査対象は、少量の遺物を含む灰色シルト層を主体とした。



第5図 基本層序概念図

第2節 遺構

A区

桜井町大橋に位置し、市指定史跡である亀塚遺跡の指定された範囲北東隅付近に位置する。調査区は、鉄塔移設予定地点に一辺約10mの正方形で設定され、水田耕作土直下のオリブ灰色シルト層を取り除くと、住居跡、溝などの遺構が検出（上面）された。さらに、この直下の灰オリブ色極細粒砂を取り除くと、土坑が検出（下面）された。検出された遺構は、竪穴住居跡1、土坑21、溝3、周溝状の掘り込み1などである。上・下面にて出土した遺構にともなう遺物を比較すると、いずれも弥生時代中期後葉の特徴がみられ、明確な時期差は認められなかった。

SB01 調査区上面南西側に位置する。平面形態は東西方向の楕円形を呈し、西側は調査区外に延び、検出高は7.7mを測る。下端における南北の短軸は、2.2m、残存する深さは0.25mを測る。重複関係では、S D02・03を切っている。残存平面形態における長軸方位は、N-75°-Eを示す。壁溝は、北東隅を除いて検出された。埋土は灰白色細粒砂を基調とし、遺物は弥生時代中期後葉の壺・甕片がわずかに出土している。支柱穴は明確に認められないものの、平面形態、壁溝の検出、斑土状粘土の下部、炭化物を多く含む上層などから、古井式期の竪穴住居跡である可能性が考えられる。

SK04 調査区上面中央に位置する。平面形態は不整形楕円形を呈す土坑で、検出高は7.7mを測り、長径1.7m、短径0.95m、深さ0.1mを測る。埋土はオリブ灰色シルトを基調とし、遺物は弥生時代中期後葉の土器細片がわずかに出土している。

SK106 調査区下面南側に位置する。平面形態が不整形の土坑で、検出高は7.4mを測り、南北・東西径は共に1.1m、深さ0.1mを測る。埋土はオリブ灰色シルトを基調とし、遺物は弥生時代中期後葉の壺片が出土している。

SD03 調査区上面南西側に位置する。断面形態が船底形の溝で、検出高は7.7mを測る。幅は0.95m、検出長は5.95m、深さは0.4mを測る。重複関係では、S B01、S D02に切られている。平面形における主軸の方向は、N-35°-Wを示す。埋土は灰色シルトを基調とし、遺物は弥生時代中期後葉の土器細片がわずかに出土している。

SX01 調査区上面南東側に位置する。溝が方形にめぐり、北・東隅は連結しないで切れている。断面形態は船底形を呈し、検出高は7.9mを測る。検出幅は最大で1.3mを測り、対面する溝の内側下端間はどちらも3.0m、深さは0.5mを測る。東隅の切れ口脇、北側の溝内から、遺物が一定のまとまりで出土している。東・南側の溝からは弥生時代末～古墳時代前期、北側の溝からは弥生時代中期末～後期初頭の遺物が出土しており、それぞれ別遺構の可能性も考えられる。

A区では、S B01とS X01が隣接して検出されたが、時間的にはS B01の方がやや先行するものと思われる。仮にそれぞれが住居跡、墓跡であったとするならば、この地点の空間的性格に変化があったことがうかがえる。亀塚遺跡の範囲は明確ではないが、面的に連なることがなくとも、時期、位置からみて、関連する空間として捉えられるであろう。

B区

東町秋葉下に位置し、現鹿乗川をはきんで、市指定史跡である獅子塚古墳の東対岸付近に位置する。

中央には東西方向に通された水路があり、これを残して他の調査区と同様に、一辺約10mの正方形で調査区が設定された。B区では、水田耕作土直下の灰オリーブ色シルト層を取り除くと、灰オリーブ色粗粒砂の基盤層が検出された。この砂層は、北東側から南西に向かってゆるやかに下っていて、調査区内では約0.3mの標高差が認められ、遺構は認められなかった。遺物は、弥生時代後期から古墳時代前期の土器細片、須恵器片、18～19世紀の陶磁器片が、基盤層直上でわずかに出土した。

C区

姫小川町姫向田に位置し、現施乗川をはきんで、国指定史跡である姫小川古墳の東対岸付近に位置する。中央には東西方向に通された水路があり、これを残して他の調査区と同様に、一辺約10mの正方形で調査区が設定された。C区では、水田耕作土直下のオリーブ灰・灰白色シルト層を取り除くと、灰色の砂層が検出された。この砂層は、北西から南東に向かって急激に下っていて、約0.8mの標高差が認められた。遺構は、B区と同様に認められなかった。遺物は、古墳時代の土器細片、18～19世紀の陶磁器片がわずかに出土している。

D区

小川町寄島に位置し、北側には県遺跡分布地図記載の姫下遺跡、南側には同寄島遺跡が確認されており、この両遺跡中間付近に位置する。設定された調査区は、中央に東西方向の水路があり、これを残して他の調査区と同様に、一辺約10mの正方形で調査区が設定された。D区では、水田耕作土直下の灰白色シルト、明オリーブ灰色シルト層を取り除くと、浅い溝、土坑などの遺構が検出された。検出された遺構は、土坑12、溝4、不明な掘り込み5などである。遺物は、弥生時代後期の甕、甍片、土器細片などが出土している。

SK06 調査区北側に位置する。平面形態は不整楕円形を呈す土坑で、検出高は7.0mを測り、長径1.3m、短径0.8m、深さ0.2mを測る。埋土は炭化物・焼土を多く含む灰色シルトを基調とし、遺物は弥生時代後期の甍片が出土している。

SK08 調査区東側に位置する。平面形態は不整楕円形を呈す土坑で、検出高は7.0mを測り、長径1.4m、短径0.7m、深さ0.4mを測る。埋土は灰色シルトを基調とし、遺物は弥生時代後期の甍片が出土している。

SK11 調査区南側に位置する。平面形態は不整楕円形を呈す土坑で、検出高は6.8mを測り、長径1.4m、短径1.3m、深さ0.1mを測る。重複関係では、SK12に切られている。埋土は灰色シルトを基調とし、遺物はガラス小玉が出土している。

SK12 調査区南側に位置する。平面形態は不整楕円形を呈す土坑で、検出高は6.8mを測り、長径1.5m、短径1.1m、深さ0.1mを測る。重複関係では、SK11を切っている。埋土は灰色シルトを基調とし、遺物はガラス小玉が出土している。

SD02 調査区北東側に位置する。断面形態が船底形の溝で、検出高は7.0mを測る。幅は1.0m、検出長は5.1m、深さは0.2mを測る。重複関係では、SX02に切られている。平面形における主軸の方向は、N-76°-Eを示す。埋土は灰色シルトを基調とし、遺物は弥生時代後期の土器細片がわずかに出土している。

D区の出土遺物を観察すると、弥生時代から古墳時代前期の土器・土器細片が主体であった。北

側の堰下遺跡は、昭和48年の調査などから平安時代が主体との所見が得られ、南側の寄島遺跡は泉遺跡分布地図によれば弥生時代が主体とされている。この地点が、南北に隣接する堰下・寄島遺跡のどちらに帰属するのかを考えると、現況では南側の寄島遺跡との関連性が強いように思われる。D区で検出された土坑、溝などは、鹿乗川の河川改修工事にもなっており継続されている今後の調査成果と照し、どのような空間的特質を意味するのかを判断する必要があるであろう。

E区

小川町上太田に位置し、北側には泉遺跡分布地図記載の寄島遺跡、南側には同下懸遺跡が確認されており、この両遺跡間では寄島遺跡の南縁付近に位置する。設定された調査区は、中央に東西方向の水路があり、これを残して他の調査区と同様に、一辺約10mの正方形で調査区が設定された。E区では、水田耕作土直下の灰白色シルト、オリブ灰色シルト層などを取り除くと、灰色細粒砂層を掘り込む浅い溝、土坑などの遺構が検出された。検出された遺構は、土坑26、溝4、円形小穴6などである。遺物は、弥生時代後期から古墳時代前期の土器、土器器細片などが出土している。

SK26 調査区西側に位置する。平面形態は楕円形を呈する土坑と思われ、検出高は7.0mを測り、検出長1.7m、短径0.4m、深さ0.2mを測る。埋土は緑灰色シルトを基調とし、遺物は弥生時代後期の壺が完形で出土している。

SD01 調査区北側中央に位置する。断面形態が船底形の南北方向にのびる溝で、東側断面はゆるやかな傾斜から角度を変えて落ちる肩をもつ。検出高は7.0mを測る。幅は1.2m、検出長は3.5m、深さは0.35mを測る。重複関係では、SK04、SD02に切られている。平面形における主軸の方向は、N-32°-Eを示す。埋土はオリブ灰色シルトを基調とし、遺物は土器細片がわずかに出土している。

SD02 調査区北側中央に位置する。断面形態が船底形の南北方向にのびる溝で、検出高は6.9mを測る。幅は0.5m、検出長は10.6m、深さは0.15mを測る。重複関係では、SD01を切り、SK03・05・19などに切られている。平面形における主軸は、弱い蛇行を繰り返す。埋土は緑灰色シルトを基調とし、遺物は土器細片がわずかに出土している。

SD03 調査区北側東寄りに位置する。断面形態が船底形の溝で、検出高は6.9mを測る。幅は0.65m、検出長は9.0m、深さは0.3mを測る。重複関係では、SK09に切られている。平面形における主軸の方向は、N-37°-Eを示す。埋土は緑灰色シルトを基調とし、遺物は土器細片がわずかに出土している。

E区で検出した土坑は、遺物を含まない深さ0.1m未満のものがほとんどである。わずかに出土した遺物は、いずれも器面の摩耗が激しかった。検出したこれらの状況からE区という地点を考えると、集落として機能した場所とは考えにくいように思われる。

F区

小川町向田に位置し、北側には泉遺跡分布地図記載の下懸遺跡、南側には同加美遺跡が確認されており、この両遺跡中間付近や北側に位置する。設定された調査区は、中央に東西方向の水路があり、これを残して他の調査区と同様に、一辺約10mの正方形で調査区が設定された。F区では、水田耕作土直下の浅黄色シルト層を取り除くと、土坑がわずかに検出（上面）された。さらに、この直下の灰色シルト層を取り除くと、緑灰色シルト層の面にて土坑、溝などが検出（下面）された。検出され

た遺構は、土坑16、溝7、不明な掘り込み3、円形小穴8などである。遺物は、弥生時代から古墳時代の土器片、土師器片などが出土している。

SK112 調査東側に位置する。土坑と思われるが、現水路下と調査区外にかかるため、平面形態は把握できなかった。検出高は6.7mを測り、深さ0.1mを測る。埋土は灰色シルトを基調とし、遺物は弥生時代後期の壺片が出土している。

SD101 調査区西側に位置する。断面形態が船底形の溝で、検出高は6.8mを測る。幅は1.7m、深さは0.15mを測る。重複関係では、S X 102を切っている。平面形は、南北方向の両端が調査区西外側にのびる「コ」の字状を呈する。埋土は、炭化物を含む灰色シルトを基調とし、下層は斑土状の灰オリブ色シルトであった。遺物は土器細片がわずかに出土している。

SD106 調査区北側東寄りに位置する。断面形態が船底形の溝で、検出高は6.8mを測る。幅は0.9m、検出長は2.3m、深さは0.1mを測る。重複関係では、直交するS D 107西端を切っている。平面形における主軸の方向は、N-37°-Wを示す。埋土は灰色シルトを基調とし、遺物は弥生時代後期の甕が出土している。

SX101 調査南側東寄りに位置する。平面形態は、内径2.3mの方障を残して幅約1.2mの溝が方形に回っており、この溝の断面形態は深さ0.25mの船底形を呈する。検出高は6.8mを測る。平面形における主軸の方向は、N-10°-Wを示す。埋土はオリブ灰色シルトを基調とし、遺物は、遺存度が良好な弥生時代末期の壺・甕が、溝の南西角内側肩部より出土している。本遺構では、埋土に炭化物等が観察されず、柱穴と思われるものもみられないため、上部構造をもつ可能性は低いと思われる。遺物の出土状況を考慮すると、主体部未検出ながら、溝が全周するタイプの方形周溝墓とも考えられよう。

SX102 調査西側南寄りに位置する。検出部分の平面形態は、東西方向に長軸をもつ隅丸長方形と観察し得るが、西側部分が調査区外にかかるため、正確な形態は把握できなかった。検出高は6.7mを測り、深さ0.1mを測る。埋土は炭化した木片を含むオリブ灰色シルトを基調とし、遺物は弥生時代後期の壺片が出土している。

F区の出土遺物を観察すると、弥生時代後期から古墳時代前期の土器・土師器細片が主体であった。北側の下懸遺跡は、本センターによる平成12年の調査によれば弥生時代が主体とされ、南側の加美遺跡は、本センターによる昭和63年の調査などから古墳時代～中世が主体との所見が得られている。この地点が、南北に隣接する下懸・加美遺跡のどちらに属するのかを考えると、時間的には北側の下懸遺跡との関連性が強いように思われる。S D 101、S D 106とS D 107、S X 101は、方形周溝墓の可能性も考えられるため、下懸遺跡の墓域的な空間が想定できるかもしれない。F区で検出された土坑、溝などは、報告書刊行に向けて現在整理中の下懸遺跡調査成果と照合し、更なる判断をする必要があるであろう。

G区

小川町岩根下に位置し、北側には県道跡分布地図記載の加美遺跡、300mほど離れた南側には同惣作遺跡が確認されており、この両遺跡では加美遺跡寄りに位置する。設定された調査区は、中央に東西方向の水路があり、これを残して他の調査区と同様に、一辺約10mの正方形で調査区が設定された。

G区では、水田耕作土直下の灰白色シルト、灰オリーブ色シルト、灰色粘質土層を取り除くと、浅く細い溝、小規模な土坑などの遺構が検出された。検出された遺構は、土坑13、溝1、不明な掘り込み2などである。遺物は、土師器、須恵器細片、近世陶器などがわずかに出土しているが、遺構にともなうものや明瞭な遺物包含層は確認できず、二次的な混入品と思われる。確認された遺構も、近世以降の掘り込みと思われる。この地点は、北側の加美遺跡に近い位置であるが、粘質土が堆積する状況や、検出された遺構、遺物の違いから、空間的なつながりは薄いものと思われる。

H区

木戸町惣作に位置し、県遺跡分布地図記載の惣作遺跡範囲内に位置する。設定された調査区は、他の調査区と同様に、一辺約10mの正方形で調査区が設定された。H区では、水田耕作土直下の灰白色シルト、灰オリーブ色シルト、灰色シルト層を取り除くと、溝、土坑などの遺構が検出された。検出された遺構は、北辺に集中していて、土坑4、溝2、不明な掘り込み2などである。遺物は、土師器、須恵器細片、近世陶器などがわずかに出土している

SK03 調査北側中央に位置する。土坑と思われるが、調査区外にかかるため、南端部の不整形円形状以外は把握できなかった。検出高は6.8mを測り、深さ0.1mを測る。埋土は斑土状を呈するオリーブ灰色シルトを基調とし、遺物は弥生時代のものと思われる石鏃が出土している。

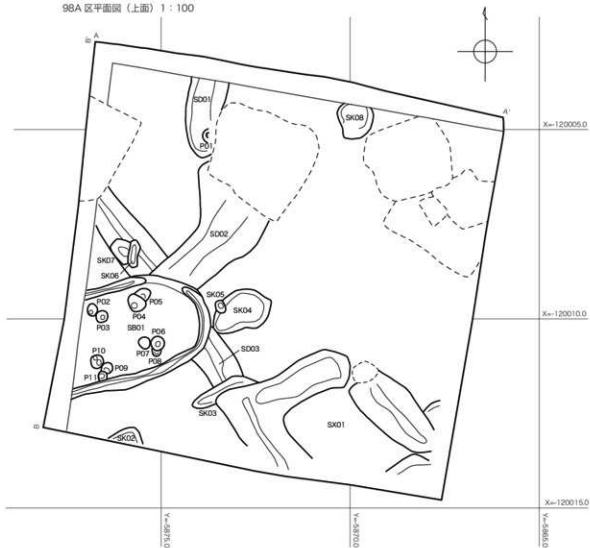
SK04 調査北東隅に位置する。土坑と思われるが、調査区外にかかりトレンチ内と壁面のみで確認できたため、平面形態は把握できなかった。検出高は6.8mを測り、深さ0.4mを測る。重複関係では、SK02に切られている。埋土は灰白色シルトを基調とし、遺物は弥生時代中期の壺片が出土している。

SD02 調査区北側西寄りに位置する。断面形態が船底形の溝で、検出高は6.7mを測る。幅は0.8m、検出長は4.0m、深さは0.35mを測る。重複関係では、直交するSK01に切られている。平面形における主軸の方向は、N-48°-Wを示す。埋土は灰色シルトを基調とし、遺物は条痕がみとめられる壺片が出土している。

SX01 調査区北側中央に位置する。浅い溝状遺構で、検出高は6.8mを測る。幅は0.9m、深さは0.1mを測る。重複関係では、SD01、SX02を切っている。調査区北側から南に約2mのびたものが、西に方向を変えて約2mの距離で端部となる。埋土は斑土状のオリーブ灰色シルトを基調とし、遺物は弥生時代後期の壺が出土している。

H区の出土遺物を観察すると、弥生時代中期と思われるものが遺構にともなって出土している。8地点の調査区中で、H区のみが分布地図記載の遺跡範囲内に位置する。遺構検出面は、北側のF・G区よりも高く、水田整備などで微高地上部が削平された可能性もうかがえる。本地点の北側では、平成16年度に惣作遺跡の調査が行われている。H区北側に集中する遺構は、惣作遺跡内のどのような位置にあたるのか、その調査成果と照合し、更なる判断をする必要があるであろう。

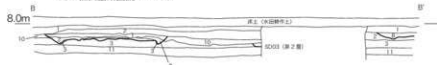
98A区平面図(上面) 1:100



98A区北壁断面図 1:100



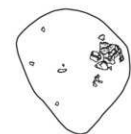
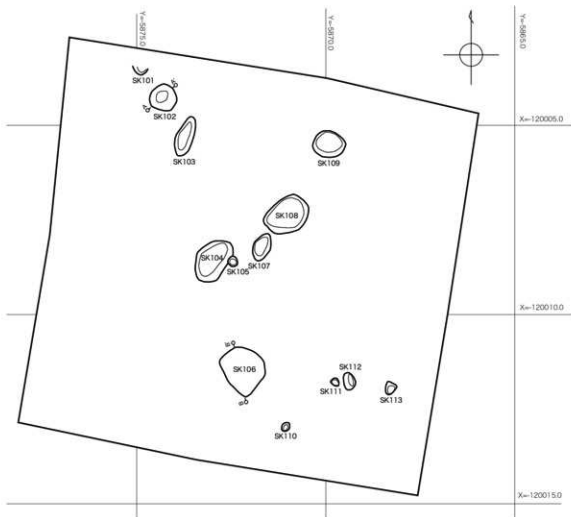
98A区西壁断面図 1:100



- 1 10YR6/2 オリーブ灰色シルト
- 2 7.5Y7/3 赤褐色シルト
- 3 7.5Y6/2 灰オリーブ色極細粒砂
- 4 10YR6/1 灰色シルト
- 5 7.5Y7/2 灰白色シルト
- 6 2.5GY6/1 オリーブ灰色シルト
- 7 2.5GY7/1 暗オリーブ灰色シルト
- 8 2.5Y6/3 に近い褐色シルト
- 9 2.5Y7/4 赤褐色シルト
- 10 7.5Y6/1 灰色粘質土
- 11 2.5Y7/2 灰色シルト

第6図 98A区(上面)平・断面図

98A区平面図（下面） 1 : 100



98A区 SK106 出土状態図 1 : 40

98A区 SK102 1 : 100



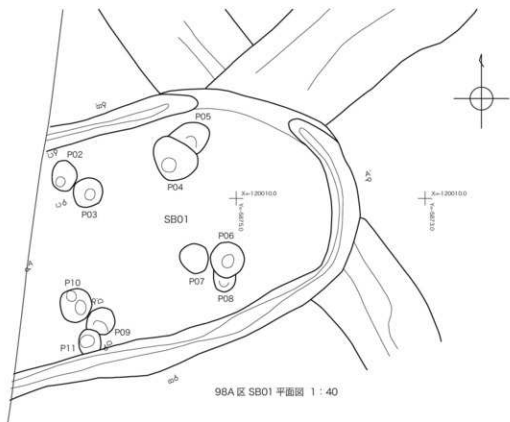
- 1 5Y7/1 灰白色シルト
- 2 5Y6/1 灰色シルト
- 3 2.5Y7/3 淡黄色シルト

98A区 SK106 1 : 100



- 1 7.5Y4/1 灰色シルト
- 2 5Y6/1 灰色シルト
- 3 5Y7/1 灰白色シルト

第7図 98A区（下面）平・断面図

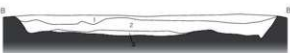


98A区 SB01 1:40

8.0m



8.0m



- 1 7.5V6/1 灰色シルト (炭化物を多く含む)
- 2 10V7/2 灰白色細粒砂
- 3 10V7/ 灰白色粘質土 (粘床?)

98A区 P02 1:40

8.0m



- 1 5V7/2 灰白色シルト
- 2 5V6/1 灰色シルト

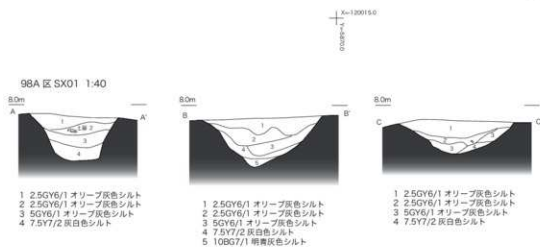
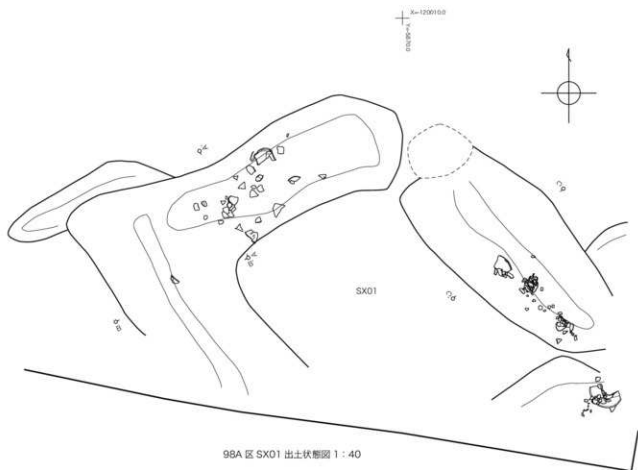
98A区 P09 1:40

8.0m



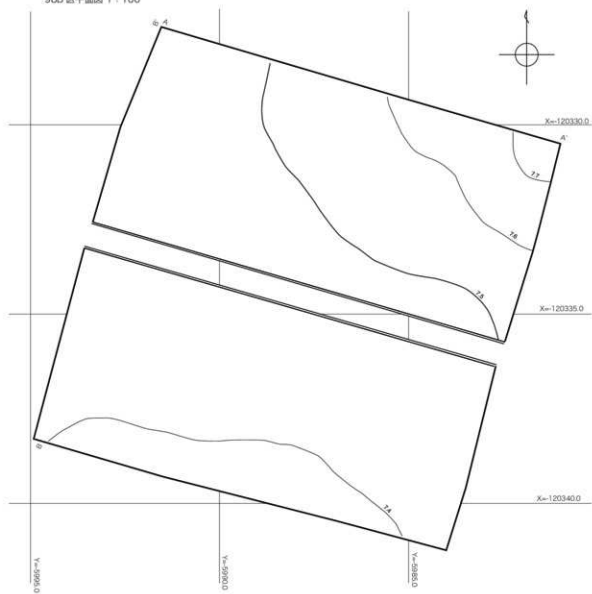
- 1 5V7/2 灰白色シルト
- 2 5V6/1 灰色シルト

第8図 98A区 SB01 平・断面図



第9図 98A区 SX01 平・断面図

98B区平面図 1:100



98B区北壁断面図 1:100

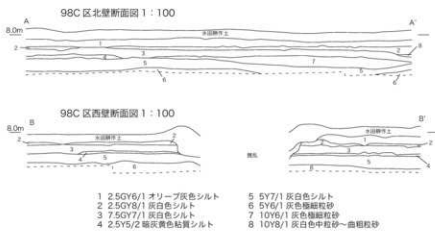
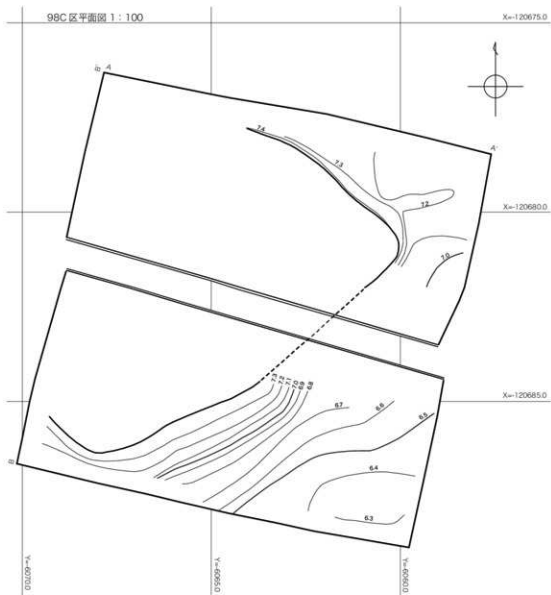


98B区西壁断面図 1:100



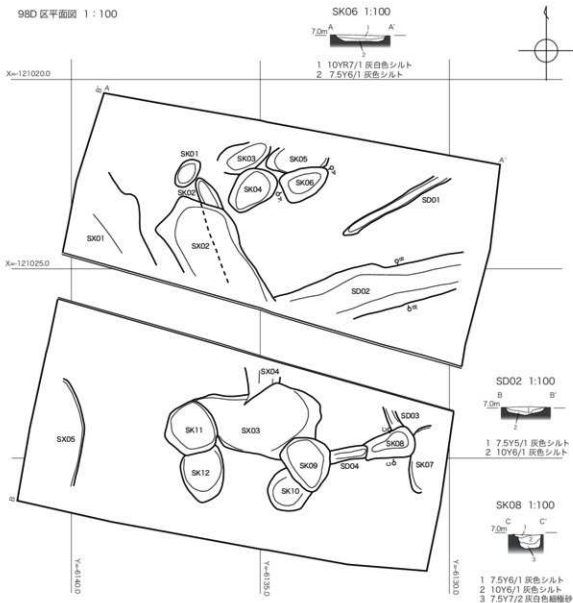
- 1 7.5V6/2 灰オリーブ色シルト
- 2 5V6/2 灰オリーブ色粗粒砂

第10図 98B区 平・断面図

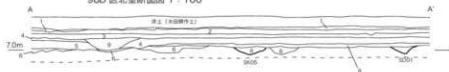


第11図 98C区 平・断面図

98D区平面図 1:100



98D区北壁断面図 1:100



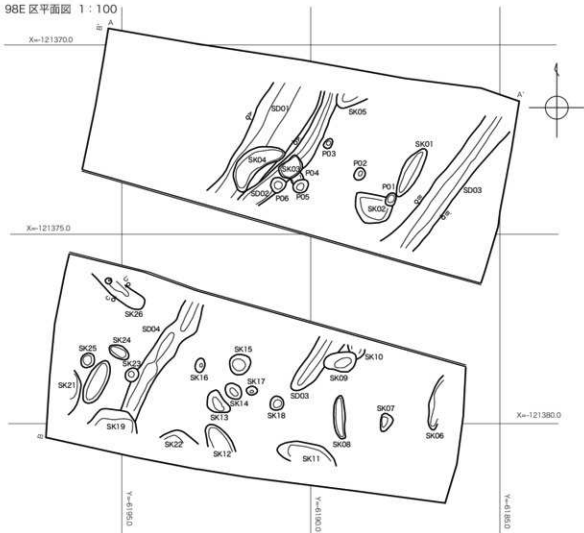
98D区西壁断面図 1:100



- | | |
|---------------------|----------------------|
| 1 7.5Y7/2 灰白色シルト | 7 2.5GY6/1 オリーブ灰色粘質土 |
| 2 10Y7/1 灰白色シルト | 8 5Y6/2 長オリーブ色シルト |
| 3 5GY7/1 明オリーブ灰色シルト | 9 5Y7/2 灰白色シルト |
| 4 7.5Y7/2 灰白色シルト | 10 10Y6/1 灰色シルト |
| 5 7.5Y7/1 灰色粘質土 | 11 7.5Y6/1 灰色シルト |
| 6 5Y6/1 灰色シルト | |

第12図 98D区 平・断面図

98E区平面図 1:100



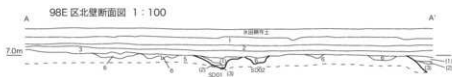
- 1 2.5GY6/1 オリーブ灰色シルト
- 2 7.5GY6/1 緑灰色シルト
- 3 7.5GY5/1 緑灰色シルト



- 1 2.5GY6/1 オリーブ灰色シルト
- 2 7.5GY6/1 緑灰色シルト
- 3 7.5GY5/1 緑灰色シルト



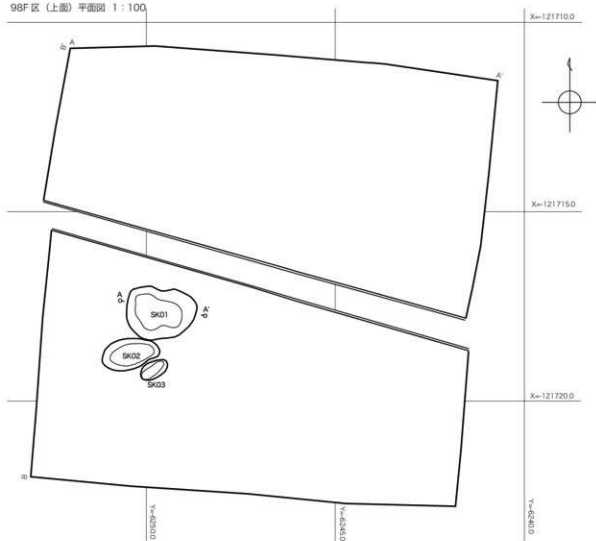
- 1 7.5GY6/1 緑灰色シルト
- 2 2.5GY6/1 オリーブ灰色シルト



- 1 10Y7/1 灰白色シルト
- 2 5Y6/2 灰オリーブ色シルト
- 3 5GY6/1 オリーブ灰色シルト
- 4 2.5GY6/1 オリーブ灰色シルト
- 5 10Y6/1 灰色細粒砂
- 6 7.5GY6/1 緑灰色シルト

第13図 98E区 平・断面図

98F区(上面)平面図 1:100



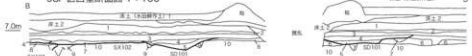
98F区SK01 1:100



98F区北壁断面図 1:100



98F区西壁断面図 1:100

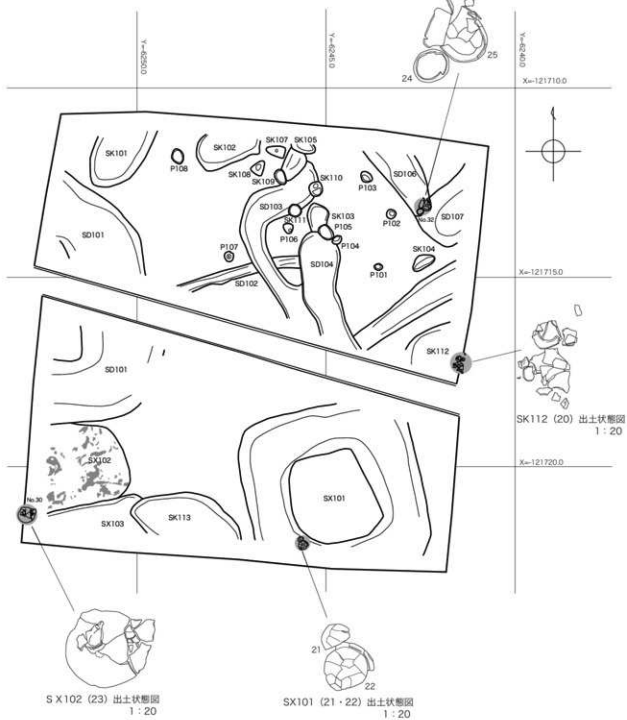


- | | | |
|-------------------------|----------------------|--------------------|
| 1 7.5Y7/3 淡黄色シルト | 6 7.5Y5/1 灰色シルト | 11 7.5GY6/1 緑灰色シルト |
| 2 10Y6/2 オリーブ灰色シルト | 7 2.5GY6/1 オリーブ灰色シルト | 12 5Y8/1 灰白色細粒砂 |
| 3 10Y6/1 灰色シルト | 8 5GY6/1 オリーブ灰色シルト | 13 5Y8/4 淡黄色細粒砂 |
| 4 7.5Y6/1 灰色シルト(炭化物を含む) | 9 5Y7/1 灰白色極細粒砂 | 14 10Y5/1 灰色シルト |
| 5 7.5Y6/2 灰オリーブ色シルト(黄土) | 10 7.5Y7/1 灰白色極細粒砂 | |

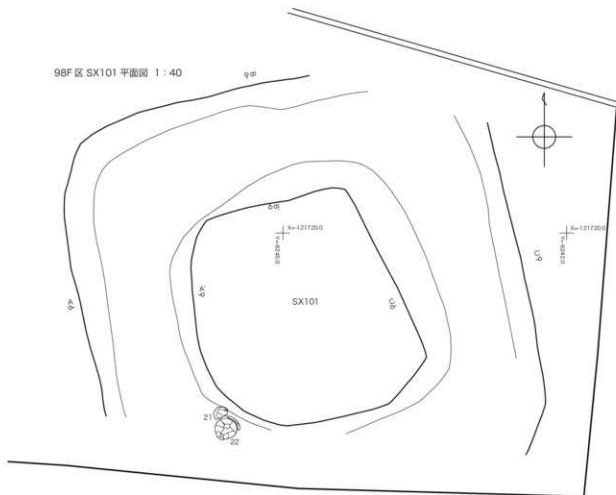
第14図 98F区(上面)平・断面図

98F区(下面)平面图 1:100

SD106 (24-25) 出土状图 1:20



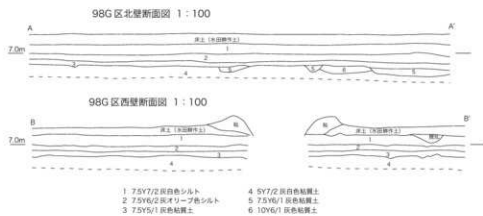
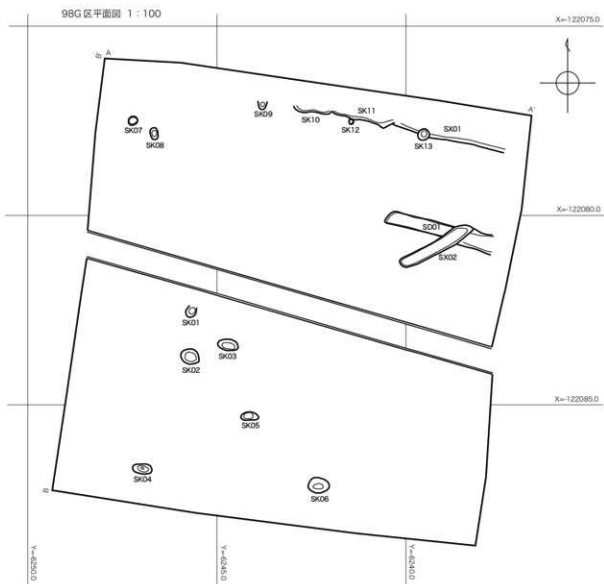
第15图 98F区(下面) 平面·出土状图



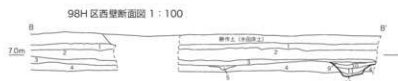
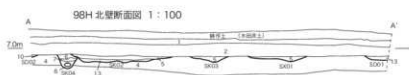
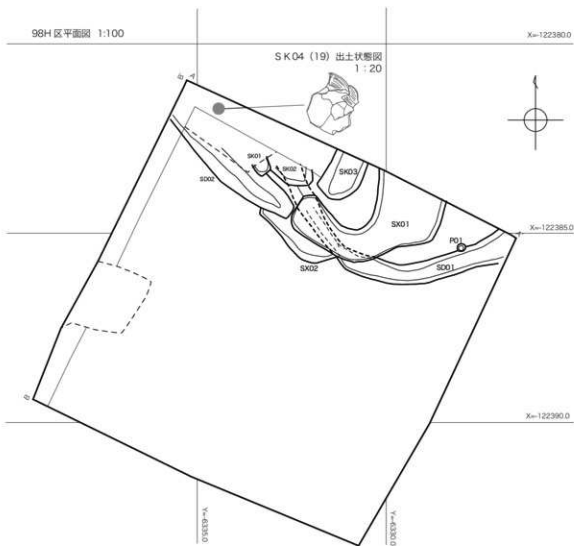
98F区 SX101 1:40



第16図 98F区 SX101 平・断面図



第17図 98G区 平・断面図



- | | |
|---------------------------|---------------------------------|
| 1 7.5V7/2 灰白色シルト | 8 2.5Y8/1 灰白色シルト |
| 2 7.5V6/2 灰オリーブ色シルト | 9 5Y7/3 黄褐色シルト |
| 3 7.5V6/1 灰色シルト | 10 7.5Y5/1 灰色シルト |
| 4 5Y6/1 灰色シルト | 11 10Y6/1 灰色シルト (6層より明るい) |
| 5 2.5G/6/1 オリーブ灰色シルト (泥土) | 12 10Y7/1 灰白色シルト (褐色土ブロックを多く含む) |
| 6 10Y6/1 灰色シルト (炭化物が混じる) | 13 7.5Y5/1 灰色シルト (10層より暗い泥土) |
| 7 7.5Y7/1 灰白色シルト | |

第18図 98H区 平・断面図

第V章 遺物

第1節 概要

今回の鹿乗川流域遺跡における調査では、A・F区において一定量の遺物が出土しているが、その他の調査区では出土遺物が少ない結果となった。原因として、A・F区は沖積平野に張り出した微高地であったのに対して、その他の調査区は沖積平野の微高地から外れ、集落など人為的な手が加わりにくい場所であったことが考えられる。

出土遺物の時期的比率では、弥生時代中～後期の土器が多くを占め、古墳時代前期の土師器、平安時代の灰軸陶器が少ないながら検出され、中世～近世にかけての陶磁器等は、細片程度であった。

弥生時代から古墳時代前期の遺物がみとめられた遺構は、竪穴住居、土坑、溝、方形周溝墓などである。器種は、壺・甕を主体とし、少ないながら高坏もみとめられた。

平安時代の遺物では、灰軸陶器が遺構外からわずかに検出され、時期的には平安時代中期にあたり、器種は甕がみとめられた。

中世から近世にかけての遺物は、溝状の落ち込みや遺構外からわずかに検出される程度で、まともに出土する例は見られなかった。

ここでは、時期の把握がある程度可能な遺物について、遺構ごとのまとまりを考慮しながら時期別に説明する。

第2節 時期別出土遺物

・弥生時代から古墳時代

98A区SZ01 1～3は北溝、4は東溝、5は東と南溝に分かれて出土している。1・2・5は凹線文系土器。1は短頸壺で、短く屈曲する口縁端面にはイタ連続刺突が施されている。体部には頸部と最大径やや上位に横位のタキがみられ、その後ハケ調整されている。内面はハケ調整。2は水平に延びる鈎状の口縁をもつ高坏で、鈎部外面にイタによる凹線が巡る。杯部は外面がケズリ成形・調整後ハケ調整され、内面はハケ調整されている。5は太頸壺口縁部で、内湾して外下方に延びる端部の外面には羽状のイタ刺突→竹管連続刺突が、内面には扇形文・竹管刺突が施される。内面の竹管刺突は2個4対を一単位として3または5方向に施文されている。また頸部には2条の突帯が巡り、3～4列の竹管刺突列がみられる。3は古井式甕脚台部。1～3・5の時期は長床式期・古井式期後葉にあたる。4は廻間I式期前半の高坏脚部で、混入の可能性がある。

98A区SB01 6は古井式甕で、口縁端面にイタ刺突がみられる。8は凹線文系細頸壺で、頸部から体部にかけてクシ直線文・波状文が、口縁端面にはヘラによる波状文が描かれる。時期は長床式期・古井式期後葉か。7は二枚貝による条痕が施された深鉢。

98A区SD02 9は凹線文系の袋状口縁細頸壺。口縁部にはイタによる凹線、頸部にはクシ連続刺突・

直線文が描かれる。体部の調整はミガキ調整か。

98A区SK106 10は古井式前葉の太頸壺体部で、へうによる弧文・直線文、不揃いなハケによる弧文、貝による連続刺突が施されている。

98A区 11は凹線文系太頸壺で、口縁端面にイタによる凹線、頸部にイタによる連続刺突がみられる。

98D区SK03 12はナデ調整の太頸壺の口縁部で、端部が折り返されている。時期は廻間I式期か。

98D区SK06 13は山中式中期の甕で、口縁端部角にイタによる連続刺突がみられる。内面は頸部付近までケズリ成形・調整される。

98D区SK06 14は山中式中期付甕で、外面はナデ・ハケ調整されている。

98D区SK11・12 隣接した2つの土坑より各々1個（SK11-16、SK12-17）のガラス玉が出土している。色は青色（ターコイズブルー）を呈する。

98E区SK26 18はハケ・ミガキ調整される短頸壺。時期は山中式期か。

98H区SK04 19は朝日式太頸壺で、頸部外面に貝またはイタによる直線文が施されている。15は下呂石製の石鐿。

98F区SK112 20は山中式中期中葉の太頸壺で、頸部に1条の突帯が巡り、体部にクシによる直線文・波状文が施される。

98F区SK101 21は太頸壺体部で、外面はハケ・ミガキ調整、内面はハケ・ナデ・ケズリ調整される。22は口縁部がやや外湾して直立気味に延びる平底甕で、外面には多量の煤が付着している。煤のため不明瞭ではあるが、上位のハケ調整→下位のケズリ成形・調整が行われている。内面はナデ調整。時期は廻間I～II式期。

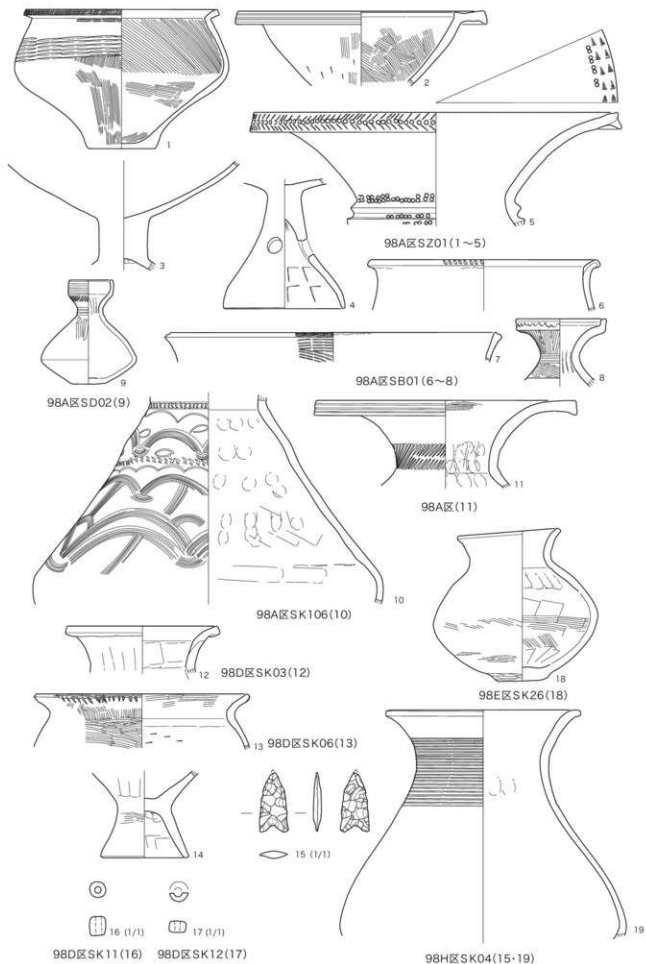
98F区SX102 23は凹線文系太頸壺で、頸部にクシによる連続刺突が施される。時期は長床式期～八王子古宮式期になる。

98F区SD106 24は外内面ともケズリ調整されるく字状口縁甕、25は外湾して直立気味に延びる口縁部をもつ平底甕で、外面はハケ調整、内面はナデ・ハケ調整される。外面のハケ調整は、下位に放射状→中位から上位に縦位の順で施される。時期は廻間I～II式期になるか。

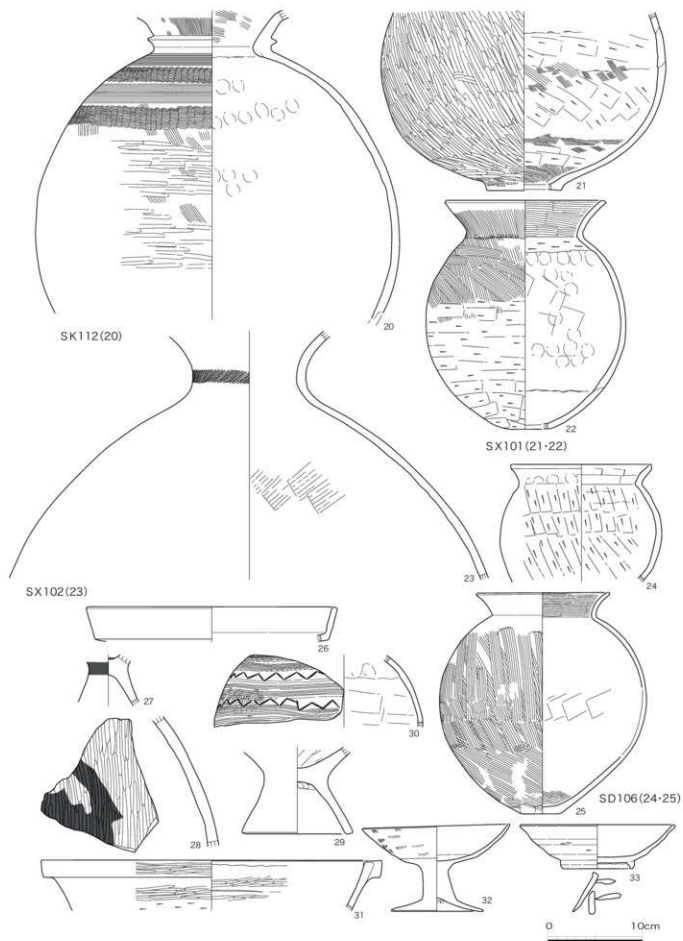
98F区 26は八王子古宮式の有稜高坏、27も八王子古宮式の高坏脚部で上部に赤彩帯が巡る。28は赤彩された壺体部、29は山中式付甕、30はクシにより直線文・山形文が描かれる廻間I～II式加飾太頸壺で、山形文上に赤彩が施される。31は口縁端部が幅広く横位に拡張されるもので、ケズリ成形・調整・ミガキ調整される。廻間I～II式期の鉢か。32は松河戸式の屈折脚の高坏。

・古代

33は灰軸陶器である。98F区のトレンチから出土しており、三日月高台を有し、高台内には「仁」と思われる墨書がみとめられる。器面は摩滅がすすんでいるが、口縁内外には軸がつけかけられた痕跡が観察できる。形態的特徴からは、折戸53号窯式期の様相がみとめられる。



第19图 出土遺物実測図(1)



第20図 出土遺物実測図(2) ※全て98F区

第VI章 まとめ

今回の調査では、鉄塔移設予定地8ヶ所に調査区が設定されたが、それぞれの地点によって様相が異なった。各調査地点脇の鹿乗川は、碧海台地の縁を南流する。この流路は、近年の改修工事によって人工的に直行されたものであり、本来のものではない。今回の調査区が並ぶ碧海台地東側は、地質図にも表されるように小規模な浅谷が入り、台地縁辺が舌状に形成されている。現鹿乗川は、こうした縁辺部に流路が定められたため、これに沿う各調査区では、地点ごとに異なった様相を呈し、調査区によって遺構の濃淡が顕著であった。

・空間的特質

各調査区の成果を概観すると、A区は亀塚遺跡の指定範囲外縁にあたり、竪穴住居跡が検出され、弥生時代中期後葉にはこの地点が居住域であったことが確認された。この他には、出土遺物に時期差があるもの、溝が方形に回る遺構も検出され、弥生時代末～古墳時代前期には墓域として構成された可能性も視野に入れたい。

B・C区では、人為的な痕跡がきわめて希薄で、獅子塚古墳・姫小川古墳とは至近でありながら、混入品と思われる遺物細片のみが検出された。

D・E区では、一定量の遺構が検出されたが、掘削が明瞭な遺構は少なく、比較的明瞭であった数条の溝は、すめられる近隣の調査によりその性格の解明が待たれる。

F区では、断定できないまでも、方形周溝墓の可能性が高い遺構が検出され、これらにともなう遺存度の良好な壺・甕も出土し、弥生時代末期という时期的な判断から、北側に近接する下懸遺跡の墓域にあたる可能性が確認された。

G区はB・C区同様に遺構・遺物が希薄で、近接する遺跡との関連性は残念ながら見いだせなかった。

H区は惣作遺跡の指定範囲内にあたるが、基盤層が高く上部堆積層は耕作地造成などで削平された可能性がある。調査区北辺にて、いくつかの調査区外にのびる遺構が集中したが、これにともなう弥生時代中・後期の遺物が出土していて、このH区の北側にはこの時期の遺構が多く展開する可能性があるかがある。

これらの調査結果をふまえて、調査地点を全体的に概観する。現在の西鹿乗川と鹿乗川が合流する地点では、碧海台地が舌状にのびた広がり亀塚遺跡が所在し、その集落、墓域としての端部はA区に及んでいたと思われる。B～E区・G区周辺では台地の縁辺と沖積平野が錯綜するが、各調査地点には明確な集落、墓域等の痕跡がみとめられないため、現在に至るまで何らかの目的で積極的に利用された可能性は少ないものと思われる。F区では、台地の縁辺部が墓域として利用された可能性が考えられ、时期的な関連性から北側に近接する集落の墓域が想定される。H区では、調査区北辺の小規模な土坑、溝の集中状況、遺構検出面の高さなどから、その北側を中心にして集落にともなう遺構が展開したことも想定できよう。したがって、今回調査した鹿乗川流域の各地点は、碧海台地の舌状にのびる縁辺と沖積平野が錯綜する中で、その地理的な環境を利用した居住域、墓域などが、必要に

じて微高地を中心に利用されたものと考えられる。

・ 時期的解釈

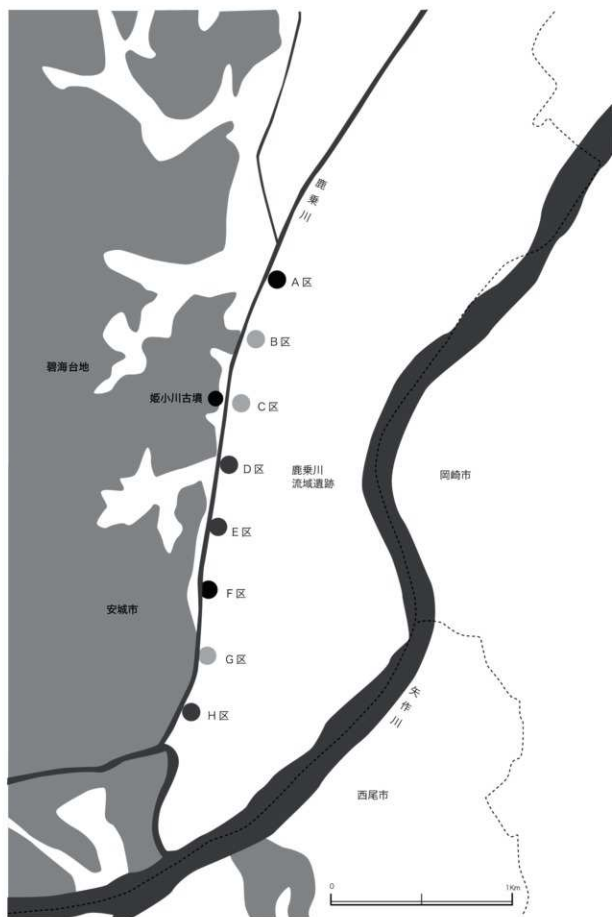
今回の調査における出土遺物で、A区からH区においてもっとも古い様相が見られたのは、弥生時代中期前葉の壺片が検出されたH区であった。この壺はトレンチ内遺構での検出であったため、遺構の全体的な平面プランが未解明である。しかし、この調査区の北側に向かって溝、土坑等の遺構が集中してのびているため、H区北方が少なくとも弥生時代中期の早い段階において、人為的な掘削行為に利用されていたことは確かであろう。このH区も含めて、今回の各調査地点では、長期的に継続して利用された痕跡は、どの地点においても確認できなかった。鹿乗川や矢作川などの河川による自然的な要因で、安定して利用できる環境にはなかったことを示しているのかもしれない。次に、弥生時代中期末から後期にかけての遺物が一定量出土したのは、A区である。中心城が近接するものと思われる亀塚遺跡は、弥生時代後期～古墳時代前期を主体としていると思われるが、その消長と考え合わせると、遺跡範囲の北辺にあたるA区において古墳時代前期の遺物が主体を為さないことは、遺跡の空間利用を考えると興味深い。F区では、弥生時代中期末から古墳時代前期の遺物が検出されているが、特に弥生時代末から古墳時代前期の遺物を主体とし、これらは方形周溝墓の可能性が考えられる遺構からの出土であることから、北側に近接する下懸遺跡の墓域展開を考える上で、関連資料となるものと思われる。

・ 結語

今回の調査では鹿乗川の改修に関連して、高圧線鉄塔の移設作業にともない、碧海台地の緑辺部に予定された移設地点を、南北2.4km間で8ヶ所の掘削作業を行い、そこで検出された遺構・遺物について整理報告をした。これらは、一ヶ所の調査面積が10m×10mと狭く、碧海台地緑辺部の全体像をうかがうにはほど遠いものがあり、遺跡分布地図に記載された各遺跡がどのように空間を利用していたのか、判断できるほどの材料が得られなかった。しかし、こうした各遺跡の全容を把握するためには、今回のような調査事例の積み重ねとさらなる資料の増加が必要となる。今回の調査資料と報告は、今後における各遺跡の全容解明に向けて、有効な資料となるであろう。

参考文献

安城市史編集委員会 2004 『新編 安城市史10 資料編考古』 安城市



第21図 調査地点周辺図

写
真
图
版

写真図版目次

図版1

- (1) 98A区上面全景 (北西から)
- (2) 98A区下面全景 (南西から)
- (3) 98A区SX01全景 (南西から)
- (4) 98A区SX01東隅 (南から)
- (5) 98A区SX01断面 (北西から)
- (6) 98A区SX01断面 (南から)
- (7) 98A区SX01断面 (東から)
- (8) 98A区SD03断面 (北から)

図版2

- (1) 98A区SB01断面 (南から)
- (2) 98A区SB01完掘状況 (東から)
- (3) 98B区全景 (西から)
- (4) 98B区北壁断面 (南から)
- (5) 98C区全景 (西から)
- (6) 98C区北壁断面 (南から)
- (7) 98D区全景 (西から)
- (8) 98D区北壁断面 (南東から)

図版3

- (1) 98D区SK08付近 (東から)
- (2) 98D区SD01・SD02 (東から)
- (3) 98D区SD02断面 (東から)
- (4) 98D区SK08断面 (東から)
- (5) 98D区SK03~SK06付近 (北から)
- (6) 98D区SX03付近 (南から)
- (7) 98E区南側全景 (北西から)
- (8) 98E区SK26断面 (南東から)

図版4

- (1) 98E区北側全景 (北西から)
- (2) 98E区全景 (北西から)
- (3) 98F区全景 (東から)
- (4) 98F区SX101 (南西から)
- (5) 98F区SX101断面 (西から)
- (6) 98F区SX101出土状況 (北西から)
- (7) 98F区SK112出土状況 (西から)
- (8) 98F区SD106出土状況 (南西から)

図版5

- (1) 98G区全景 (北西から)
- (2) 98G区西壁断面 (南東から)
- (3) 98G区近景 (北西から)
- (4) 98G区SD01・SX02 (東から)
- (5) 98H区全景 (南東から)
- (6) 98H区SD01・SD02周辺 (北西から)
- (7) 98H区北壁断面 (南から)
- (8) 98H区北壁出土状況 (南から)

図版6

- 遺物写真 (1)

図版7

- 遺物写真 (2)

A区



(1) 上面全景 (北西から)



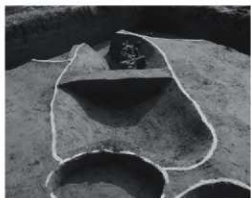
(2) 下面全景 (南西から)



(3) SX01 全景 (南西から)



(4) SX01 東隅 (南から)



(5) SX01 断面 (北西から)



(6) SX01 断面 (南から)



(7) SX01 断面 (東から)



(8) SD03 断面 (北から)

A区



(1) SB01 断面 (南から)



(2) SB01 平面状況 (東から)

B区



(3) 全景 (西から)



(4) 北壁断面 (南から)

C区



(5) 全景 (西から)



(6) 北壁断面 (南から)

D区



(7) 全景 (西から)



(8) 北壁断面 (南東から)

D区



(1) SK08付近 (東から)



(2) SD01・02 (東から)



(3) SD02 断面 (東から)



(4) SK08 断面 (東から)



(5) SK03~SK06 付近 (北から)



(6) SX03 付近 (南から)

E区



(7) 南側全景 (北西から)



(8) SK26 断面 (南東から)

E区



(1) 北側全景 (北西から)



(2) 全景 (北西から)

F区



(3) 全景 (東から)



(4) SX101 (南西から)



(5) SX101 断面 (西から)



(6) SX01 出土状況 (北西から)



(7) SK112 出土状況 (西から)



(8) SD106 出土状況 (南西から)

G区



(1) 全景 (北西から)



(2) 西壁断面 (南東から)



(3) 近景 (北西から)



(4) SD01・SX02 (東から)

H区



(5) 全景 (南東から)



(6) SD01・02 周辺 (北西から)



(7) 北壁断面 (南から)



(8) 北壁 出土状況 (南から)



1



3



4



5



8



9



11



18



19



20



報告書抄録

ふりがな	かのりがわりゆういきいせきぐん
書名	鹿乗川流域遺跡群
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第145集
編集者名	松田 訓・宮腰健司
編集機関	愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須新田野方802-24 ℡0567-67-4161
発行年月日	西暦 2007年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
鹿乗川流域遺跡群	愛知県安城市	23213	5436ほか	34°55'17"	137°05'54"	98.10.13 \ 99.3.19	800	鹿乗川改修工事に伴う発掘調査
				34°55'06"	137°05'53"			
				34°54'55"	137°05'50"			
				34°54'44"	137°05'48"			
				34°54'33"	137°05'45"			
				34°54'21"	137°05'47"			
				34°54'10"	137°05'43"			
				34°53'60"	137°05'40"			

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鹿乗川流域遺跡群	集落/墓域	弥生～近世	堀穴住居 方形埴輪墓	弥生土器・土師器 灰釉陶器	鹿乗川流域の舊海台地縁辺部確認

文書番号	発掘届出 (10理セ第212号・1998.9.1) 通知 (10教文第61-22号・1998.9.28) 終了届・保管証・発見届 (10理セ・1999.3.29) 鑑査結果通知 (10教文第61-22号・1999.5.18)
------	--

要約	調査は、高任線鉄塔移設予定地8ヶ所に、それぞれ一辺10mの正方形で調査区が設定された。全調査区は舊海台地縁辺部にあたり、旧態が水田で、少ないながら弥生時代中期末葉～古墳時代前期にかけての遺構、遺物が検出された。
----	---

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第145集

上橋下遺跡
鹿乗川流域遺跡群

2007年3月31日

編集発行 財団法人 愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

印刷 新日本法規株式会社